

X-14 (図IV-84)

位置 T-19

規模 1.05×0.92/0.91×0.71/0.40

特徴 調査区西部の平坦面にある。Ⅲ層上面で土器がつぶれた状態で出土し、その周囲1×1mほどの範囲で小礫が確認できた。東西方向にトレンチを掘った結果、墳底から骨の一部が検出された。掘り込み面はⅢa層でV層を少し掘り込む程度の深さである。平面形はほぼ円形。底は平坦で、壁は全周で急に立ち上がる。墳底で検出された骨は糊状になっていて、かろうじて輪郭が分かる程度の保存状態であったが、北西方向に頭を向けた屈葬と推定される。

遺物の出土状態 底及び上面からⅥ群土器が出土している。上面から甕形土器2個体、台付き鉢1個体がつぶれた状態で出土した。墳底では頭部と推定される部分の傍から完形の甕形土器1個、石鏝が2点出土した。

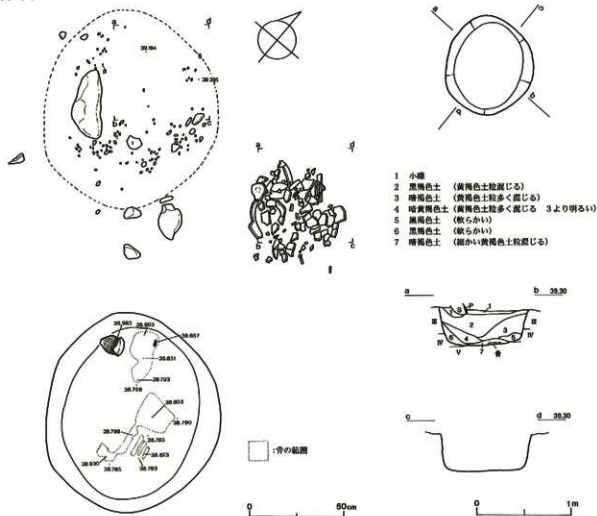
遺物 (図IV-85)

土器: 出土資料のうちⅥ群土器を図示する。

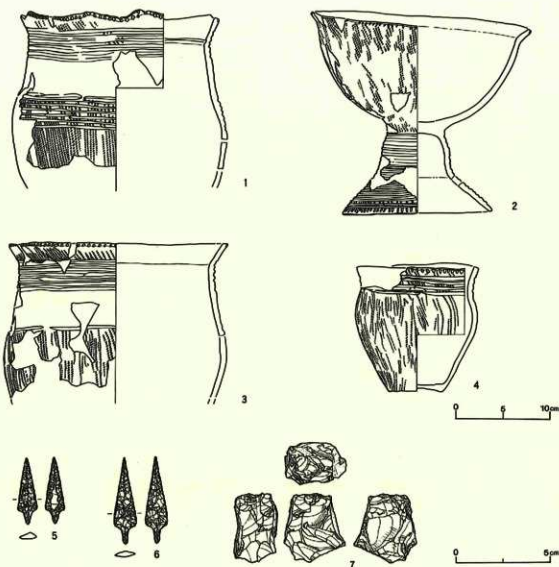
上面出土の資料 (1~3)

1、3は甕。肩の張りが弱く、頸部が内傾するもので、頸部には無文帯が残る。無文帯の上下は横走沈線で区画されている。1は波状口縁、3は平縁である。2は台付き鉢。口縁部は外反し、体部に

X-14



図IV-84 X-14



図IV-85 X-14出土の遺物

は全面に縄文が施されている。台部は裾が雄大に開くもので、台の上部から裾まで沈線文が幾重にもめぐる。裾には刻み目が施されている。

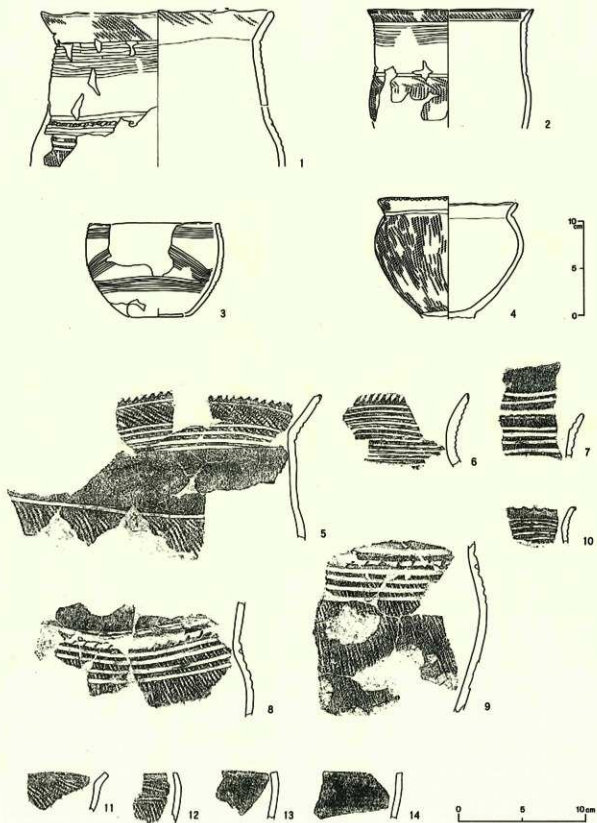
墳底出土の資料(1)

4は遺体の傍から出土した小型の甕。肩から頸部にかけて一連の曲線を描き、その境が不明瞭なもの。口縁部は少し外反する。口縁部には横走沈線が4条めぐり、口唇の角には刻み目が施される。

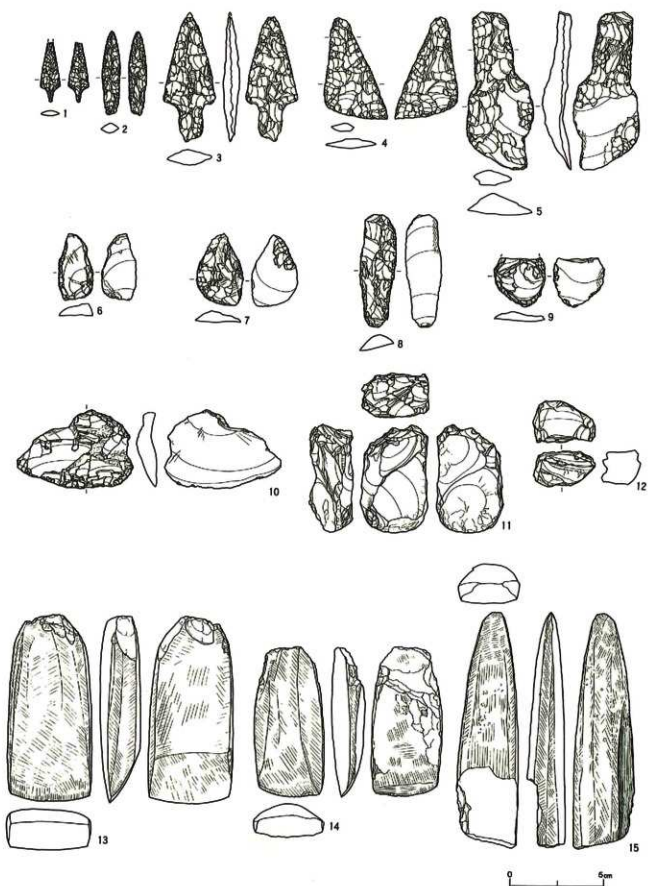
(工藤研治)

石器：覆土から石鏃(5・6)、剥片、礫・礫片、石製品片が出土し、上面からは石核(7)、剥片、原石、礫・礫片が出土している。5、6は有茎凸基の石鏃。5は茎部末端が尖頭状を呈し、裏面に素材面を残す。6は細長い茎部をもち、返しが丸みを帯びる。7は石核。

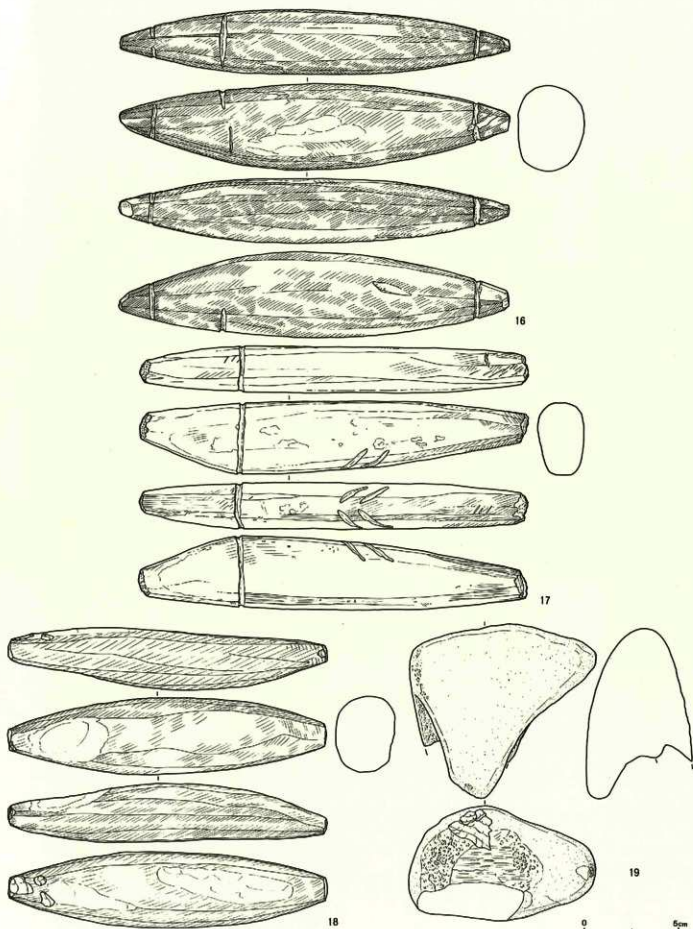
(広田良成)



図IV-87 X-15出土の土器

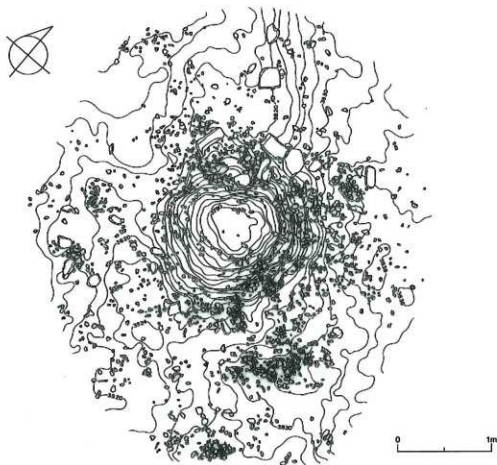


図IV-88 X-15出土の石器



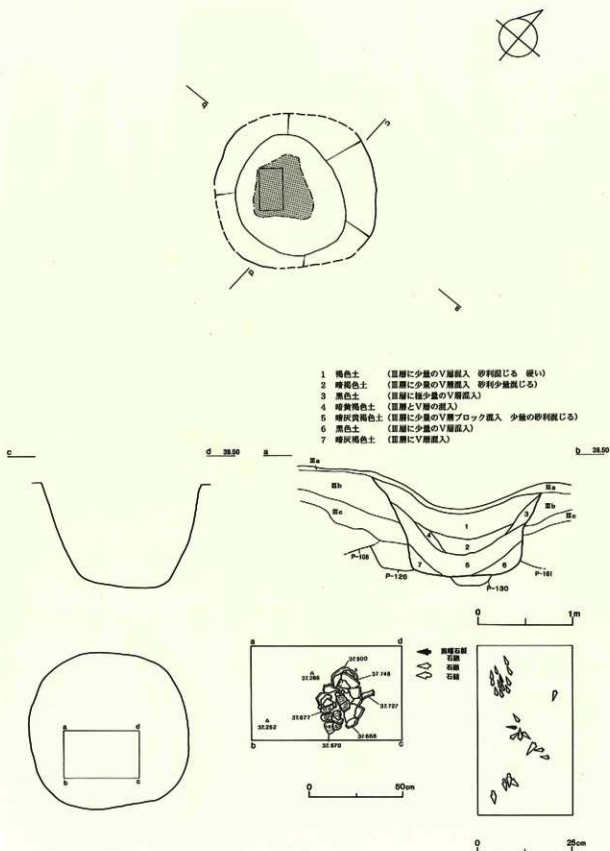
図IV-89 X-15出土の石製品

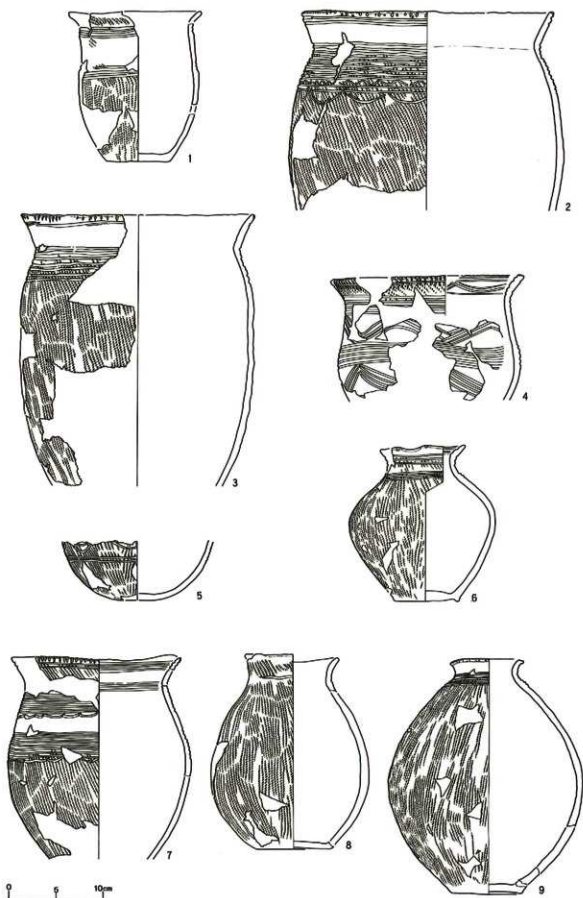
X-16



図IV-90 X-16上面遺物出土状況

X-16





図IV-92 X-16出土の遺物(1)

側縁に素材の屈曲を残す。6は背面の周縁部に加工が施される。他の靴形石器と異なり打面側を下にする。7は片面加工のもの。末端部から側縁にかけて湾曲する刃部が作り出される。8～10はスクレイパー。8は柄部と刃部が不明瞭だが刃部再生を行った結果、身と柄の間の段がなくなったものと考えられる。9は上部を欠失する。10は横長剥片素材のスクレイパー。打面部及び末端部にやや外湾する刃部を作り出す。11、12は石核。13～15は磨製石斧。13、14は片刃で刃縁は直線状を呈する直刃である。13は基端部に欠失が認められ、全面縦及び斜方向の研磨が施される。刃部は縦方向の研磨により研ぎ出され、刃縁はわずかに外湾する。14は基部に大きな剥落が認められる。刃縁は偏る。15は棒状を呈し、刃部を大きく欠失する。裏面右側縁に擦り切り痕が認められる。16～18は魚形石器。19は未分類石製品。外側は素材の稜の形状を生かし、内側のみ敲打及び研磨を加え整形している。

(広田良成)

X-16 (図IV-90・91)

位置 P-14

規模 $1.80 \times 1.60 / 1.30 \times 1.10 / 1.04$

特徴 調査区西側の台地縁辺部に位置する。Ⅰ・Ⅱ層を除去後、円形の窪みを確認した。平面形は隅丸方形である。覆土はⅢ・Ⅴ層が混入し、地山のブロックが含まれる埋め戻しである。覆土上部には砂利が多く含まれている。墳底はほぼ平坦である。壁は墳底から垂直に立ち上がり、中位から大きく開く。壁や墳底の一部は縄文時代早期の粘土採掘穴状土壌群と重複している。墳底の直上からはベンガラが確認されている。土壌の中央からやや西側に広がっている。

遺物の出土状態 墳底から石鈎と石鏃が出土している。これらは土壌の西側でまとまって出土した。石鈎は4点出土し、その内3点が南東方向に先端部に向けた状態で出土している。石鏃は21点出土している。そのうち12点が先端部を北西方向に向けた状態で出土している。8点はまとまりはあるが先端の方向はまちまちである。覆土上部からは壺形土器が一個体潰れた状態で出土した(図IV-91)。上面の墳口周辺からは小石に混じり、土器片が多数出土している。

(佐藤和雄)

遺物 (図IV-92～94)

土器：出土した資料のうちⅥ群土器を図示する。

上面出土の資料(1～6、10～13)

1～3は甕。1は肩の張りが弱く頸部がやや内傾するもので、頸部には上下を沈線文で区画された無文帯が残る。2、3は肩と頸部の境界が不明瞭で一連の曲線を描くもの。頸部には横走沈線がめぐり、3には小波状沈線も施されている。4は甕若しくは鉢。体下半を欠く。体部から頸部にかけて無文地に横走沈線と大柄な鋸歯状の沈線文が施されている。口縁部の内側にも沈線文が施されている。5は丸底を呈する体下半部の資料。6は壺。最大径が体中央部にあり、肩が強く張り出す。12は口縁部に沈線文が施された鉢若しくは浅鉢。

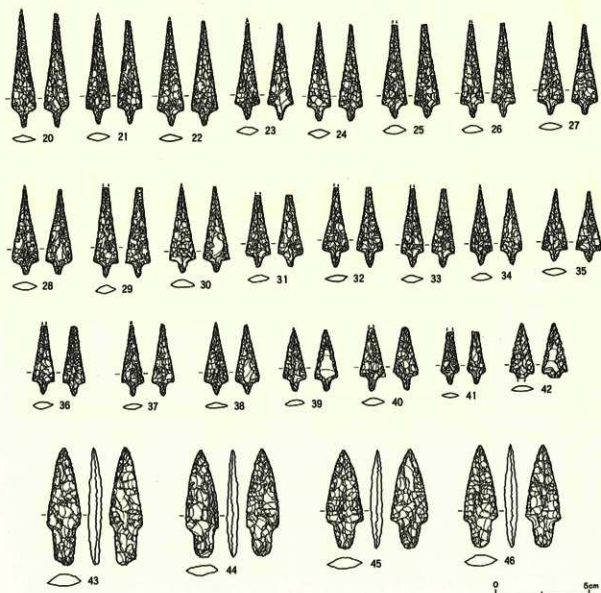
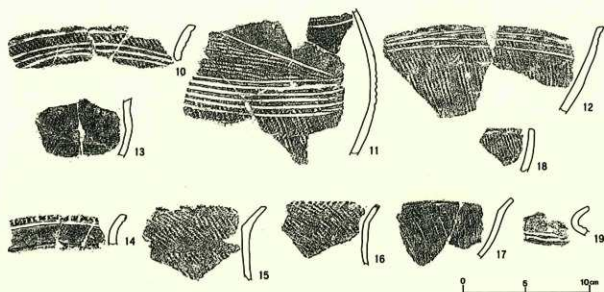
覆土出土の資料(7～9、14～19)

7は肩と頸部の境界が不明瞭で一連の曲線を描く甕。頸上部と肩部には横走沈線がめぐり、その間は無文帯となる。横走沈線の下縁には小波状沈線が施されている。8、9は壺。8は最大径が体下部にあり、全面に縄文が施されている。頸部と体部の境には途中で切れる横走沈線が1条施されている。9は最大径が体中部にあるもので、頸部から体上部にかけて横走沈線が施され、その下縁には小波状沈線が施されている。14～16は甕と考えられる口縁部の資料。17、18は鉢若しくは浅鉢。19は壺と考えられる口縁部の資料。

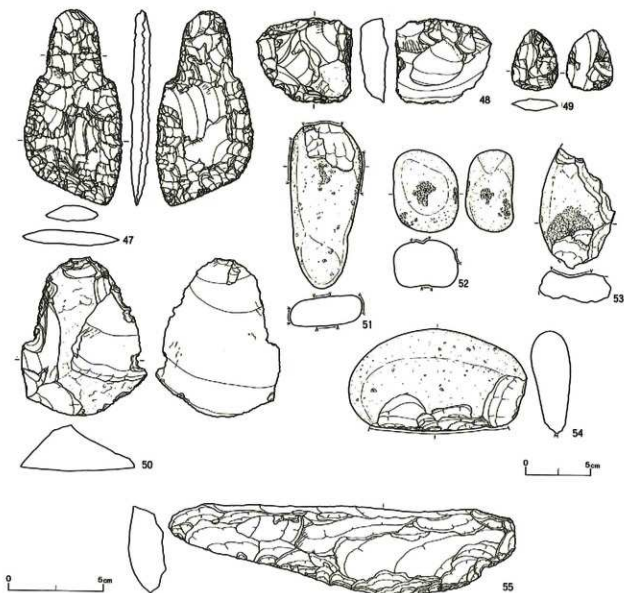
(工藤研治)

石器：墳底から石鏃（20～42）石鈎（43～46）が出土している。覆土からは石鏃、スクレイパー（49・50）、剥片、たたき石（51～53）、すり石（54）、礫・礫片、が出土している。上面からは石鏃（42）、靴形石器（47）、スクレイパー、（48）剥片、石皿・台石、礫・礫片、魚形石器（55）、石製品剥片が出土している。20～42は石鏃。全て精巧な加工により狭長に仕上げられている。先端部を欠失するものが多く、意図的に折っている可能性がある。側縁は直線状もしくは浅く内湾する。42は作りがやや雑である。43～46は石鈎。定型的な傾向がみられ、幅が狭く、茎部の幅とあまり変わらないものが多い。側縁はいずれもやや外湾する。47は靴形石器。両面加工で明瞭に柄部が認められる。刃部は柄に対して斜めに付けられ、刃縁は直線状を呈す。48～50はスクレイパー。48は打面側を除く3辺に刃部が作り出される。49は片面調整のもの。50は背面両側縁に刃部が作り出される。51～53はたたき石。51は端部、周縁部及び平坦面にたたき痕をもつ。53は周縁部には大きな剥離によるたたき痕が、平坦面には敲打によるたたき痕が認められる。切り合いから平坦面を使用した後、周縁をたたいていることがわかる。54はすり石。礫の一侧縁に両面から打ち欠きを施し、細いすり面を作り出す。55は魚形石器未成品。表面は周縁部からの加工により整形されている。裏面は自然面で、その形状から素材が大形礫であることが推定される。

（広田良成）



図Ⅳ-93 X-16出土の遺物(2)



図IV-94 X-16出土の遺物(3)

X-17・26 (図IV-95・96)

調査区南西部に位置する。Ⅲ層上面でⅡ層の火山灰の落ち込みが検出され、その周囲には小礫、土器片、剥片等が出土し、当初は1基の土墳墓(X-17)として調査を進めていたが、底面まで掘り下げ、ベルトの土層観察を行なったところ、2基の土墳墓が入れ子状に重複していることが判明した。

X-17

位置 P・O-16

規模 $1.56 \times 1.53 / 1.18 \times 1.06 / 0.88$

特徴 最初に確認された土墳墓で、X-26に切られる。掘り込み面はⅢ層上面で、底面はⅤ層に達する。平面形は円形を呈し、南東部にテラス状の浅い張り出しをもつ。壁の立上りは急で、南東部は段を有し、上段は弱くオーバーハングする。墳底は浅く窪むが、東西方向はほぼ平坦である。覆土は2層からなる。第2層はロームブロック主体の層で、構築時に掘り込んだⅤ層が埋め戻されたものと推定される。

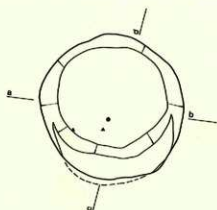
(広田良成)

X-17

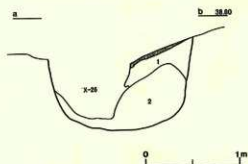
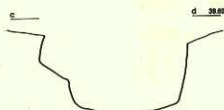


図Ⅳ-95 X-17・26上面遺物出土状況

X-17

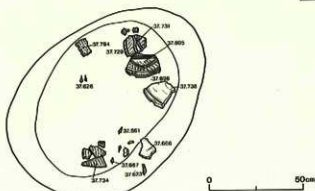
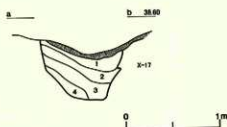
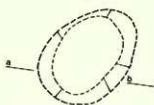


- 1 暗褐色土 (ローム散在 炭化物粒少量混じる やや硬い 粘性あり)
 2 茶褐色土 (ロームブロック多量に混じる 黒色土ブロック混じる やや硬い 粘性あり)

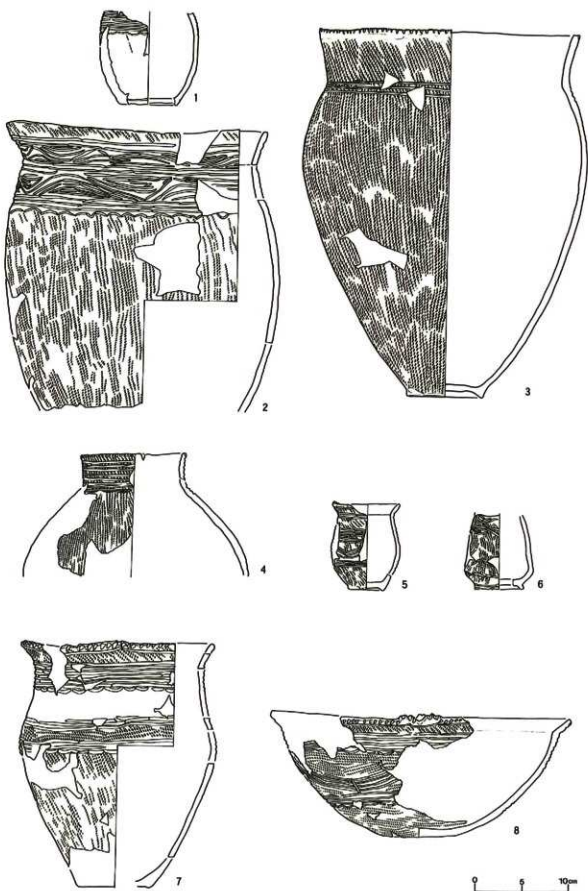


X-26

- 1 茶褐色土 (ローム粒子少量混じる 非常に硬い 粘性あり)
 2 暗褐色土 (ローム粒子、炭化物粒少量混じる 非常に硬い 粘性あり)
 3 暗褐色土 (ローム粒子、炭化物粒子混じる やや硬い 粘性あり)
 4 暗褐色土 (ローム粒子微量混じる 炭化物粒少量混じる やや軟らかい 粘性あり)



図IV-96 X-17・26



図IV-97 X-17出土の遺物(1)

遺物の出土状態 上面から数cm覆土を掘り下げると、VI群土器片及び剥片が面的にまとまって出土した。墳底から遺物は検出されなかった。当初はI基の土墳墓として調査を行っていたため、上面～覆土中部の遺物はX-17に出土しているが、正確な帰属は不明である。ただし、上面における遺物の分布はX-26のあるQ-16グリッドよりX-17のあるO・P-16グリッド付近の方が濃く、X-26の横等時にX-17上面の遺物が混ざっている可能性がある。

遺物

土 器：VI群土器を図示する。

上面出土の資料（1～3、9、10、12～14）

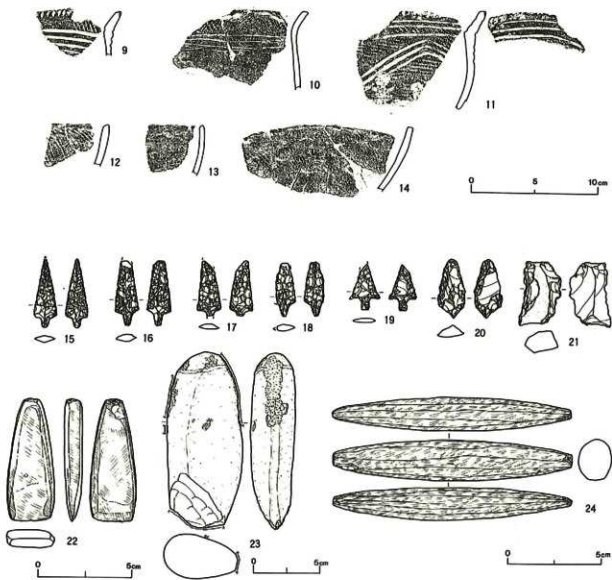
1～3は甕。1は体下半部のもの。横走沈線が施されその下縁には小波状沈線がめぐる。2、4は肩と頸部の境界が不明瞭で一連の曲線を描く平縁の甕。2は無文地の頸部に波状の沈線文が2段施され、横走沈線で区画されている。文様帯の下縁は小波状の沈線文が施されている。上面出土の資料と覆土から出土した資料が接合した。3は全面に縄文が施されたもので口縁部と体部の境界に横走沈線が3条めぐる。上面出土の資料と覆土及び墳底近くから出土した資料が接合したものである。9、10は甕とみなされる口縁部の資料。12～14は鉢若しくは浅鉢。12は縄文が施されたもの。13、14は無文のものである。

覆土出土の資料（4～8、11）

5、7は壺。肩と頸部の境界が不明瞭で一連の曲線を描くものである。5は小型の資料で、頸部から体下部にかけて鋸歯状の沈線とその上下を画する横走沈線が施されている。7は頸部に無文帯が残るもので頸上部には6条の横走沈線が施され、下縁には小波状沈線がめぐり、肩部には横走沈線で縁取られた横走する特殊縄文が施され、文線帯の下縁には小波状の沈線文が施されている。4は頸部に横走沈線がめぐり平縁の壺。頸部と肩部の境界には小波状の沈線文がめぐり、8は丸底の鉢。口縁部は外反し、山形の突起が付いている。体部には沈線で大柄な鋸歯状文が施され、上下には横走沈線がめぐり、6は口縁部を欠く小型の土器。縄文地に沈線文が施されている。11は口縁部が外反する鉢。体部には縄文地に3本単位の沈線で大柄な鋸歯状文が施されている。口縁部内面にも沈線文が施文されている。

(工藤研治)

石 器：覆土から石鏃（16～19）、靴形石器、スクレイパー（22）、剥片石器片、石核、剥片、磨製石斧、たたき石、礫・礫片、魚形石器（24）、焼成粘土塊が出土している。上面からは石鏃（15）、スクレイパー（20・21）、たたき石（23）、剥片、礫・礫片が出土している。15～20は石鏃。16～19は先端部をやや大きく欠失する。15～18は有茎凸基。15～17は丁寧な加工が施され、側縁は直線状である。18は一端の返しに欠失する。19は有茎凹基。側縁から返しにかけてやや屈曲し、基端部は角張る。20は未成品と考えられ、周縁部に浅い加工が施される。21はスクレイパー。背面左側縁に角度度の刃部を作り出す。22は小形の磨製石斧。両刃で刃縁は直線状である。23はたたき石。下端に大きな刺蝟があり、周縁に敲打による細かいたたき痕が認められる。24は魚形石器。棒状で全面横及び斜方向に研磨される。稜を有し複数の面からなるが、断面形はほぼ円形である。



図IV-98 X-17出土の遺物(2)

X-26 (図Ⅳ-95・96)

位置 Q-16

規模 $(1.16) \times (0.86) / (0.87) \times (0.59) / 0.57$

特徴 X-17の調査中に確認された土墳墓で、X-17より新しい。掘り込み面はⅢ層上面で、底面はⅤ層に達する。平面形はX-17の調査時に大部分を壊してしまい不明であるが、残存部及び遺物の分布状況から、南北に長い楕円形と推定される。残存部の壁の立上りは急で、西壁はX-17と共有する。底面は平坦で硬く締まっており、炭化物粒が少量検出された。覆土は第4層がやや軟らかいが、他は全体的にしまっている。

遺物の出土状態 墳底から鉢、石鏃、靴形石器等が出土した。鉢は、破片がややまとまって検出された。他の遺物は点在した状態で出土した。

(広田良成)

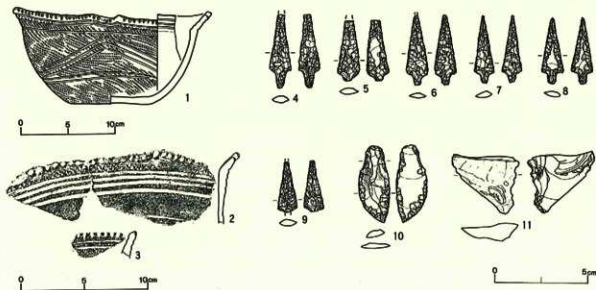
遺物 (図Ⅳ-99)

土器: VI群土器を図示する。1は墳底から出土した鉢。口縁部は外反し、体部には縄文地に沈線で大柄な鋸歯状文が描かれ、その上下は横走沈線で区画されている。体部には赤色顔料が塗られている。2、3は覆土から出土したものの。2は頸部に無文帯が残る甕の口縁部である。

(工藤研治)

石器: 墳底から石鏃(4~9)、靴形石器(10)、剥片、礫・礫片が出土している。覆土から両面調整石器、スクレイパー(11)、剥片、たたき石、礫・礫片が出土している。4~9は石鏃。全て有茎凸基で、丁寧な加工により狭長に仕上げられている。4~6は先端が、9は先端部及び基部が折れている。5は基部が不明瞭である。5、8は素材面を残す。10は靴形石器。両面周縁加工で外湾する刃部をもつ。刃部は柄に対して斜めに付けられ、先端部は尖る。11はスクレイパー。腹面左側縁に刃部をもつ。

(広田良成)



図Ⅳ-99 X-26出土の遺物

X-20 (図IV-100~103)

位置 R-15

規模 $1.93 \times 1.41 / 1.84 \times 1.22 / 0.86$

特徴 調査区南西部の平坦面にあり、X-21に隣接している。Ⅲ層上面で浅い西洋梨形の窪みが確認でき、窪地とその周囲の広い範囲には小礫が密に分布していた。(図IV-100)。窪みの長軸方向(東-西)に土層観察用のベルトを残して小礫を除去し、南側を半割して調査した。その結果、平面が円形の深い土壌と浅い西洋梨形の土壌(図IV-103)が重複していることが分かった。浅い土壌は深い土壌が埋め戻されてから掘り込まれているが、土壌全体が小礫で覆われるのは浅い土壌が埋め戻されてからであることや土壌の陥没はその後に起こっていることから、埋葬過程における一連の行為と解釈し、一つの遺構として扱っている。平面が円形の土壌はV層を深く掘り込み、東側ではH-18を切っている。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。覆土の最下層には黒褐色土にV層の黄褐色土が斑状に混じる暗黄褐色土、その上位には暗褐色土が堆積し、概ねV層の黄褐色土を先に埋め戻していることが分かる。覆土は最下層から落ち込んでいる。西洋梨形の土壌は浅く、IV層までしか掘り込んでいない。底は東側に向かって浅くなり、壁は緩やかに立ち上がる。覆土4・5層が浅い土壌の覆土である。

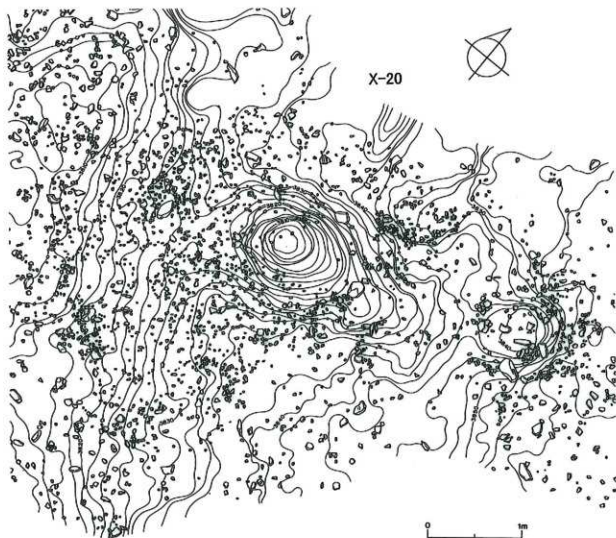
遺物の出土状況 上面の小礫層から魚形石器が2点出土した。小礫には土器片と頁岩の剥片が多量に混じっており、大型の礫もいくつか点在していた。小礫層除去後、土壌の窪地から甕形や壺形のVI群土器がつぶれた状態で出土した(図IV-102)。墳底では北西部から甕形土器が2個体、重なってつぶれた状態で出土したほか、石鏃7点、剥片4点、石斧2点、石製品が1点出土した。浅い土壌の底からもVI群土器がまとまって出土している(図IV-103)。

遺物 (図IV-104~107)

土器：出土資料のうちVI群土器を図示する。

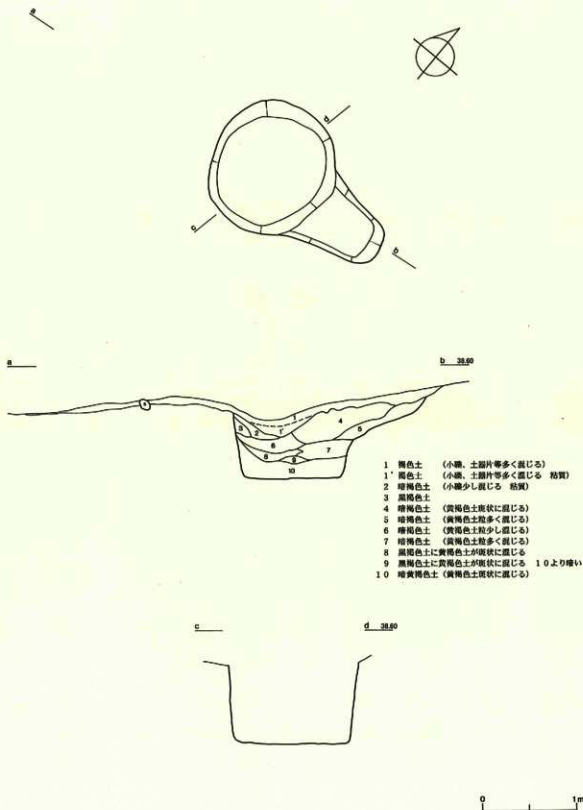
上面出土の資料(1~11、19~25)

1、2は甕。1は肩の張りが弱く頸部が内傾する平縁の土器で、頸部には無文帯がある。無文帯の上下は横走沈線で区画され、肩部の横走沈線下縁には小波状の沈線文が施されている。口縁部内面にも沈線文が施されている。2は縄文が施された平縁のもの。3~6、8は鉢。3、4は口縁部が外反する平縁のもの。3には口縁部と体上部に数条単位の横走沈線が施されている。4は口縁直下に横走沈線が数条めぐる。5は口縁部が内傾する大型のもの。口縁部には2か所山形の突起があり、突起部から短い棒状の貼付帯が垂下する。貼付帯の下位には貫通孔が1個ある。口縁部には5条の横走沈線がめぐり、その下位には4条単位の沈線で大柄な鋸歯状文が描かれ、下縁は1条の沈線文で画されている。文様帯内には横走する特殊縄文が施されている。6は口縁部が外反するもので、2個1組の小突起が2か所付く。体部には沈線で大柄な鋸歯状文が施され、その上下は横走沈線で区画されている。8は口縁部が外に開くもので全面に縄文が施されている。口縁部内面に縄文と沈線文が施されている。7は鉢と壺の中間的な形態のもので、口縁部は強く外反する。体上部には4条の横走沈線が施され、下縁には小波状沈線がめぐる。口縁部内面に縄文が施されている。9~11は壺。9、11は体部に沈線で連続する菱形の文様が描かれたもので、隔列に横走する特殊縄文が施されている。頸部と体部の境には隆起帯がめぐる。9の隆起帯上には刺突文が施され、11には棒状の工具による刻み目が施されている。9は口縁部の内面に縄文が施されている。10は肩部に緩やかな鋸歯状沈線と横走沈線で文様が描かれている。19、20は甕、21~23は鉢若しくは浅鉢の口縁部。24、25は土器の注ぎ口かとみられるもので、器形は明らかでない。仮に口を上に向けた状態で図示した。25は覆土出土の27と同一個体と考えられる。1~4、7、9、11は上面出土の資料と覆土から出土した資料が接合したものである。



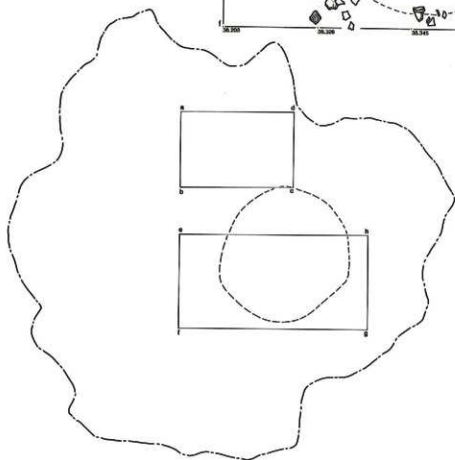
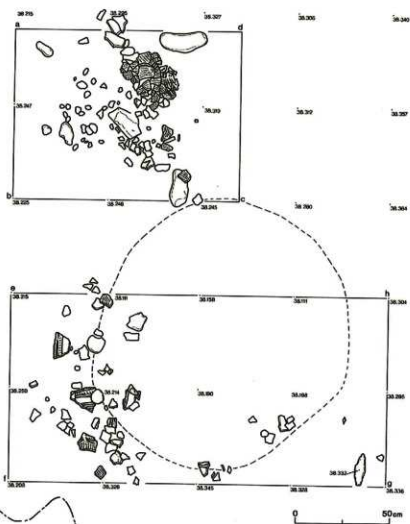
図Ⅳ-100 X-20上面遺物出土状況

X-20

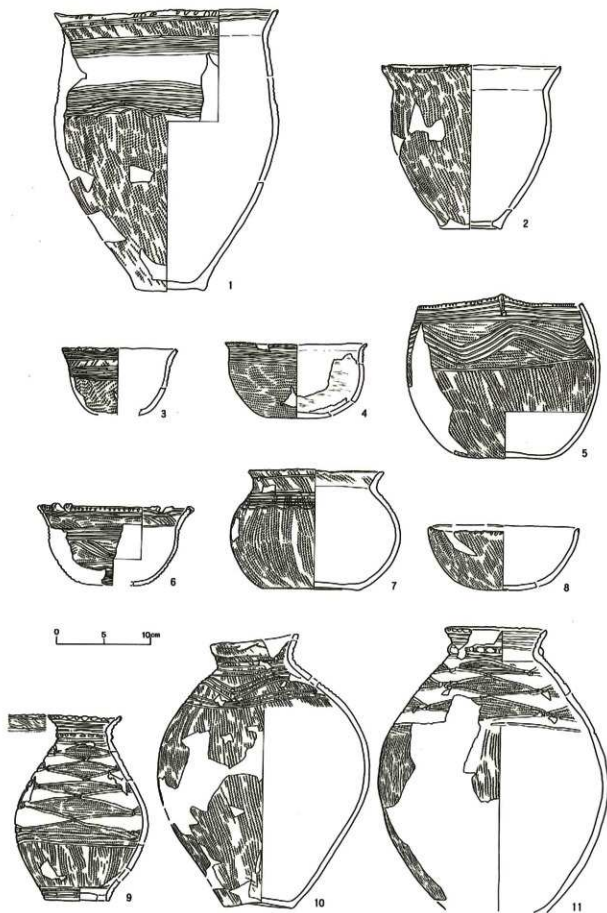


図IV-101 X-20(1)

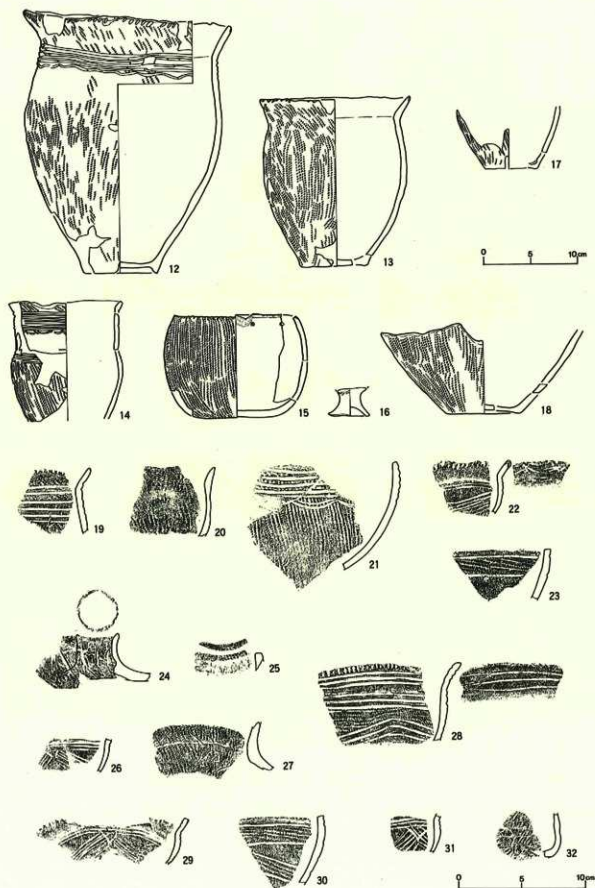
X-20



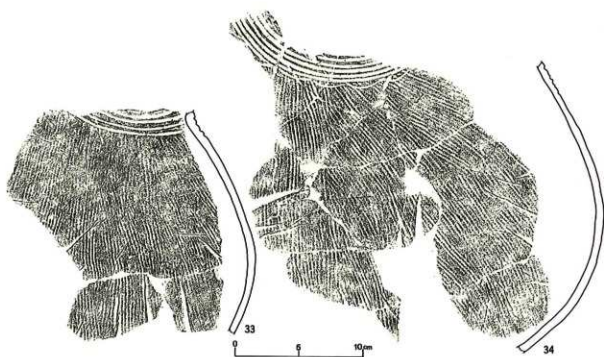
图IV-102 X-20(2)



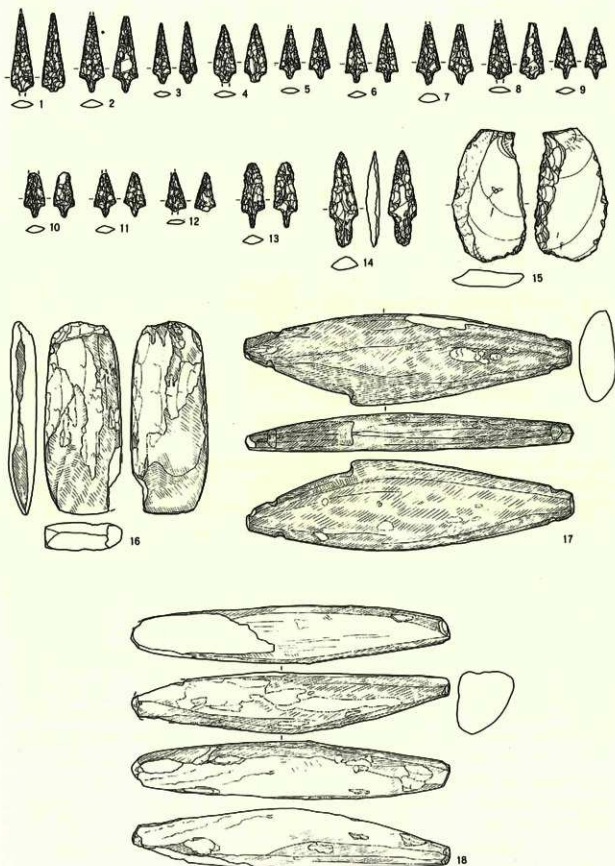
図IV-104 X-20出土の土器(1)



図Ⅳ-105 X-20出土の土器(2)



図IV-106 X-20出土の土器(3)



図IV-107 X-20出土の石器・石製品

X-21 (図IV-108・109)

位置 R-15

規模 1.43×1.42/1.27×1.04/0.95

特徴 調査区南西部の平坦面にあり、X-20、X-24に隣接している。Ⅲ層上面で浅い窪地が検出され、窪地とその周囲には小礫とともに土器片や剥片が散布していた。散布範囲は狭い。小礫を除去した後、窪地の南側を半割して底と壁を確認した。平面形はほぼ円形。底は平坦で壁は急に立ち上がる。覆土は墳底付近で大きく落ち込んでいるが、小礫層の落ち込みはそれほど顕著ではない。H-17、P-99を切っている。

遺物の出土状況 上面の小礫に混じて土器片や剥片が多量に出土した。つぶれた状態でまとまって出土した土器はない。墳底の北部から石鏃が7点、管玉が1点出土した。

遺物 (図IV-110~112)

土器：出土資料のうちⅥ群土器を図示した。

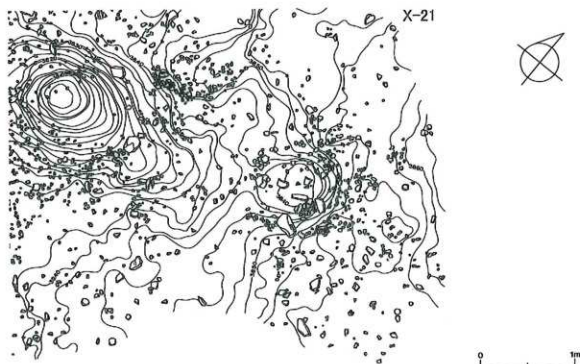
上面出土の資料 (1、2、3)

1、2は甕。1は肩と頸部の境が不明瞭で一連の曲線を描き、頸部が内傾する平縁の土器である。全面に縦走ぎみの縄文が施されている。口唇角には刻み目が付いている。2は体上部が張り出して丸みを帯びるもの。平縁で口唇の角には刻み目が施されている。口縁部から体下半部にかけては縦走縄文、底部には幅の狭い横走縄文が施されている。1、2は上面出土の資料と覆土6層下部から出土した資料が接合したものである。3は大型の甕。頸部に無文帯があり、頸上部と肩部には沈線文が施されている。肩部の沈線文帯では沈線間に刺突列がめぐり、下縁には鋸歯状の沈線文が施される。この刺突文は棒状工具を斜め方向から器面に押し当てて施文されたものである。口唇の角には刻み目が施される。口縁部内面にも沈線文が施されている。肩部から口縁部にかけての部分はP-112の覆土下部土から出土したもので、本来P-112の副葬品であった可能性が高い。

覆土出土の資料 (4~12)

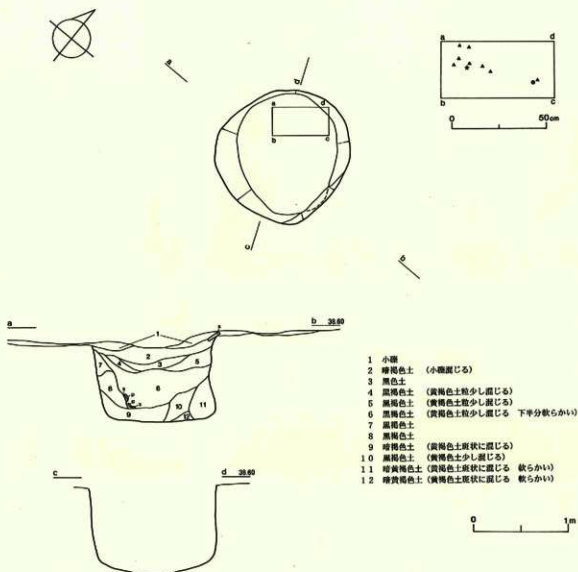
4、5、11~13は甕。4、5は肩の張りが弱く頸部が内傾するもので頸部には無文帯がある。無文帯の上下は横走る沈線文で区画されている。4は頸上部の横走沈線の下縁に小波状の沈線が施されている。11は肩部が張るもので頸部は内傾している。頸部には無文帯がある。頸上部と肩部には上下を小波状沈線文で区画された数条の横走沈線がめぐり、12は肩部と頸部の境が不明瞭なもので一連の曲線を描いている。全面に縄文が施され、口縁部と頸部の境と肩部には横走沈線がめぐり、10は台付き土器の台部。6、7、13は甕と考えられる口縁部。8、9は鉢若しくは浅鉢。(工藤研治)

石器・石製品：墳底から石鏃 (2~9)、管玉 (19) が出土している。覆土からは、石鏃 (1・11)、靴形石器 (12)、スクレイパー (13)、Rフレイク、石核、剥片、たたき石 (16・17)、石皿・台石、礫石器片、礫・礫片、石棒が出土している。上面からは石鏃 (10)、スクレイパー、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、磨製石斧 (15)、たたき石、石錘 (18)、礫石器片、礫・礫片が出土した。1~11は石鏃。1~9は丁寧な加工が施され狭長に仕上げられている。側縁はほぼ直線状で先端部は全て折れている。10、11はやや幅が広いもの。11は両面に素材面を残す。12は靴形石器。両面加工のもので、薄身である。刃部は柄に対して直角に付けられ、刃縁は直線状を呈する。13、14はスクレイパー。13は縦長剥片を素材とし、腹面右側縁に直線状の刃部を作り出す。下半部は両刃である。14は背面2側縁に刃部を作り出す。15は小形の磨製石斧。刃部に使用痕と考えられる剥離が認められる。16、17はたたき石。16は断面が三角形状で1側縁中程とその周辺にたたき痕をもつ。17は礫の平坦面に小さく深めのたたき痕をもつ。18は石錘。扁平な礫を素材とし両端に打ち欠きが施される。挟りが浅いため、たたき石の可能性もある。19は管玉。

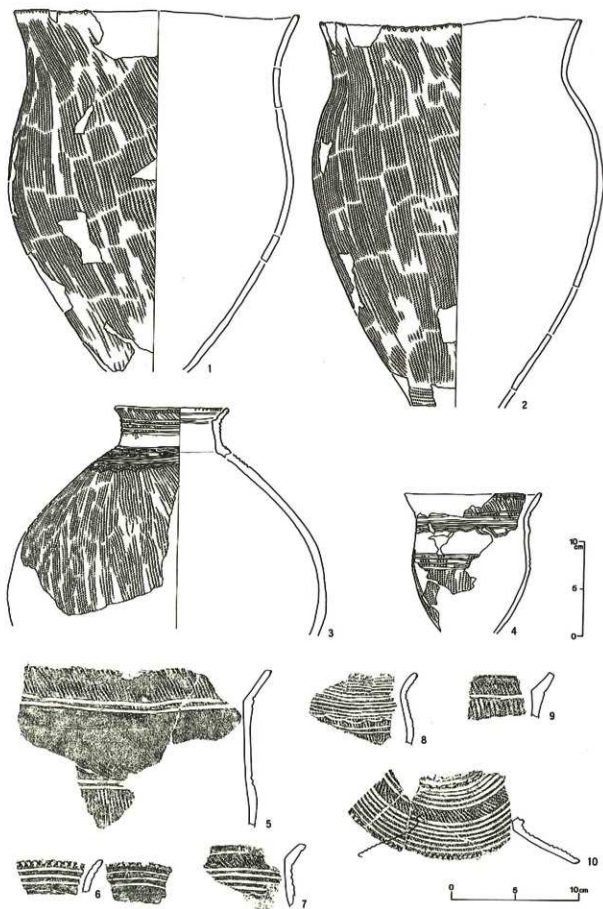


図Ⅳ-108 X-21上面遺物出土状況

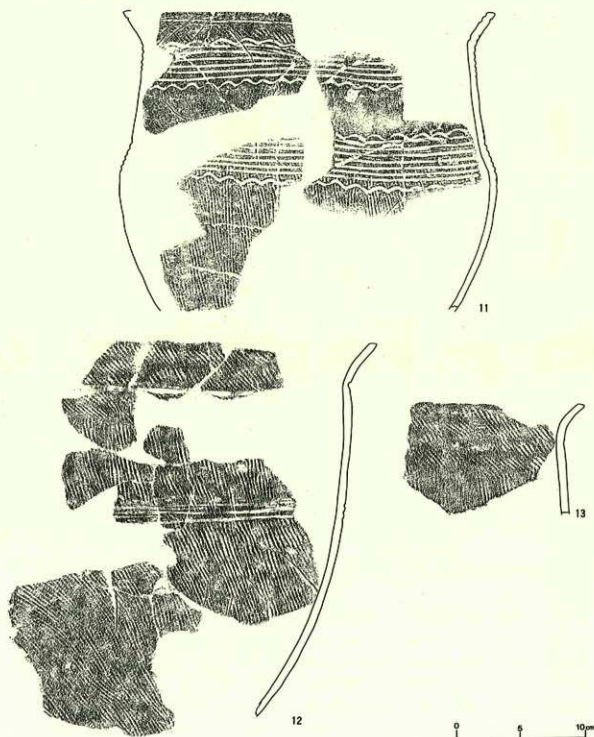
X-21



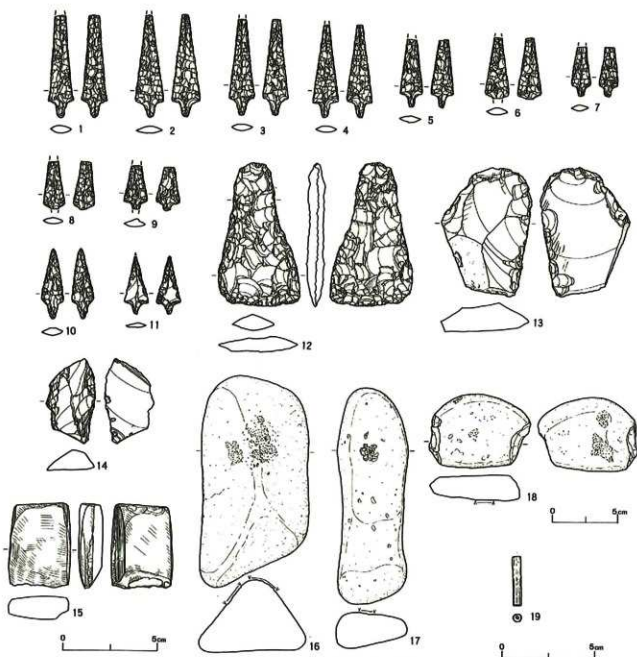
図IV-109 X-21



図IV-110 X-21出土の土器(1)



図Ⅳ-111 X-21出土の土器(2)



図IV-112 X-21出土の石器・石製品

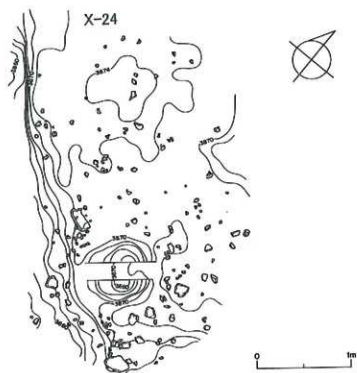
X-24 (図IV-113・114)

位置 R-16

規模 $1.22 \times 1.04 / 1.06 \times 0.82 / 0.66$

特徴 調査区南西部に位置する。Ⅲ層上面でⅡ層の火山灰の小さな落ち込みとして認められ、隣接してX-13、X-21、P-101がある。H-17と重複しており、H-17より新しい。平面形は墳口、墳底共に不整の楕円形を呈する。壁の立上りは全体的に急である。北西方向はほぼ垂直で、部分的に弱くオーバーハングする。墳底は北東部はV層まで達し、南西部はH-17覆土中に構築される。形状は部分的に細かい凹凸があるが、全体としてはほぼ平坦である。覆土はH-17の覆土を掘り込んでいたために、V層の土をほとんど混入しない。墳底で土器の周辺にわずかにベンガラが検出された。

(広田良成)



図IV-113 X-24上面遺物出土状況

遺物の出土状態 墳底の北壁付近ではほぼ完形の鉢が出土した。墳底からやや浮いた位置で石鏝が3点散らばった状態で出土した。

(広田良成)

遺物 (図Ⅳ-115)

土器: VI群土器を図示する。

墳底出土の資料 (1)

1は墳底から出土した鉢。体部が丸く膨らみ口縁部は内傾する。体部には握手の折れた部分が残っており、相対する側の口縁部には縦位の短い隆起帯の付いた小突起がある。口縁部には無文地に横走する沈線文が4条めぐり、体部には横走縄文の地に沈線で文様が描かれている。口唇角には刻み目が施されている。器面には赤色顔料が塗られている。

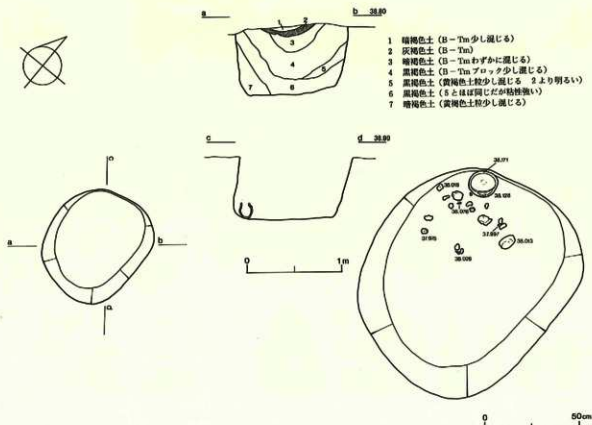
覆土出土の資料 (2~12)

2は小型の壺。頸部から肩部にかけて沈線文が施されている。口縁部を欠く。3、4、6~9は壺及び甕若しくは鉢の口縁部。10は横走沈線の施された台部。11は壺の口縁部。沈線文が施されている。5、12は底部。

(工藤研治)

石器: 墳底から剥片、礫・礫片、覆土からは石鏝 (13~19)、剥片、磨製石斧、磨製石器片、たたき石、すり石 (21)、砥石、石皿・台石、礫・礫片が出土している。上面からは石鏝、靴形石器 (20)、スクレイパー、Rフレイク、剥片、礫・礫片が出土している。13~19は石鏝。13~18は有茎凸基。18以外は先端部が折れている。全体的に丁寧な加工がほどこされる。17は裏面に素材面を残す。18は幅が広く、19は一方のみ返しがり作り出される。20は靴形石器。上部をわずかに欠失し、柄部の作り出し

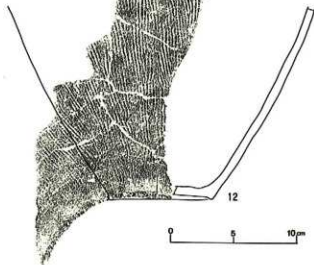
X-24



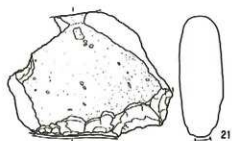
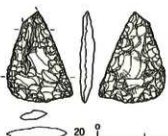
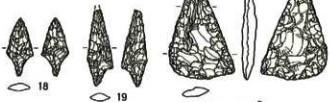
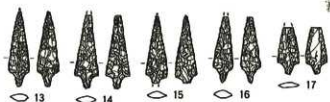
図Ⅳ-114 X-24



0 5 10 cm

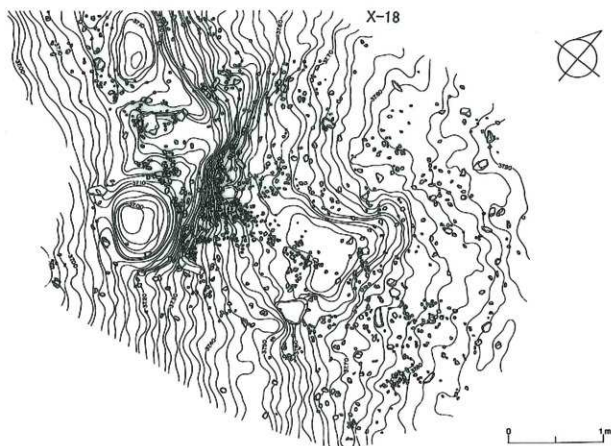


0 5 10 cm



0 5 cm

図IV-115 X-24出土の遺物



図Ⅳ-116 X-18上面遺物出土状況

は不明瞭である。刃部は柄に対して斜めに付けられ、刃縁は浅く外湾する。21はすり石で左部分が欠失する。偏平な鏢の1側縁に両端から打ち欠きを施し、細いすり面を作り出す。

(広田良成)

X-18 (図IV-116・117)

位置 Q・R-12

規模 1.50×1.32/1.09×0.99/0.80

特徴 調査区南西部の茂辺地川に面した斜面にある。X-22、X-23、X-27、X-28に隣接している。Ⅲ層上面で円形の浅い窪地が検出され、窪地とその周囲には広い範囲にわたって小礫が散布していた。小礫を除去してから斜面の傾斜に沿って窪地を半割し、底と壁を確認した。平面形はほぼ円形。底はV層を掘り込み、水平につくられている。壁は垂直に近く立ち上がる。覆土は最下層から落ち込んだ堆積状態を示しており、上面の小礫層も大きく落ち込んでいる。小礫が混じる土層は覆土中部まで認められる(覆土6層)。H-14、P-56、58、59を切っている。

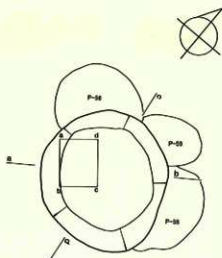
遺物の出土状態 上面では小礫に混じて土器片や頁岩の剥片が多量に出土した。墳底の直上にある覆土13層下部からは石鏃が1点出土した。

遺物 (図IV-118・119)

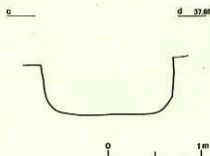
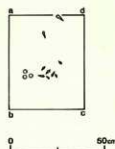
土器：出土資料のうちⅥ群土器を図示した。

上面出土の資料(1~9)

X-18



- 1 暗褐色土 (粘質 硬い)
- 2 暗褐色土 (小礫混じる)
- 3 褐色土 (軟らかい)
- 4 暗褐色土 (小礫多く混じる)
- 5 黒褐色土
- 6 暗褐色土 (小礫多く混じる)
- 7 黒褐色土
- 8 黒褐色土
- 9 暗褐色土 (黄褐色土が斑状に混じる)
- 10 暗褐色土 (黄褐色土粒多く混じる 13より暗い)
- 11 暗黄褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 12 黒褐色土+黄褐色土
- 13 暗黄褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)



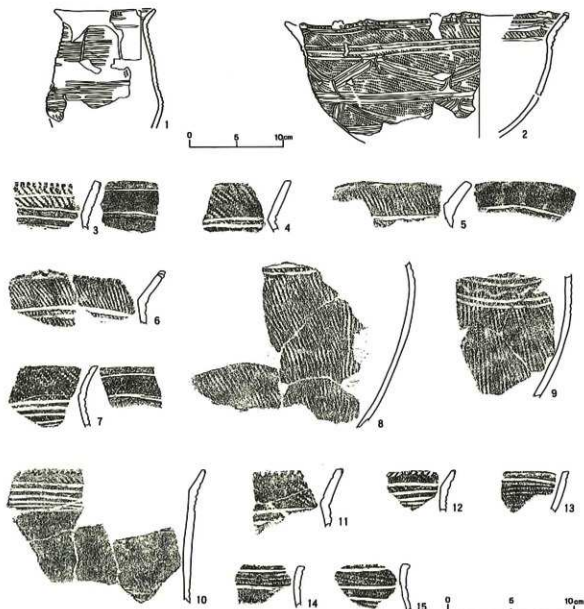
図IV-117 X-18

1は肩がやや張り、頸部が内傾する小型で細身の甕。頸上部と肩部には横走沈線がめぐり、頸上部では横走沈線施文後に縦位の沈線文が施されている。上面出土の資料2点と覆土出土の資料が接合したものである。2は口縁部が外反する鉢。口縁部には低い山形突起が付き、緩やかな波状を呈する。口縁部には斜行縄文、体部には横走ぎみの縄文が施され、縄文地に沈線で文様が描かれている。体部には大柄な鋸歯状文が2段施され、上下は横走沈線で画されている。口縁部の内面には縄文地に横走する沈線文がめぐる。上面出土の資料と覆土から出土した資料及びX-28の墳底と覆土から出土した資料が接合したものである。3～7は甕とみなされる資料の口縁部。8、9は甕の胴部。

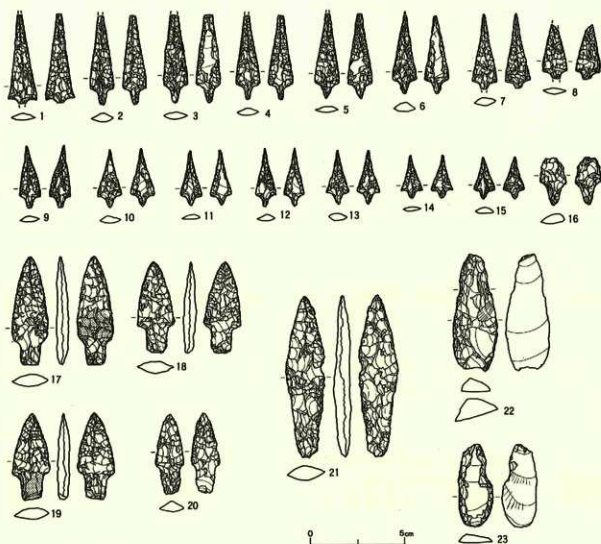
覆土出土の資料 (10～15)

10～12は甕の口縁部。13～15は鉢若しくは浅鉢。

(工藤研治)



図IV-118 X-18出土の土器



図Ⅳ-119 X-18出土の石器

石 器：覆土から石鏃（2・3・7～15）、石鋸（20）、剥片、石皿・台石、礫・礫片が出土している。上面からは石鏃（1・4～6・16）、石鋸（17～19）、石槍（21）、スクレイパー（22・23）、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、原石、磨製石器剥片、石皿・台石、礫石器片、礫・礫片、有孔自然石が出土している。1～16は石鏃。14のみ有茎平基で他は有茎凸基である。1～8は比較的大形で狭長なもの。いずれも丁寧な加工が施され、7以外は先端部が折れている。9～15は小形のもの。素材面を残すものが多い。16は未成品もしくは欠損品と考えられる。17～20は石鋸。茎基端部がいずれも角張る。17、19には黒色付着物が認められる。21は石槍。柳葉形で表面右側縁中程に浅い抉りが認められる。22、23はスクレイパー。共に片面周縁加工で、柄部をもつ。22は末端部が浅く内湾する。23は左右非対称で刃縁は丸みを帯びる。

(広田良成)

X-28 (図IV-120)

位置 Q-12・13

規模 $1.52 \times 1.28 / 1.01 \times 0.96 / 0.65$

特徴 調査区南西部の茂辺地川に面した斜面にある。Ⅲ層上面でⅡ層の火山灰が円形に落ち込んでいるのが確認できた。小竈は認められなかった。落ち込みの南側を半割して底と壁を確認した。平面形はほぼ円形。底はⅤ層を掘り込んでいて少し凹凸がある。壁の立ち上がりは斜面の上方では急で、斜面の下方では緩やかである。覆土は最下層から落ち込んだ様相を呈しているが、上面の窪みはごく浅い。掘り上げた土の大部分が埋め戻されていると考えられ、埋葬時はマウンド状になっていたと推定される。

遺物の出土状態 墳底の北部から動物意匠の突起が付いている鉢形土器がつぶれた状態で出土した。土器の傍から環石が6点並んで出土している。環石はいずれも斜めに立った状態であった。

遺物 (図IV-121)

土器：出土資料のうちⅥ群土器を図示する。

墳底出土の資料 (1、2)

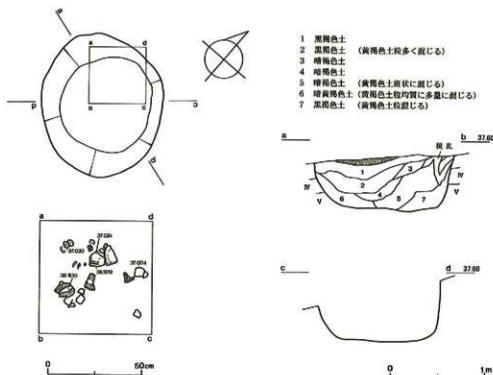
1は口縁部がやや内傾する鉢。口縁部にはクマとみられる動物意匠の突起が1個付き、相対する側には小突起が付く。口縁部と底部には沈線で縁取られた横走する特殊縄文が施され、体部には同じく沈線で縁取られた特殊縄文で大柄な鋸歯状文が施されている。動物意匠の突起の下位には2個の貫通孔がある。器面には赤色顔料が塗られている。墳底出土の資料と覆土出土の資料が接合した。2は体下半部の資料。無文地に細い沈線が付いている。覆土出土の資料とX-30の覆土から出土した資料が接合したものである。

覆土出土の資料 (3、4)

3は壺若しくは鉢の口縁部。縄文地に横走する沈線文が施され、貫通孔が1個ある。4は胴部の破片。縄文地に沈線文が施されている。

(工藤研治)

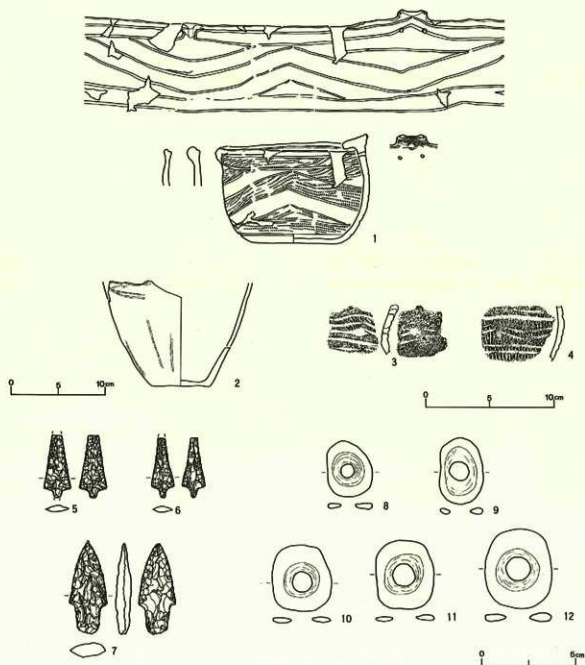
X-28



図IV-120 X-28

石器・石製品：墳底から石鏃（5）、環石（8～12）が出土している。覆土から石鏃（6）、石槍（7）、Rフレイク、剥片、磨製石斧、礫・礫片が出土している。上面からは剥片、礫・礫片、石製品剥片が出土している。5、6は石鏃。どちらも先端部が折れている。側縁は5が直線状で、6はやや内湾する。7は石銃。茎部は太く、基端部はやや丸みを帯びる。8～11は環石。材質は不明で、形状は不整の楕円形または角が丸い四角形状を呈する。両面共に丁寧な研磨が施され平滑に整えられている。いずれも中央に両面から穿孔が施される。孔の周囲には両面に穿孔具の回転作業による結果と考えられる円形のくぼみがあり、中には同心円状の擦痕が認められる。

（広田良成）



図Ⅳ-121 X-28出土の遺物

X-22 (図IV-122・123)

位置 R-12

規模 $(1.23) \times 1.23 / 1.03 \times 0.89 / 0.71$

特徴 調査区南西部の茂田地川に面した斜面にある。Ⅲ層上面で浅い円形の窪地が確認でき、周囲には小礫が散布していた。小礫を除去した後、斜面の傾斜に沿って窪地を半割して底と壁を確認した。平面形はほぼ円形。底は水平につくられ、壁は全周で急に立ち上がる。覆土は墳底近くから落ち込んでおり、小礫混じりの土層も覆土中部まで落ち込んでいる(覆土2'層)。H-14、P-56、62、63、87を切っている。

遺物の出土状態 上面では小礫に混じって土器片や剥片が多量に出土した。墳底から土器片13点、石鏃2点、靴形石器1点、管玉1点が出土した。

遺物 (図IV-124)

土器：出土資料のうちⅥ群土器を図示した。

覆土出土の資料(1~7)

1~3は壺とみられる資料の口縁部。1は頸部に無文帯がある。口縁部の内面には縄文地に横走する沈線文が施されている。4、6、7は鉢若しくは浅鉢の口縁部。4は口縁部が外反するもので口縁部の内面にも沈線文が施されている。6、7は沈線で縁取られた特殊縄文で文様が描かれたものである。5は壺の口縁部。

(工藤研治)

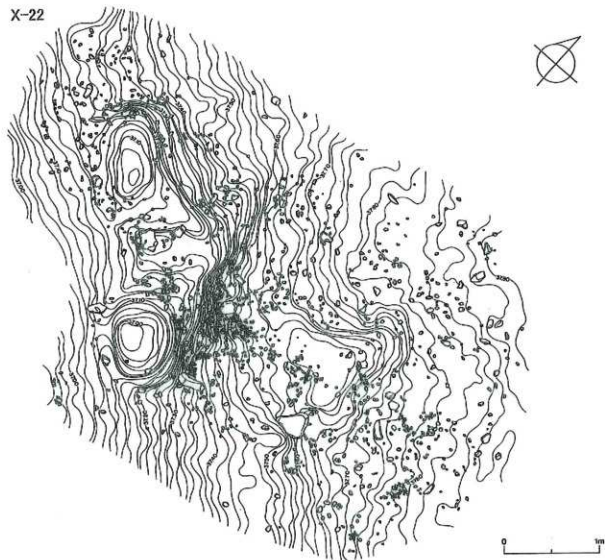
石器・土製品：墳底から石鏃(8・9)、靴形石器(10)、Rフレイク、礫・礫片、管玉(16)が出土している。覆土からは石鏃、スクレイパー(11)、Rフレイク、石核、剥片、磨製石器片、たたき石、礫・礫片、円盤状土製品(17)、焼成粘土塊が出土している。上面からは石錐、スクレイパー、挟入石器(12)、Rフレイク、石核(13)、剥片、たたき石(14・15)、礫・礫片、魚形石器(18)が出土している。8、9は石鏃。8は木葉形で茎があるもの。9は有茎凸基で先端部が折れている。10は半両面加工の靴形石器。柄部及び刃部は両面からの加工により作り出される。刃部は柄に対して斜めに付けられ、刃先は尖る。11はスクレイパー。腹面右側縁に刃部をもつ。刃部は両刃で、刃縁は直線状である。12は挟入石器。両側縁に挟りが認められる。13は石核。14、15はたたき石。14は棒状礫を素材とし、下端部、周縁部、平坦面にたたき痕がある。15は扁平な礫の平坦面にあばた状のたたき痕が認められる。16は管玉。18は魚形石器。全面に研磨が施される。表裏面に素材面及び整形時のたたき痕を残す。

(広田良成)

17は円盤状土製品である。

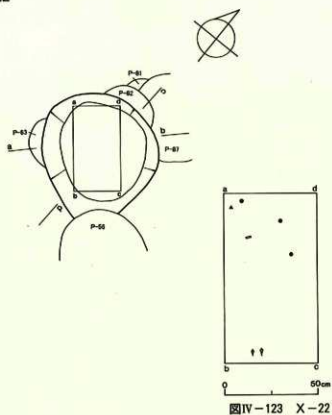
(立田 理)

X-22

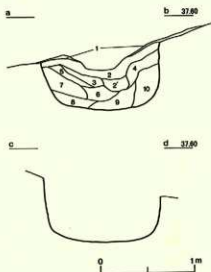


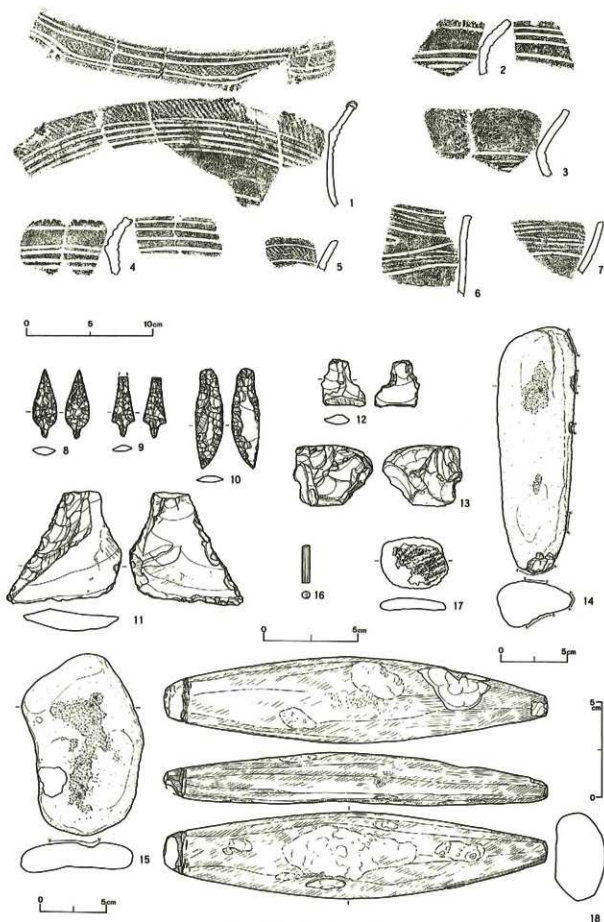
图IV-122 X-22上面遺物出土状況

X-22



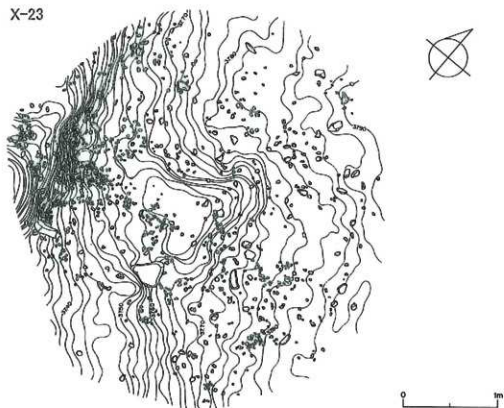
- 1 小礫
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土 (小礫多く混じる)
- 4 暗赤褐色土 (焼土)
- 5 黒褐色土
- 6 褐色土 (黄褐色土粒混じる)
- 7 暗黄褐色土 (深 1 cm ほどの黄褐色土多く混じる)
- 8 褐色土 (黄褐色土粒多く混じる 7 より暗い)
- 9 褐色土 (黄褐色土粒多く混じる 7 より暗い)
- 10 暗黄褐色土 (黄褐色土粒多量に混じる)





図IV-124 X-22出土の遺物

X-23



図IV-125 X-23上面遺物出土状況

X-23 (図IV-125・126)

位置 Q-12・13

規模 1.31×1.14/0.96×0.46/0.80

特徴 調査区南西部の茂辺地川に面した斜面にあり、X-18、28に隣接している。Ⅲ層上面でごく浅い不整形の窪みが確認できた。周囲には小礫がやや疎らに散布していた。上面の小礫を除去した後、斜面の傾斜に沿って窪みの南東側を半割して壁と床を確認した。平面形はほぼ円形。底は南東側に向かって傾斜している。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は落ち込んだ堆積状態を示しているが、上面はあまり窪んでいない。P-60を切っている。

遺物の出土状況 上面の小礫には土器片や頁岩の剥片が多数混じっていた。墳底からは管玉が1点出土した。底に近い覆土11層からは石鏃、有孔自然石が出土している。

遺物 (図IV-127)

土器: VI群土器を図示した。

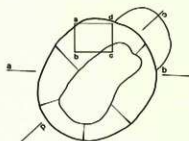
覆土出土の資料 (1~3)

1は壺とみられる資料の口縁部。縄文地に横走る沈線文が施される。口縁部内面にも沈線文が施されている。2は壺。体上半には沈線で縁取られた特殊縄文が施され、下半には縦走縄文が施されている。3は口縁が外反する口の部分。特殊な器形の土器の一部と考えられる。細い沈線文が1条めぐらる。便宜的に口を上にして図示した。

(工藤研治)

石器・土・石製品: 覆土から石鏃 (4~6)、つまみ付きナイフ (7)、スクレイパー、Rフレイク、剥片、磨製石斧、すり石 (16)、礫・礫片、魚形石器 (10)、管玉 (11)、有孔自然石 (12・13)、軽石、円盤状土製品 (14) が出土している。上面からは石鏃、スクレイパー (8)、剥片石器片、Rフレイク

X-23



0 50cm

- 1 暗褐色土 (小礫が多く混じる)
- 2 暗褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 3 暗褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 4 暗褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 5 暗黄褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 6 黄褐色土 (小礫、黄褐色土粒混じる 軟らかい)
- 7 黒褐色土
- 8 黒褐色土 (黄褐色土粒混じる)
- 9 黄褐色土 (軟らかい)
- 10 黄褐色土
- 11 黄褐色土
- 12 暗褐色土 (黄褐色土底状に混じる)
- 13 黄褐色土

a 38.00

c 38.00



0 1m

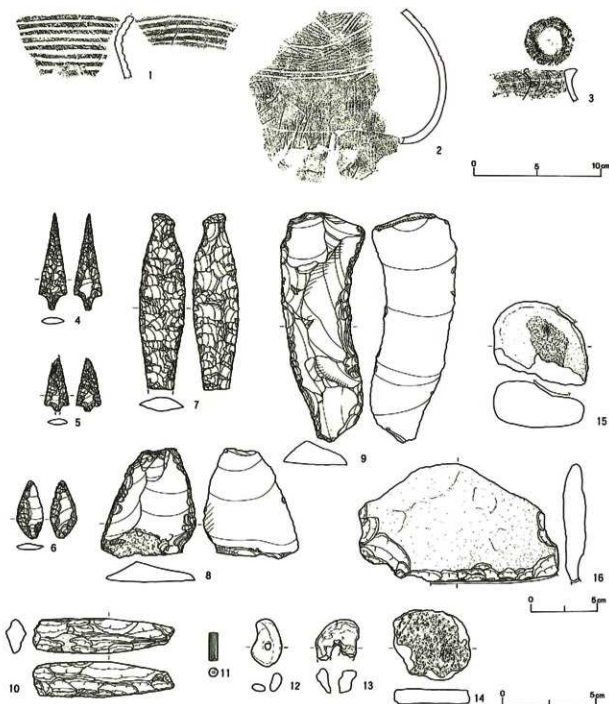
図IV-126 X-23

ク、剥片、磨製石器剥片、たたき石 (15)、礫石器片、礫・礫片が出土している。4～6は石鏃。4は有茎凸基。丁寧な加工が施され、狭長に仕上げられている。5は有茎平基。先端部及び基端部が折れている。表面右側縁がやや湾曲する。6は周縁部のみ加工が施され、先端部が丸みを帯びる点から未成品と考えられる。7はつまみ付きナイフ。両面加工で下部を欠失する。8、9はスクレイパー。8は背面の末端部以外の3辺に加工が施される。9は背面両側縁に刃部が作り出される。10は魚形石器未成品。両面に側縁から打ち欠きが施される。11は管玉。12、13は有孔自然石。15はたたき石。16はすり石。

(広田良成)

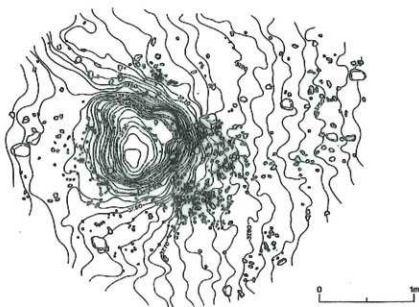
14は円盤状土製品である。IV群A類の土器片を利用している。

(立田 理)



図IV-127 X-23出土の遺物

X-19



図IV-128 X-19上面遺物出土状況

X-19 (図IV-129)

位置 R-12・13

規模 1.82×1.62/1.34×1.08/0.86

特徴 調査区西側の斜面部に位置する。Ⅰ・Ⅱ層を除去後、円形の窪みを確認した。平面形は楕円形である。覆土はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層が混入した埋め戻しである。覆土上部には砂利が多く含まれている。墳底はほぼ平坦で壁はやや開きぎみに立ち上がる。東側は縄文時代の土壌P-40・42と重複している。遺物の出土状態 覆土上部から靴形石器、覆土中部から石鏃が出土している。

(佐藤和雄)

遺物

土器：出土資料のうちⅥ群土器を図示した。

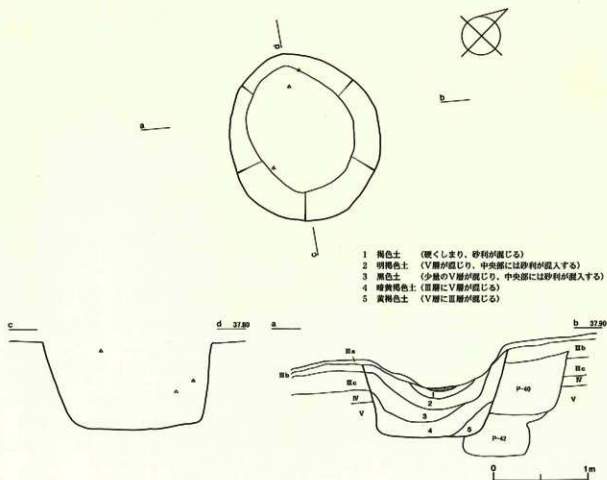
上面出土の資料(1、2)

1は頸部に無文帯のある甕。無文帯の上下には横走る沈線文が施されている。口縁部の内面にも沈線文が施されている。2は口縁部が外反する鉢。体部には沈線で縁取りされた特殊縄文が施されている。口縁部内面にも沈線文がめぐる。

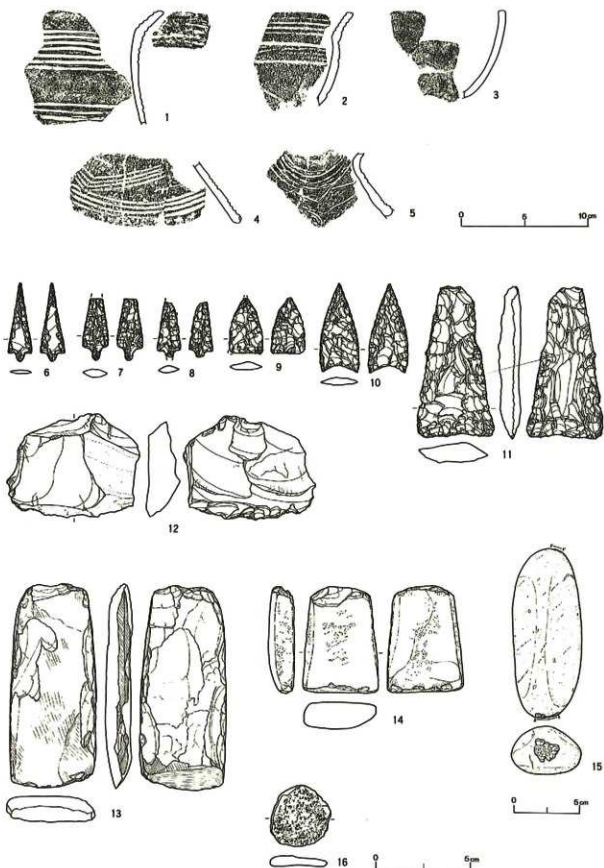
覆土出土の資料(4、5)

3は無文の鉢。口縁部はやや内傾する。4は台付き土器の台部。無文地に沈線で鋸歯状文が施され、裾の部分には横走る沈線が施されている。裾の下縁には刻み目が付いている。5は壺の頸部。無文

X-19

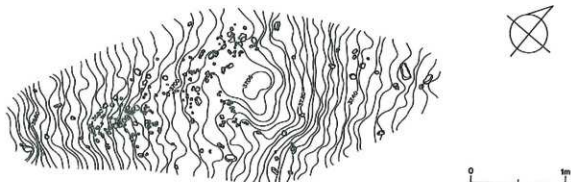


図IV-129 X-19



図IV-130 X-19出土の遺物

X-25



図IV-131 X-25上面遺物出土状況

地に細い沈線で文様が描かれている。

(工藤研治)

石器：覆土から石鏃（6～10）靴形石器、鏡状石器（11）スクレイパー（12）、抉入石器、Rフレイク、石核、剥片、磨製石斧（13・14）、たたき石、すり石、石皿・台石、加工痕礫、礫石器片、礫・礫片、三角形礫石器、円盤状土製品（16）が出土している。6～10は石鏃。6、8は有茎平基。8は先端部及び茎基端部を欠失する。7は有茎凸基。9、10は側縁が外湾する。9は無茎平基。先端部と返し的一端をわずかに欠失する。10は無茎凹基。11は靴形石器。柄部と身部の間に屈曲が認められる。刃部は柄に対して直角に付けられ、刃縁はやや内湾する。12はスクレイパー。腹面末端部に刃部を作り出し、刃縁はやや外湾する。13、14は磨製石斧。13は整形時の打ち欠きを残す。14は小形で両面及び側面に軽微なたたき痕が認められる。刃部が完全に研ぎ出されず面になっているため転用品と考えられる。15は棒状礫の両端部にたたき痕があるたたき石。

(広田良成)

16は円盤状土製品である。表面は摩滅して文様は観察できないがVI群土器片をうち欠いて作られている。

(立田 理)

X-25 (図Ⅳ-132)

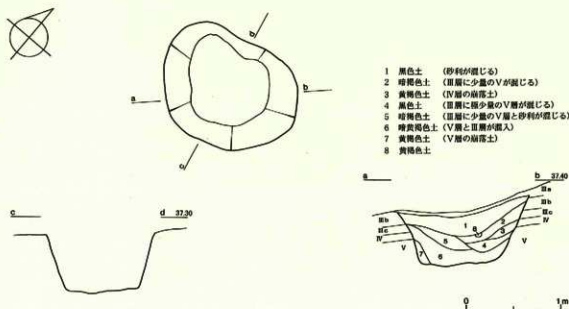
位置 S-12

規模 $1.53 \times 1.13 / 1.00 \times 0.87 / 0.65$

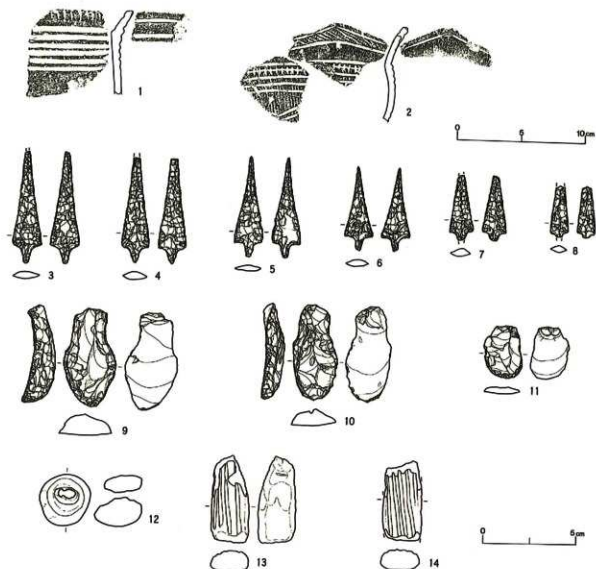
特徴 調査区西端の斜面部に位置する。I・II層を除去後、不整形のやや浅い窪みを確認した。平面形は不整形円形である。覆土はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層が混入し、地山のブロックが含まれる埋め戻しである。覆土上部・中部には砂利が含まれている。坑底は凹凸があり、壁はやや開きぎみに立ち上がる。遺物の出土状態 覆土から石鏃・スクレイパー・剥片・土製品が出土している。上面の坑口周辺からは剥片と多量の礫が出土している。

(佐藤和雄)

X-25



図Ⅳ-132 X-25



図IV-133 X-25出土の遺物

遺物(図IV-133)

土器：VI群土器を図示した。

覆土出土の資料(1、2)

1は頸部に無文帯のある甕。頸上部には沈線文がめぐる。口縁部内面にも沈線文が施されている。2は口縁部が外反する鉢。口縁部には沈線で縁取られた斜行細文が帯状にめぐり、体部には縄文地に沈線で鋸歯状文が施されている。肩部にも横走沈線が施されていて、そのうちの1条には刻み目が付いている。

(工藤研治)

石器・石製品・土製品：覆土から石鏃(3～8)、スクレイパー(9～11)、Rフレイク、石核、剥片、礫・礫片、有孔自然石(12)、未分類土製品(13)が出土している。上面からは剥片、礫・礫片が出土している。3～8は石鏃。3～6、8は有茎凸基、7は有茎平基である。6は基部がやや湾曲する。7、8は先端部と基部が折れている。9～11はスクレイパー。いずれも片面加工で刃部は丸く湾曲する。9、10は柄部が作り出され、急角度の刃部をもつ。12は有孔自然石。礫の中央よりやや上に孔が

開いている。

(広田良成)

13、14は未分類土製品である。同一個体とみられるが接合しない。両者とも楕円形の断面を有する棒状の粘土塊で、長軸方向に平坦面が作られる。両端は欠損している。1方の平坦面にのみ4条の沈線が施され、沈線内には一部赤色顔料が残っている。土器の把手の可能性もある。

(立田 理)

X-27 (図IV-134)

位置 Q-12

規模 $1.38 \times 1.31 / 1.08 \times 0.99 / 0.68$

特徴 調査区南西部の茂辺地川に面した斜面にあり、X-18に隣接している。Ⅲ層上面で小礫が円形に散布しているのが確認できた。斜面の傾斜に沿って南東側を半割して底と壁を確認した。平面形はほぼ円形。底は水平で、壁は急に立ち上がる。墳底から小ビットが1個検出された。

遺物の出土状況 上面の小礫には細かい土器片と頁岩の剥片が多く混じっている。墳底から出土した遺物はない。

遺物 (図IV-135)

土器：出土資料のうちⅥ群土器を図示した。

覆土出土の資料 (1、2)

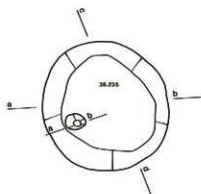
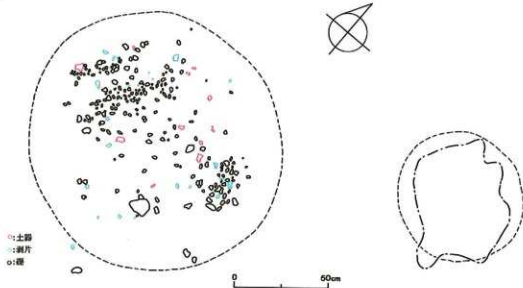
1は口縁部がやや内傾する鉢。口縁部には沈線で縁取られた横走する特殊縄文がめぐる。2は小型の土器の底部。縦走縄文が施されている。

(工藤研治)

石器：覆土から石鐮 (3)、スクレイパー (4)、Rフレイク、剥片、磨製石斧、礫・礫片が出土している。上面からはRフレイク、石核、剥片、たたき石 (5・6)、礫・礫片が出土している。3は石鐮。有茎凸基で丁寧な加工が施される。4はスクレイパー。背面の両側縁に刃部が作り出される。5、6はたたき石。5は周縁部に広くたたき痕をもつもの。6は偏平礫の周縁及び平坦面にたたき痕が認められるもの。下部を欠失する。

(広田良成)

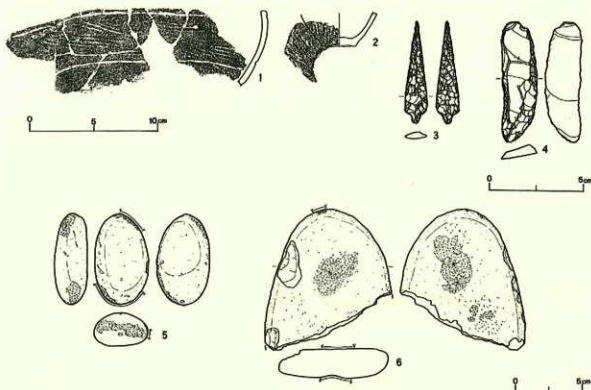
X-27



- 1 暗褐色土 (小礫多く底じる)
- 2 暗黄褐色土 (黄褐色土粒多量に底じる)
- 3 暗黄褐色土
- 4 黒褐色土 (小礫多く底じる)
- 5 暗黄褐色土 (6より明るい)
- 6 暗黄褐色土 (7より明るい)
- 7 暗黄褐色土
- 8 黒褐色土に黄褐色土が斑状に底じる
- 9 黄褐色土に黒褐色土が底じる
- 10 黄褐色土に黒褐色土が底じる



図IV-134 X-27



図IV-135 X-27出土の遺物

X-29 (図IV-136)

位置 R-12

規模 $1.16 \times 1.11 / 0.85 \times 0.80 / 0.73$

特徴 調査区南西部の茂辺地川に面した斜面にある。Ⅲ層上面で小礫がまとまって検出され、Ⅱ層の火山灰が少し落ち込んでいるのが確認できた。トレンチを掘って調査したところ壁と底が確認された。平面形はほぼ円形。底は斜面と同じ方向に傾斜しており、壁は急に立ち上がる。

遺物の出土状況 上面の小礫には細かい土器片や頁岩の剥片が混じっている。土壌西部の墳底に近い覆土から甕形土器の大型破片が1点出土した。

遺物 (図IV-137)

土器: 出土資料のうちVI群土器を図示した。

墳底出土の資料 (1)

1 は肩の張りや弱い甕の胴部。肩部には縄文地に横走沈線がめぐり、下縁には小波状の沈線文が施されている。

覆土出土の資料 (2~8)

2 は壺の口縁部かとみられるものでV群に属する可能性もある。3、4 は甕の口縁部とみられる資料。5~7 は鉢。5、6 は同一個体で特殊縄文と沈線文で文様が描かれている。無文部には沈線に沿って列点文が施されている。7 は沈線で縁取られた特殊縄文が施されたもの。口縁部には貫通孔がある。

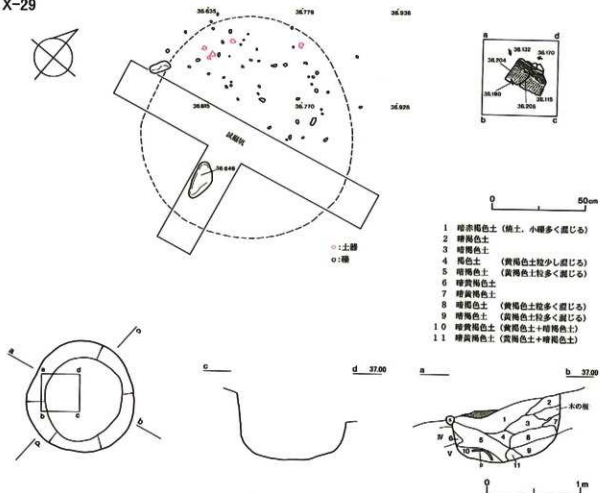
8 は壺の頸部。

(工藤研治)

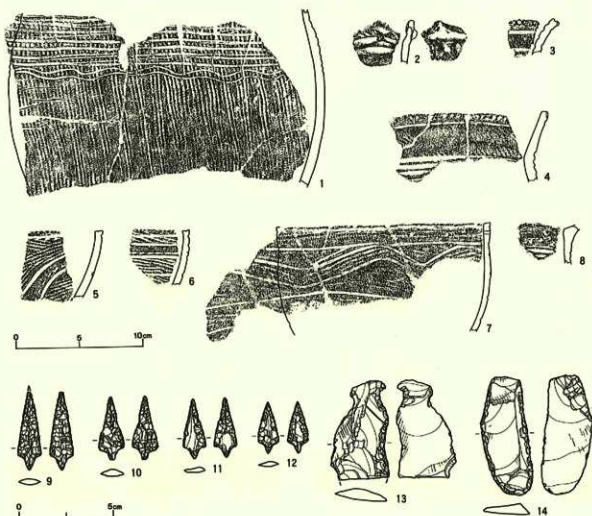
石器: 墳底から石鏃 (10~12)、覆土からは石鏃 (9)、つまみ付きナイフ (13)、スクレイパー (14)、剥片、礫・礫片が出土している。上面からは剥片、礫・礫片が出土している。9~12は石鏃。9は先端部が折れている。10は両側縁が中程で弱く屈曲する。11、12は素材面を大きく残し、側縁は外湾する。13はつまみ付きナイフ。挟り部と背面左側縁のみ加工が施される。14はスクレイパー。背面

周縁部と腹面右側縁のバルブ付近に加工が施される。柄部が作り出され、刃部は柄部に対して斜めに付けられる。刃縁は丸みを帯びる。

X-29



図IV-136 X-29



図IV-137 X-29出土の遺物

X-30 (図IV-138・139)

位置 P・Q-12

規模 $2.14 \times 1.78 / 1.40 \times 1.26 / 0.58$

特徴 調査区西端、茂辺地川に向かう斜面に位置する。標高は35.9～36.6mで墓の中では最も低い位置にある。

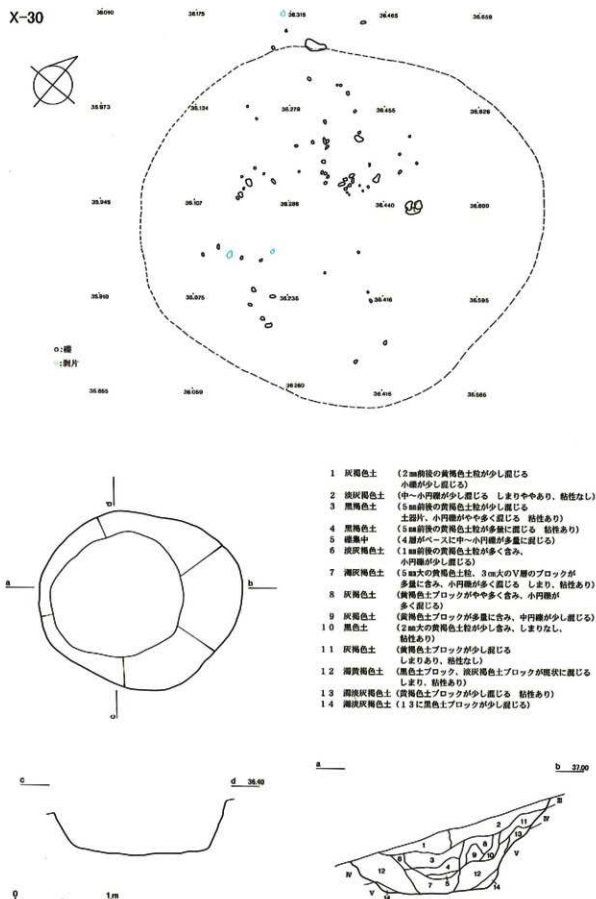
Ⅲ層上面で楕円形の落ち込みと礫や剥片の散布が認められたため、トレンチを東西方向に設定しⅤ層まで掘り下げた。その結果、すり鉢状の断面を持つ土壌であることがわかった。

平面形は楕円形を呈する。長軸は等高線に直行する。掘り込みは斜面の下方で浅くなっている。壁は緩やかである。墳底はほぼ平坦で水平である。形状は円形で土壌の中心より少し斜面下方にずれている。墳底面はⅤ層に含まれる礫が露出している。墳底付近から出土した土器の状態、埋め戻しの結果とみられる土層断面8～14層の黄褐色土ブロックの混入状況などから判断すると土墳墓であると思われる。

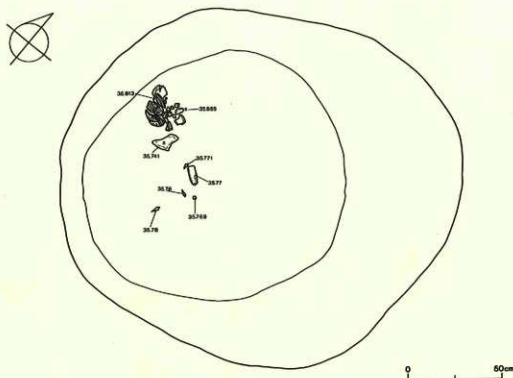
遺物の出土状態 墳底から石鏃3点、剥片1点、磨製石斧1点、礫1点が出土し、破片が墳底に一部接する形で鉢形土器がつぶれた状態で出土した。(図IV-139)。墳底の南側からまとまった状態で鉢が出土した。中央付近からは石鏃、磨製石斧等が出土した。

(立田 理)

X-30



図IV-138 X-30(1)



図IV-139 X-30(2)

土 器：Ⅵ群土器を图示した。

上面出土の資料（3）

3は無文の底部。

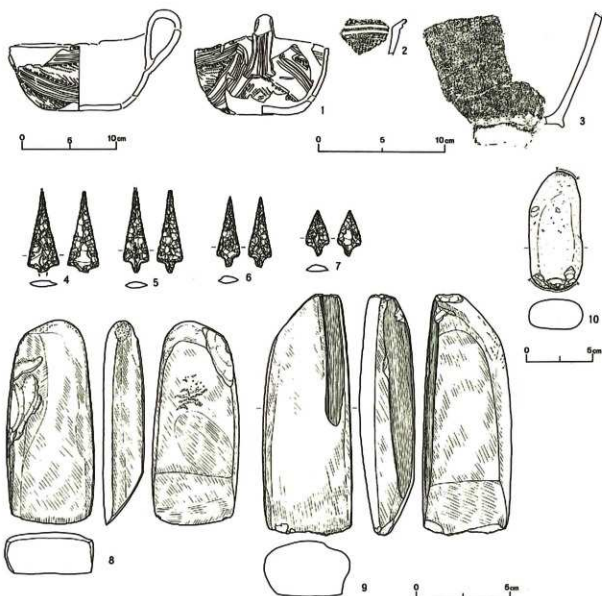
覆土出土の資料（1、2）

1は覆土最下部から出土した握手のある鉢。握手の形状は明らかではないが便宜的に図のように復元している。口縁部には横走する沈線文、体部には大柄な鋸歯状の沈線文が施され、沈線文に沿って列点文が付けられている。

（工藤研治）

石 器：坑底から石鏃（4・5・7）、磨製石斧（8）、覆土から石鏃（6）、Rフレイク、剥片、磨製石斧（9）、たたき石（10）、礫・礫片が出土している。上面からは剥片、礫・礫片が出土している。4～7は石鏃。4～6は丁寧な加工が施され、狭長に作り上げられている。7は小形でやや幅が広い。返しはやや丸みを帯びる。8、9は磨製石斧。8は裏面及び基部に軽微なたたき痕が認められる。片刃で刃縁はやや外湾する。9は側面に擦り切り痕を残す。刃縁は欠失する。10はたたき石。両端にたたき痕をもつ。下端のたたき痕はやや大きな剥離によるもので下端部ほぼ全面に認められる。

（広田良成）



図IV-140 X-30出土の遺物

P-38 (図IV-141)

位置 R-12

規模 1.87×1.75/1.25×1.05/0.53

特徴 調査区西側の斜面部に位置する。Ⅰ・Ⅱ層を除去後円形の窪みを確認した。平面形は円形である。覆土はⅢ・Ⅴ層が混入し、地山のブロックが含まれる埋め戻しである。覆土上部には少量の砂利が含まれている。断面形は碗状で壁と墳底との境は不明瞭である。墳底はやや凹凸があり、壁はやや開きぎみに立ち上がる。覆土の中部からは厚さ約6cm、径約16cmの焼土粒が検出された。

遺物の出土状態 遺物は土壌の中央から北西寄り出土している。覆土の下部から石鏃・土器片が、中部から上部にかけて石鏃と石斧が出土している。

(佐藤和雄)

遺物 (図IV-142)

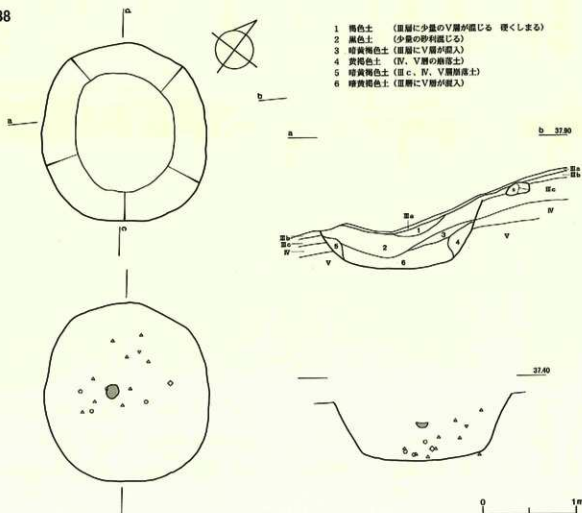
土器: 出土資料のうちⅠ群土器(1)、Ⅵ群土器(2~6)を図示した。

覆土出土の資料(1~6)

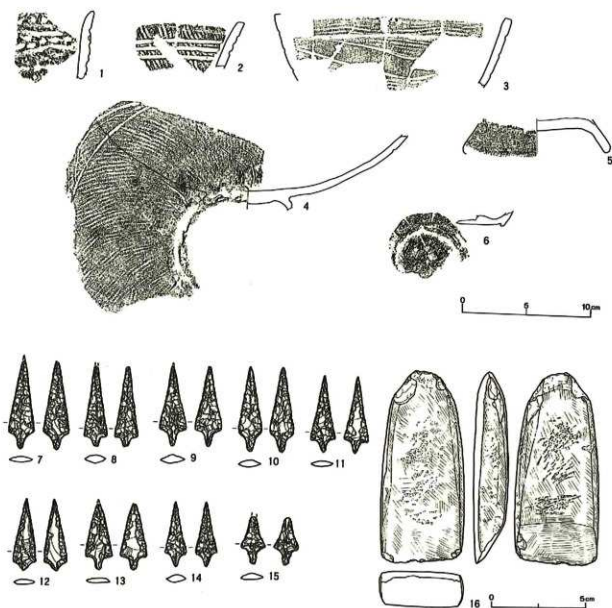
1は無文地に沈線と刺突文が施されたものである。口唇断面はやや尖る。2は甕の口縁部と思われる資料。縄文地に横走沈線がめぐる。3は口縁部が外に開く鉢。沈線で縁取りされた特殊縄文で文様が描かれている。4は台付き土器。5は台付き土器の無文の台部。6は底部。

(工藤研治)

P-38



図IV-141 P-38



図IV-142 P-38出土の遺物

石 器：覆土から石鏃（7～15）、両面調整石器、剥片石器片、石核、剥片、磨製石斧（16）、礫・礫片が出土している。7～15は石鏃。7～14は丁寧な加工で狭長に作り上げられている。10は返しやや丸みを帯びる。15は側縁が浅く内湾し、返しがやや張り出す。16は磨製石斧。刃部以外のほぼ全面に軽微なたたき痕が認められる。片刃で刃縁は直線状である。刃部に細かい不規則な剥離があり、使用痕と考えられる。

（広田良成）

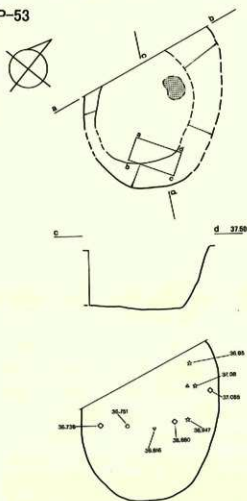
P-53（図IV-143）

位 置 S-12

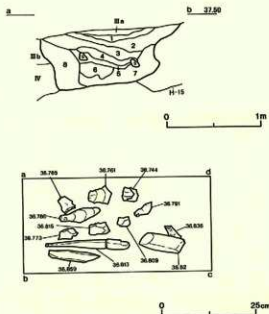
規 模 $(1.86) \times (1.40) / (1.44) \times (1.00) / 0.64$

特 徴 調査区西端、茂辺地川に向かう緩斜面に位置する。Ⅲ層上面で火山灰の落ち込みを検出した。落ち込みは楕円形で、西側は調査区外である。調査区境に平行にトレンチを設定してⅤ層まで掘り下げた。その結果、Ⅲa層から掘り込まれ、P-80・P-95・H-16の遺構を切って構築されているこ

P-53



- 1 Ⅲa層に火山灰が覆じる層
- 2 灰褐色粘質土 (2cm程度の円礫が少し散じる)
- 3 黒色土 (土器片、石器が散じる 円礫が多量に散じる)
- 4 褐色中層
- 5 黒色土
- 6 灰褐色粘質土 (土器片、石器が散じる 円礫が少し散じる)
- 7 暗灰褐色粘質土 (2mm以下の黄褐色土粒が多く散じる)
- 8 灰褐色土 (黒色土ブロックが少し散じる 2mm程度の黄褐色土粒が多く散じる)



図IV-143 P-53

とを確認した。平面形は調査区に区切られるが墳口、墳底ともに楕円形とみられる。壁はやや急角度に立ち上がるが、断面図の位置では中ほどの深さでやや内側に膨らむ部分がある。墳底は平坦で、北東端に 0.24×0.18 (m) の楕円形にベンガラが認められた。

遺物の出土状況 墳底から石器がまとめて出土した。(図IV-143右下) 土壌の西側、墳底から壁にかけての斜面に沿うように出土している。2本の磨製石斧側(図下方)が斜面上部となっている。また出土状況図中で実測されていないものはすべて剥片である。

(立田 理)

土 器：出土資料のうちVI群土器を図示した。

覆土出土の資料(1~5)

1は覆土下部から出土した鉢の底部。台付き土器と考えられる。2は頸部が内傾する平縁の小型の甕。頸部には無文帯があり、頸上部には沈線文がめぐる。3、4は鉢。3は口縁部がやや外反するもので、口縁部には下縁を沈線で縁取られた横走る整った特殊縄文が施されている。口縁部の内側にも沈線文がめぐる。4は口縁部が強く外反するもので口縁部には斜行縄文、体部には縦走縄文が施されている。5は壺の口縁部。口縁部から頸部にかけて横走沈線が施されている。

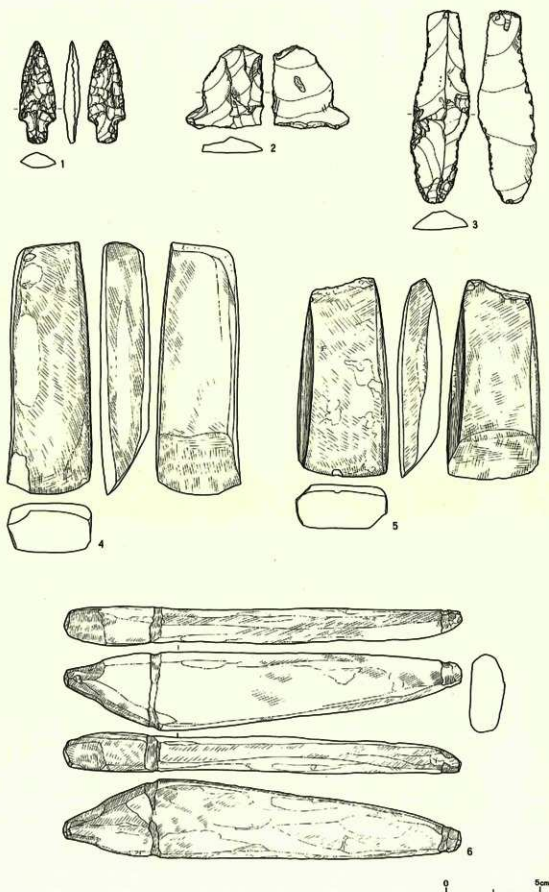
(工藤研治)



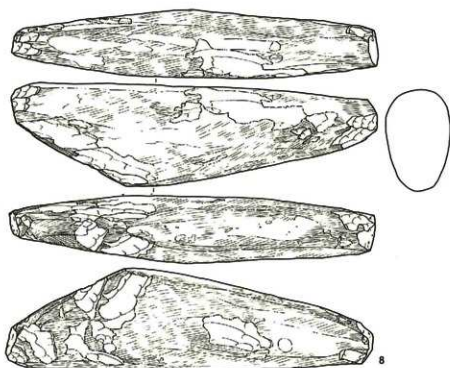
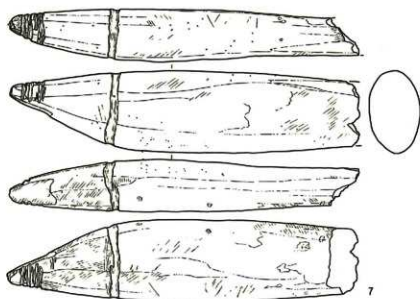
図Ⅳ-144 P-53出土の石器

石器・石製品：墳底からスクレイパー（2・3）、磨製石斧（4・5）、剥片、魚形石器（6）が出土している。覆土からは石鏃、石銛（1）、石核、剥片、石皿、台石、礫・礫片、魚形石器（7・8）、石製品剥片が出土している。1は石銛。白色で不純物が混入するめのう質頁岩製である。加工は身部に比べて茎部はやや粗雑である。茎端部の加工は丁寧である。2、3はスクレイパー。2は腹面右側縁に刃部を作り出す。3は末端部に外湾する刃部を作り出す。両面の側縁には断続的な細かい剥離痕が認められる。上部は素材の形状を利用して柄部をしている可能性がある。4、5は磨製石斧。4は全面丁寧に研磨されている。片刃で刃縁は浅く外湾する。刃縁端に欠失が認められる。5は両側面に擦切溝を残す。右側面には折った痕跡がわずかに認められる。研磨は全体的にやや粗い。6は魚形石器。偏平で全体的に作りはやや粗い。尾部と頭部に浅い溝が巡り、表裏面共に中央付近でごく浅くなる。上下面は斜方向に丁寧な研磨が施され平坦である。7は断面が楕円形で、尾部を欠失する。全体に横及び斜方向の研磨が施される。先端部に細く深い溝が3条巡り、その裏側に平坦面が作り出される。頭部と胴部の間にも幅広い溝がある。8は全面に横方向の丁寧な研磨が施される。部分的に整形時の打ち欠きが認められ、両端部には自然面を残す。

（広田良成）



図IV-145 P-53出土の石器・石製品(1)



0 5cm

図IV-146 P-53出土の石製品(2)

P-57 (図Ⅳ-147)

位置 P-14

規模 $0.67 \times 0.58 / 0.35 \times 0.28 / 0.42$

特徴 調査区西側の台地縁辺部に位置する。X-16配石墓の南西約1mにある。O-14区のⅢ層を掘り下げた段階でⅤ層を底面とした掘込みを確認した。平面形は円形である。覆土はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層が混入した埋め戻しである。墳底はやや凹凸があり、壁は急角度で立ち上がる。

遺物の出土状態 覆土の上部からややまとまった土器片と魚形石器・石核が出土している。墳口部からは土器片・石斧が、上面及び周辺からはまとまった土器片と石鈬・砥石・石核が出土している。

(佐藤和雄)

遺物 (図Ⅳ-148)

土器：出土遺物のうちⅥ群土器を図示した。

上面出土の遺物 (1、3)

1は甕の口縁部とみられる資料。口縁部には横走縄文の地に横走沈線が施されている。3は口縁部が外反する鉢。無文地に沈線で文様が描かれている。口縁部の内面にも沈線文が施されている。

覆土出土の遺物 (2、4、5)

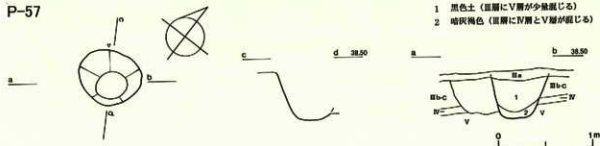
2は甕の口縁部と見られるもの。斜行縄文の地に横走沈線が施されている。4、5は縄文の施された底部。

(工藤研治)

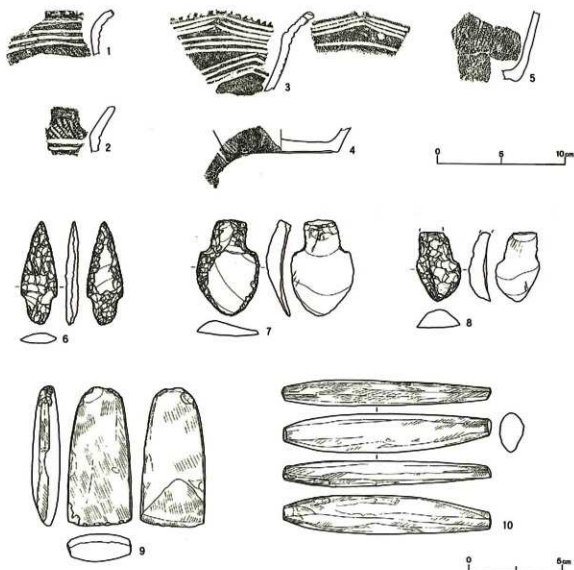
石器・石製品：覆土から石核、剥片、礫・礫片、魚形石器 (10) が出土している。上面から石鈬 (6)、スクレイパー (7・8)、石核、剥片、磨製石斧 (9)、砥石、加工痕礫が出土している。6は石鈬。加工がやや雑で、周縁部の形状はやや不整である。裏面に大きく素材面を残し、側縁はやや外湾する。7、8は柄付きのスクレイパーで側面はゆるく湾曲する。7は背面周縁加工のもので、刃部は薄く丸みを帯びる。8は背面加工が施され、急角度の刃部が作り出される。9は磨製石斧。片刃で刃縁はほぼ直線状を呈し、断面がやや丸みを帯びる。10は魚形石器。棒状で断面形は不整の楕円形である。

(広田良成)

P-57



図Ⅳ-147 P-57



図IV-148 P-57出土の遺物

P-61 (図IV-149)

位置 S-12・13

規模 $(0.90) \times (0.80) / (0.64) \times (0.44) / 0.34$

特徴 調査区西部の平坦面に位置する。Ⅲ層の調査中、遺物の集中が認められたため、集中の中心を通るようにトレンチを設定しⅤ層まで掘り下げた。トレンチを精査した結果、Ⅴ層を10cmほど掘り込むやや浅い堀込みが認められた。平面形は確認面、墳底共に不整の円形を呈する。断面形は碗状であるが底に小さい平坦面がある。覆土はいずれも礫や遺物を含んでいる。

遺物の出土状態 墳底から管玉、石鏃、石銛がまとまって出土している。土壌の北西側に偏っている。(図IV-149右下) (左は覆土遺物出土状況、細長いものは魚形石器)

(立田 理)

遺物 (図IV-150・151)

土器 出土資料のうちⅥ群土器を図示した。

覆土出土の資料 (1、2)

1 は肩の張りが弱く頸部が内傾する甕。頸部には無文帯があり、頸上部と肩部には横走る沈線文

が施されている。2は鉢の口縁部。口縁部には小突起があり、短い縦位の貼付帯が付いている。沈線で縁取りされた特殊縄文が施されている。

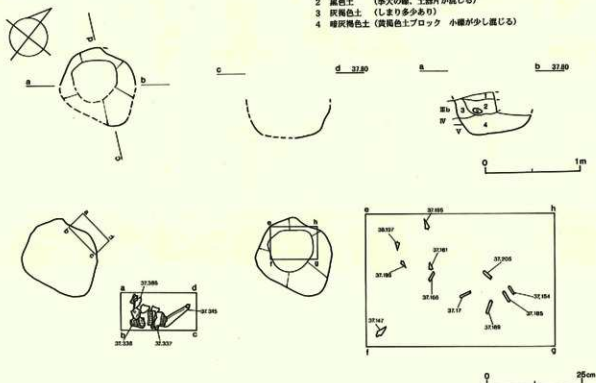
(工藤研治)

石器：墳底から石鏃(1・3・4・8)、石銛(10)、管玉(13~18)が出土している。覆土からは石鏃(2・5~7)、石銛(9)、スクレイパー(11)、石核、剥片、磨製石器片、礫・礫片、魚形石器(12)が出土している。1~8は石鏃。全て有茎凸基で、3~6は先端部が折れている。1~6は丁寧な加工が施される。7、8はやや雑な作りで左右非対称である。9、10は石銛。9は茎端部が角張る。11はスクレイパー。背面周縁加工で刃部は丸みを帯びる。12は魚形石器。頭部が、溝の部分から破損している。尾部には打ち欠きが認められる。13~18は管玉。全て碧玉製である。

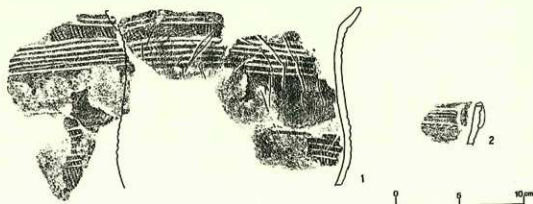
(広田良成)

P-61

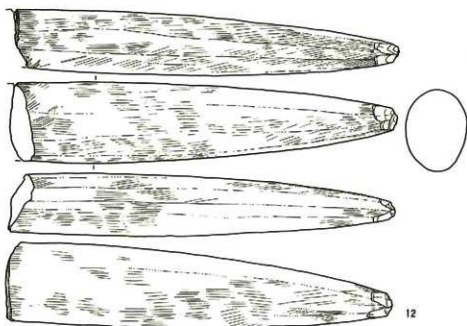
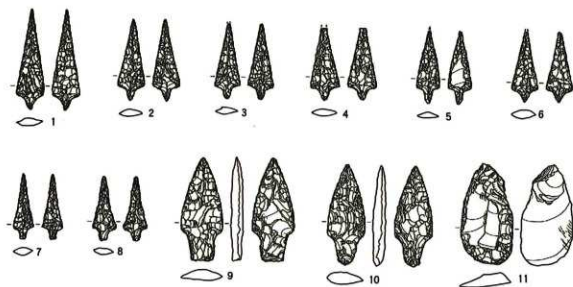
- 1 灰褐色土 (灰白色火山灰が粒状に混じる 少ししまりあり 粘性なし)
- 2 黒色土 (学大の礫、土団片が混じる)
- 3 灰褐色土 (しまり多少あり)
- 4 暗灰褐色土 (黄褐色土ブロック 小礫が少し混じる)



図Ⅳ-149 P-61



図Ⅳ-150 P-61出土の土器



図IV-151 P-61出土の石器・石製品

P-77 (図IV-152)

位置 T-13

規模 0.80×0.64/0.54×0.44/0.34

特徴 調査区西側の段丘平坦部に位置する。P-61から北に約5 mの位置にある。Ⅳ層上面で黒褐色の落ち込みを検出した。平面形は不整の楕円形である。壁は緩やかで墳底は平坦であるが、北東-南西方向では平坦面は少なく、断面形はやや碗状を呈する。

遺物の出土状況 墳底から少し浮いた位置に壺の底のみが伏せた状態で出土した。その中の土から管玉1点、小型の磨製石斧1点が出土した。(図IV-153-1・5・8)

(立田 理)

遺物 (図IV-153)

土器: VI群土器を図示した。

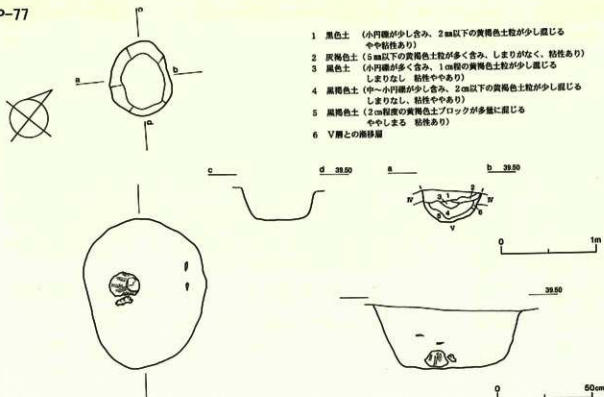
1は墳底から出土した底部。縦走する縄文が施されている。

(工藤研治)

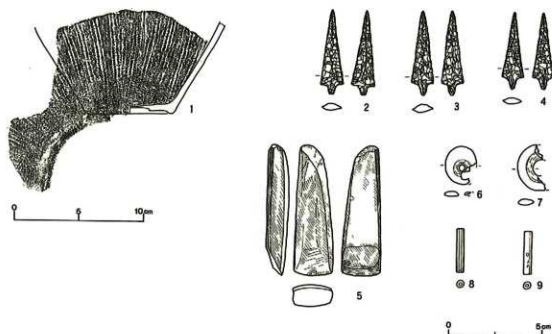
石器・石製品: 墳底から石鏃(2・3)が、墳底付近から環石(6・7)が出土している。覆土から石鏃(4)、剥片、磨製石斧(5)、管玉、礫・礫片が出土している。2~4は石鏃。丁寧な加工が施され、狭長に仕上げられている。5は小形の磨製石斧。のみ状で片刃である。6、7は環石。共に材質は不明で欠失が認められる。中央に6は小形の、7はやや大きめの穿孔が施される。8、9は管玉。8は鉄石英製、9は碧玉製である。

(広田良成)

P-77



図IV-152 P-77



図IV-153 P-77出土の遺物

P-101 (図IV-154)

位置 R-15

規模 $0.63 \times 0.56 / 0.50 \times 0.44 / 0.15$

特徴 調査区南西部の平坦面にある。Ⅲc層まで掘り下げたところ黒色土が円形に落ち込んでいて、土器の胴部が露出しているのが確認できた。半割して調査したところ浅い土壌と分かった。平面形は円形。底は平坦で壁は急に立ち上がる。墳底からはベンガラが検出された。H-17を切っている。

遺物の出土状態 覆土を少し掘り込んだところから完形の壺形土器が横に置かれた状態で出土し、墳底に近い覆土から管玉が7点出土した。

遺物 (図IV-155)

土器：Ⅵ群土器を図示した。

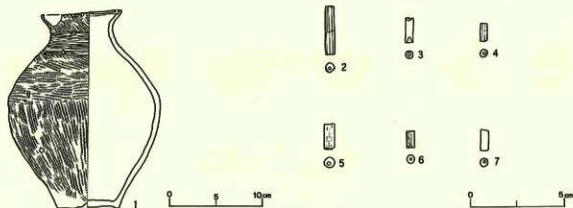
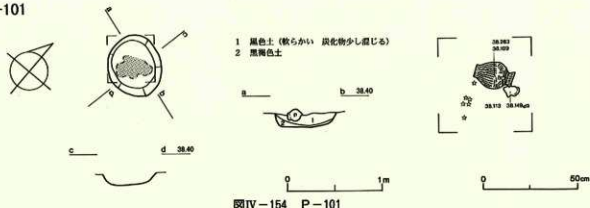
1は覆土の下部から出土した壺。最大径が体中部にある平縁のもので、頸部には沈線文がめぐる。口縁部には斜行縄文、体上半には横走縄文、体下半には縦走縄文が施されている。口唇には刻み目が付き、内面には沈線が1条めぐる。

(工藤研治)

石器・石製品：墳底から剥片、礫・礫片、管玉(2～7)、覆土からは剥片が出土している。2～7は管玉。全て碧玉製である。2は稜線が明瞭である。2点接合している。3、7は丁寧な研磨が施され、稜線が認められない。4～6は軽微な稜線が認められるもの。

(広田良成)

P-101



P-110 (図IV-156)

位置 R-15

規模 $(0.86) \times (0.24) / (0.76) \times (0.24) / 0.26$

特徴 調査区西側の平坦部に位置する。V層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを検出した。半截したところ墳底付近から鉢型土器の破片がまとまって出土したため、遺構とした。平面形は、確認できた部分からは墳口、墳底ともに円形もしくは楕円形と思われる。壁は緩やかで墳底は平坦である。

遺物の出土状況 小型の鉢1個体分と見られる土器片が墳底に一部接する形で出土した。

(立田 理)

遺物 (図IV-157)

土器: VI群土器を图示した。

墳底出土の資料 (1)

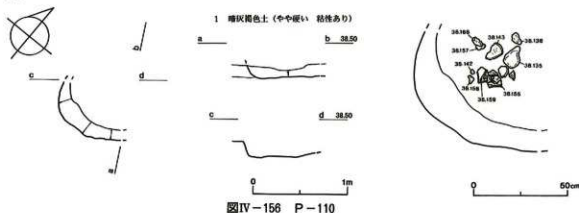
1 は口縁部がやや内傾する丸底の鉢。3~4条単位の沈線文で文様が描かれたもので、口縁部と底部近くには横走沈線が施され、体部には大柄な波状文の先端に渦文が施されている。沈線で区画された内側には横走ぎみの縄文が施されている。覆土出土の資料と接合したものである。

覆土出土の資料 (2~4)

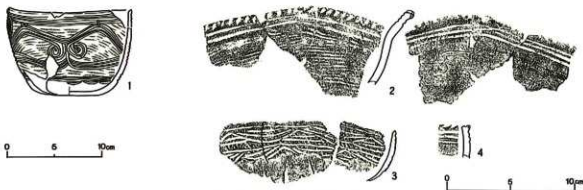
2~4 は鉢。2 は口縁部が外反するもので、口縁部には沈線文がめぐり、体部には横走る縄文が施されている。口唇の角には刻み目が付いている。3、4 は口縁部がやや内傾するもの。3 の口縁部には縄文地に細い沈線で文様が施されている。4 は口縁部に横走沈線が施されたもの。口唇上には沈線が施されてる。口唇の角には刻み目が付いている。

(工藤研治)

P-110



図IV-156 P-110



図IV-157 P-110出土の土器

P-112 (図IV-158)

位置 Q-15、R-15

規模 $0.99 \times 0.87 / 0.86 \times 0.78 / 0.21$

特徴 調査区南西部の平坦面にある。Ⅲc層まで掘り下げたところで黒色土が円形に落ち込んでいるのが確認できた。半割して調査したところ浅い土壇と分かった。平面形はほぼ円形。底は平坦で壁は急に立ち上がる。

遺物の出土状態 覆土の上部から大型の壺形土器の上半部と拳大の礫等が出土した。壇底及び壇底直上の覆土から石鏃2点、環石の破片1点、ホオジロザメの歯の加工品が1点出土した。

遺物 (図IV-159)

土器：Ⅱ群B類(1)、Ⅳ群B類(2)、Ⅵ群(3～7)土器を図示した。

覆土出土の資料(1～7)

1は山形口縁の一部で、口縁部には無文地に2段の原体の縄線文が施されている。内面は磨かれている。胎土には繊維が含まれている。2は斜行縄文が施された底部。

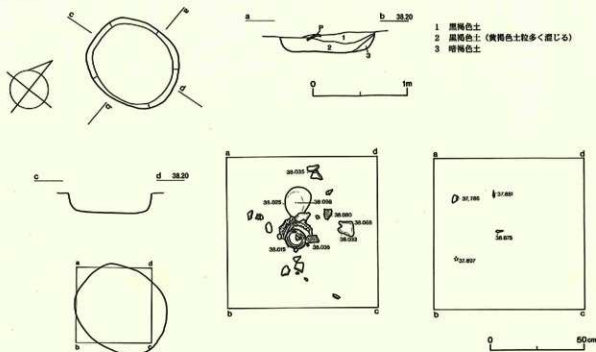
3～6は甕若しくは鉢とみられる資料。7は口縁がやや内傾する鉢。横走する縄文が施されている。8は縄文の施された底部。

(工藤研治)

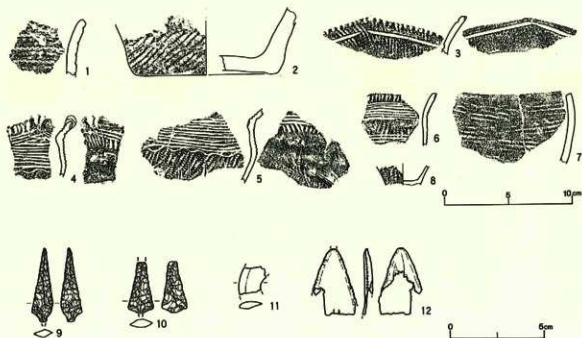
石器・その他：壇底から石鏃(9・10)、歯(12)が出土している。覆土からRフレイク、石核、剥片、すり石、環石が出土している。9、10は石鏃。9は左右非対称のもの。10は側縁がやや内湾する。11は環石。大半を欠失する。12はサメの歯の加工品。ホオジロザメのもので周縁部を弱く擦っている。

(広田良成)

P-112



図IV-158 P-112



図IV-159 P-112出土の遺物

P-121 (図IV-160)

位置 P-14

規模 $(0.84) \times (0.76) / (0.68) \times (0.60) / 0.08$

特徴 IIIb層調査中に、石鏃などの遺物の集中を検出した。付近を精査すると柔らかい黒褐色土の落ち込みが確認された。平面形は歪な円形で断面は皿状を呈する。墳底は平坦である。

遺物の出土状態 墳底から石鏃3点、有孔自然石1点がやや近接して出土した。石鏃の方向にまともりはなかった。

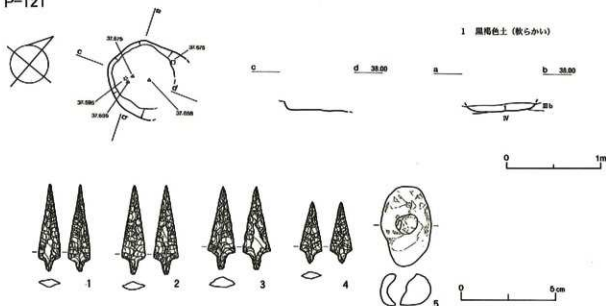
(立田 理)

遺物 (図IV-160)

石器：覆土から石鏃(1~4)、有孔自然石(5)が出土した。1~4は石鏃。全て有茎凸基で、丁寧な加工により狭長に仕上げられている。4はやや小形である。5は有孔自然石。ほぼ中央に円形の孔が開いている。

(広田良成)

P-121



図IV-160 P-121と出土の遺物

(3) 土 壌

Ⅲ層上面で検出した土壌は、全部で18基である。いずれも覆土からⅥ群土器片、剥片、礫などの遺物が多く出土しているが、用途の明確なものはない。(立田 理)

P-7 (図IV-161)

位 置 M-22

規 模 (0.87)×(0.57) / — / —

特 徴 M-22のⅢ層2回目の掘り下げを行っていた時、⑨の小グリッドから魚形石器が頭部を斜め上方に向けて出土した。魚形石器の周辺をさらに掘り下げたところ、石器の南西に隣接して5cm程低い位置から磨製石斧2点、ミニチュアの磨製石斧1点が出土した。またその東側では頁岩製のフレイクが25×15cmの範囲に集中していた。これらの下には靴形石器、石鏃、石錐などの剥片石器やⅥ群土器片、フレイクが径40cm程の範囲から出土した。以上の遺物を取り上げた後、さらに掘り下げを行うと、フレイク、Ⅵ群土器片が80×70cmの範囲に散在して出土し、それらの中央部には有孔自然石が出土している。これらより下のレベルでは遺物は出土しなかった。

遺物の取り上げと並行して北西-南東方向にトレンチをいれ、遺構の有無を精査した。遺物の周囲に土のよごれは認められず、木の根による攪乱もあって、壁の立ち上がりを確認することができなかった。とはいえ、魚形石器や玉等の出土状況からはⅢ層中に深さ約30cmの掘り込みが存在した可能性は否定できず、本報告書では土壌として扱うことにする。この遺構の北西約1.3mの位置にはX-8が検出されており、両者は関連があると考えている。P-7の性格としては、埋納遺構の可能性を想定している。

時 期 出土遺物から縄文時代のものと思われる。

(中田裕香)

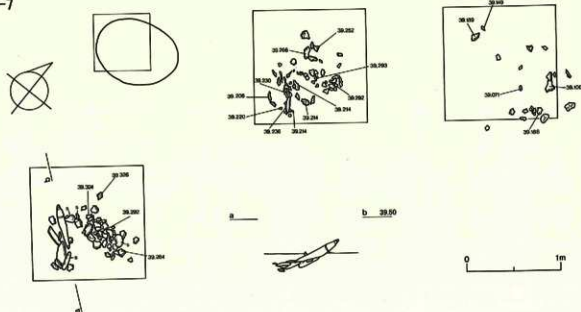
遺 物 (図IV-162・163)

土 器：Ⅵ群土器を図示した(1)。1は覆土出土の鉢。口縁部がやや内傾するもので、沈線と特殊縄文で文様が描かれている。

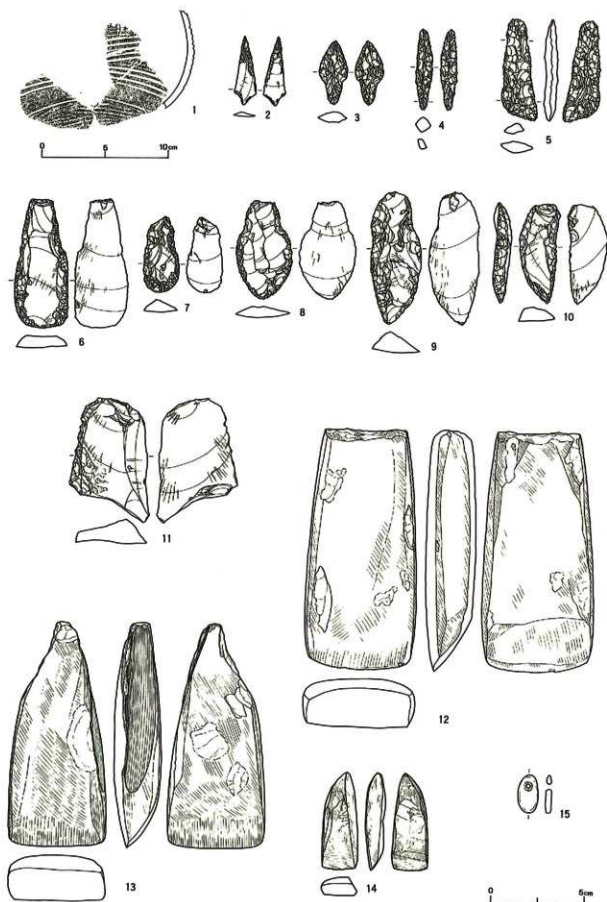
(工藤研治)

石 器：覆土から石鏃(2)、石銛(3)、石錐(4)、靴形石器(5)、スクレイパー(6~11)、Rフレイク、剥片、磨製石斧(12~14)、礫・礫片、魚形石器(16)、玉(15)が出土している。2、3

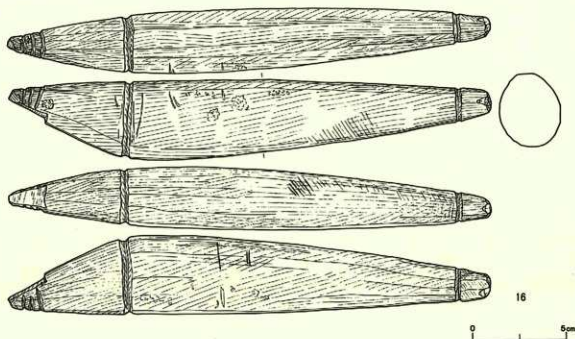
P-7



図IV-161 Ⅲ層上部の土壌(1) P-7



図IV-162 P-7出土の遺物(1)



図IV-163 P-7出土の遺物(2)

は石鏃。2は茎部と先端部のみ加工が施される。3はスベード状の石銑。4は棒状の石錐。5は靴形石器。刃部は柄に対して斜めに付き、刃縁は直線状を呈する。6～11はスクレイパー。6～10は柄部をもち、背面に周縁加工が施される。6～8は刃縁が丸みを帯び、9、10は刃先が尖る。11は背面左側縁に直線状の刃部が作り出される。12～14は磨製石斧。いずれも片刃で刃縁は直線状である。13は側面に擦り切り溝を残すもの。14は小形でのみ状のもの。15は玉。偏平な小礫の平坦面に両面から穿孔が施される。16は魚形石器。全面に丁寧な研磨が施され、頭部先端、頭部と胴部の間と尾部に溝が巡る。頭部の溝の裏側には平坦面が作り出される。断面形はほぼ円形である。

(広田良成)

P-34 (図IV-164)

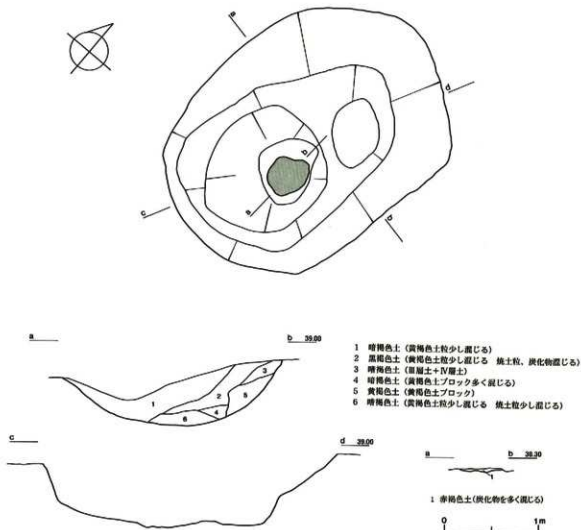
位置 S-17 規模 $3.16 \times 2.32 / 2.04 \times 1.14 / 0.68$

特徴 台地の縁辺部で検出された。Ⅲ層上面でⅡ層の火山灰の落ち込みとして確認された。火山灰を除去したところ、多量の遺物を伴ったくぼみが2ヵ所検出されたため、トレンチ調査を行った。その結果、2つの遺構(P-34、H-12)が重複しており、P-34は縄文時代の土壌で、H-12より新しいことが判明した。

遺構の掘り込み面はⅢa層上面で、完全に埋まりきっていない状態で検出された。西壁の一部がH-12を壊して構築されている。平面形は南北に長い不整の楕円形を呈する。墳底は北側と南側の2ヵ所に分かれどちらも不整の楕円形を呈する。北側は1段、南側は2段のゆるい段構造が認められ、北側はやや強く屈曲する。南側の墳底には薄い焼土が検出されている。覆土は自然堆積で、堆積状況から東側から埋まっていったものと考えられる。

遺物の出土状況 覆土上面で遺物が多量に出土しており、くぼみに遺物を廃棄している可能性がある。覆土中からも比較的遺物の出土量は多く、墳底出土の遺物はごく少ない。南側の墳底からやや浮いた位置で完形の土器が出土している。

P-34



図IV-164 Ⅲ層上部の土壌(2) P-34

時期 出土遺跡からⅥ群土器の時期のものと考えられる。

(広田良成)

遺物 (図Ⅳ-165~168)

土器 出土資料のうちⅣ群A類土器(11)、Ⅵ群土器(1~10、12~31)を図示した。

覆土出土の資料(1~31)

11は口縁部に薄い貼付帯が施されたもの。貼付帯にはLRの原体、体部にはRLの原体で施文されている。

1~6、12~16は甕。1~3は肩が張って頸部が内傾するもので、頸部には無文帯がある。頸上部と肩部には数条の横走沈線が施され、無文帯の上下を区画している。3の肩部の横走沈線の下縁には緩やかな波状の沈線文が施されている。2、3には低い山形突起がある。口唇には刻み目が付き、口縁部の内面には沈線文がめぐる。4は肩と頸部の境界が不明瞭で頸部が内傾する土器。頸部には無文帯があり、無文帯の上下、頸上部と頸下部には数条の沈線文がめぐる。体下半に斜行縄文が施文方向を違えて施されている。口縁部は無文。5は口縁部が外反するもので、体上半の無文地に細い沈線で大柄な鋸歯文が施され、その上下を横走沈線で区画されている。6は口縁部は口縁部が弱く外反するもので、体上半部には縄文地に横走沈線がめぐる。12は頸部に無文帯のあるもの。13、14は頸部に横走する特殊縄文が施されたものである。15は口縁部と体上半部に横走沈線が施されたもの。16は無文。17~20は甕の口縁部とみられるもの。

7~9、21~24は鉢。7は口縁部から底部にかけて縄文地に2~3cm間隔で沈線文がめぐるもので、底部には無文帯がある。底面にも縄文がほどこされている。8は沈線に縁取りされた横走する特殊縄文が無文帯を挟んで施されるものである。9は疎らな縄文の地に横走沈線と鋸歯状の沈線が施されたもの。24は体部に大柄な鋸歯状の沈線文が施されたもので、その上下を区画する横走沈線が口縁部と体下部にめぐる。

10は小型の甕。体上半には沈線で連続する菱形文様が施されている。25は甕かと思われる胴部。26は台付き土器の台部。

27~31は底部。28は鉢の底部かとみられる無文のもの。他は縄文の施されたものである。

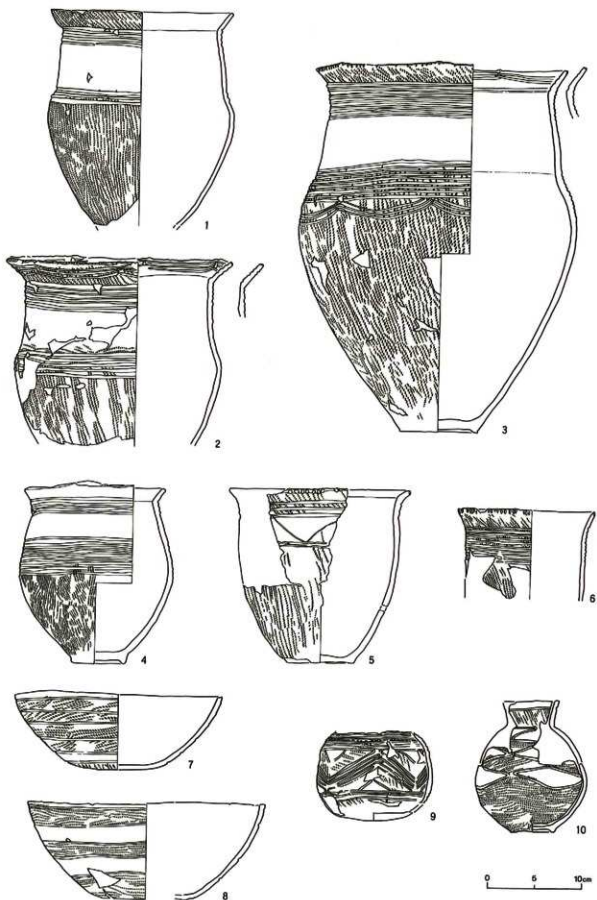
(工藤研治)

石器・石製品・土製品 竈底から剥片、礫・礫片、覆土からは石鏃(1~4)、靴形石器(5)、スクレイパー(6)、剥片石器片、石核(7)、剥片、原石、たたき石(8~12)、すり石(13~16)、砥石、石鏃、加工痕礫、礫石器片、礫・礫片、魚形石器(17)、管玉(18・19)、土玉(20)が出土している。1~4は石鏃。1~3は有茎凸基でいずれも先端が折れている。1、3は茎端部が尖る。4は無茎凹基で基部が浅く内湾する。5は靴形石器片。上半部を大きく欠失する。刃縁は直線状である。6はスクレイパー。両側縁に刃部が作り出される。7は石核。8~12はたたき石。8、9は棒状の礫を素材とし、両端にたたき痕をもつもの。9は平坦面にもたたき痕がある。10~12は周縁部及び平坦面にたたき痕が認められる。13~16はすり石。14、15は大きな弱いすり面の中によく使いこまれたすり面が認められる。17は魚形石器未成品。整形時の打ち欠きを残し、尾部に溝を作るための挟りが認められる。18、19は管玉。18は碧玉製、19は鉄石英製である。

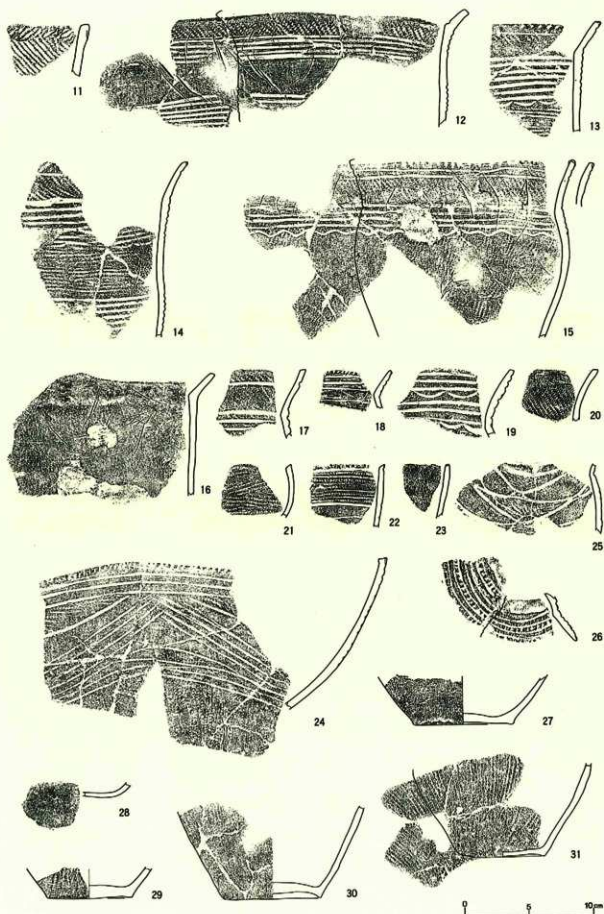
(広田良成)

20は土玉である。

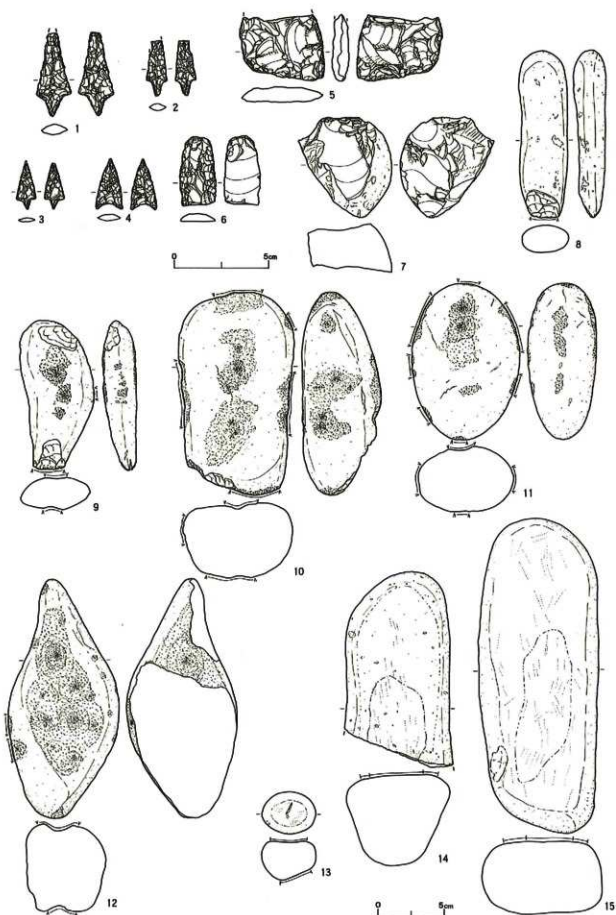
(立田 理)



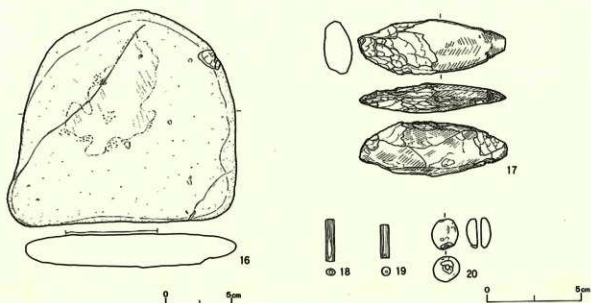
図IV-165 P-34出土の土器(1)



図IV-166 P-34出土の土器(2)



図IV-167 P-34出土の石器(1)



図Ⅳ-168 P-34出土の石器(2)・石製品・土製品

そのほかのⅢ層上部の土壌は全部で16基検出した。遺物が多量に出土する土壌が多い。出土遺物、掘り込み面から土壌のすべてがⅥ群土器の時期に属する可能性が高いと考えられる。土壌の平面形はほとんどが楕円形もしくは円形を呈する。検出面での規模から4つに区分できる。1) 半径〔もしくは長軸、以下も同じ〕が150cmを超えるもの、2) 半径が100～150cmのもの、3) 半径が100cm以下のもの、4) 遺構の形状が不明なもの、である。以下に4区分ごとに主に出土遺物とその内訳について若干の補足説明をする。

1) にはP-27、P-37がある。いずれも浅く最深部で40cmほどである。出土遺物は礫・礫片、Ⅵ群土器、剥片の順で多く、すべてが覆土からの出土という点で共通している。

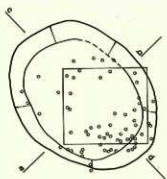
2) にはP-39・35・69・96がある。深さはいずれも40～60cmで、平面の大きさに比較すると深く、壁の立ち上がりは急である。遺物は出土していない(P-39)かほとんど無いもの(P-96)もあるが、ほぼ1と同じ傾向で、礫・礫片、Ⅵ群土器、剥片が多い。P-69はⅥ群土器83点のほか、剥片158点が出土している。また図Ⅳ-172の出土状況図は覆土2層の様子である。

3) はP-33・47・48・52・54・56・59・92・111がある。礫・礫片を多く出土する例が多い。

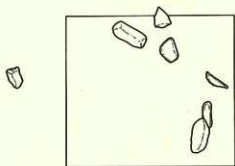
4) はP-70である。覆土中から遺物が多く出土したため記録を行ったが、自然の落ち込みの可能性もある。

(立田 理)

P-27



- 1 黒褐色土 (均質 粘土混じりシルト)
2 黒褐色土 (ややモザイク状 粘土質シルト〜シルト質粘土 混、粘土粒混じり)

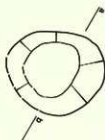


0 50cm

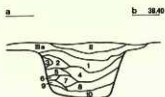


0 2m

P-39



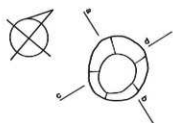
- 1 暗褐色土
2 黒色土
3 暗褐色土 (焼土粒多く混じる)
4 暗褐色土
5 黒褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
6 黒色土
7 黒褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
8 黒褐色土 (黄褐色土粒混じる)
9 黒色土
10 暗褐色土 (IV層の暗褐色土が塊状に混じる)
1. 9 以外は状がかい



0 1m

図IV-169 Ⅲ層上部の土坑(3)

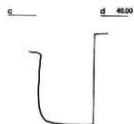
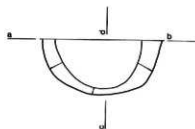
P-33



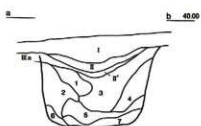
1 暗褐色土 (黄褐色土粒少し混じる)



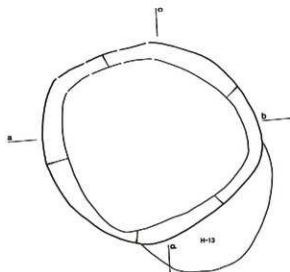
P-35



- 1 暗褐色土 (灰 a 層の混れ込み 硬い)
- 2 暗黄褐色土
- 3 暗褐色土 (硬い)
- 4 暗黄褐色土
- 5 灰褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 6 暗黄褐色土
- 7 暗黄褐色土 (黄褐色土と暗褐色土混じる)



P-37

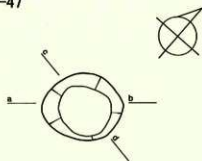


- 1 灰褐色土 (硬い)
- 2 灰褐色土 (1 より明るい色調、黄褐色土粒混じる)
- 3 暗褐色土 (黄褐色土粒混じる)
- 4 灰褐色土
- 5 暗褐色土 (黄褐色土粒少し混じる)
- 6 暗褐色土
- 7 暗黄褐色土

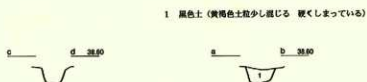


図IV-170 III層上部の土坑(4)

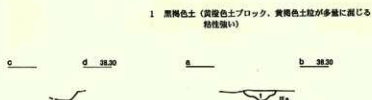
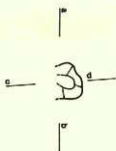
P-47



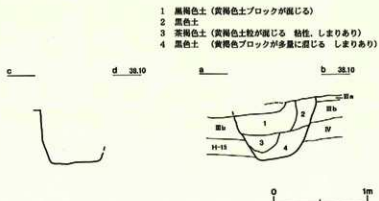
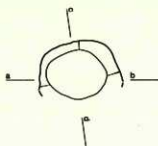
P-48



P-52

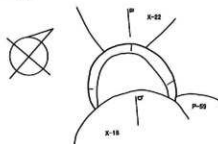


P-54



図IV-171 Ⅲ層上部の土壌(5)

P-56

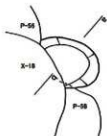


b 37.30



- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土 (炭化物混じる)
- 4 暗黄褐色土

P-59

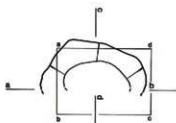


b 37.20



- 1 暗褐色土 (黄褐色土粒混じる 硬い)

P-69

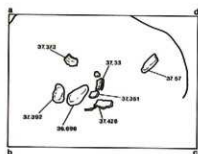


- 1 暗黄褐色土 (B-Tmブロックが少し混じる)
- 2 暗黄褐色土 (土器片が混じる 茶褐色土ブロックが混じる もろい)
- 3 暗黄褐色土 (小片混が少し混じる もろい)
- 4 黒褐色土 (やや硬い やや粘性あり)
- 5 黒褐色土 (もろい)
- 6 黒褐色土 (硬い 粘性あり)
- 7 黒褐色土 (やや硬い 硬い 粘性あり 土器片混じる)
- 8 黒褐色土 (硬い やや硬い 土器片混じる)
- 9 黒褐色土 (やや硬い 粘性あり)
- 10 暗黄褐色土 (硬い 粘性あり)

b 38.20



d 38.30

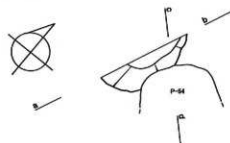


0 50cm

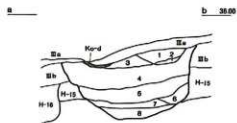
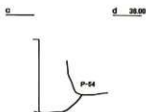
0 1m

図IV-172 III層上部の土坑(6)

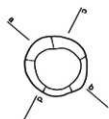
P-96



- 1 黒褐色土 (黄褐色土粒、土器片が混じる)
- 2 黒褐色土 (黄褐色土粒が多量に混じる)
- 3 暗灰褐色土 (少し湿る 粘性あり)
- 4 暗灰褐色土 (5cm以下の黄褐色土粒が多量に混じる 石器、土器、炭を含む)
- 5 暗灰褐色土 (4より硬が多く混じる)
- 6 黒褐色土 (黄褐色土ブロックが多量に混じる しまり、粘性なし)
- 7 黒褐色土 (黄褐色土ブロックが少し含み、しまり、粘性なし)
- 8 暗灰褐色土 (黄褐色土ブロックが多量に含み、しまり、粘性なし)



P-111



- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 暗黄褐色土



図IV-174 Ⅲ層上部の土壌(8)

土器出土の遺物 (図IV-175~178)

土 器 (図IV-175~176)

P-27・33・35・37・47・52・54・56・69・70・96出土の資料について記載する。

P-27 (1~4)

1~4はⅥ群土器。1は頸部に横走沈線がめぐる甕。2は頸部に無文帯のあるもので頸上部と肩部に沈線文が施されている甕。3、4は口縁部が外反する鉢。

P-33 (5~8)

5はⅥ群土器。丸底鉢のミニチュア土器で、口縁部が内傾する。6~8は甕の口縁部。

P-35 (9)

9はⅢ群A類。

P-37 (10~30)

10~13はⅣ群A類土器。11、12は口縁部に薄い貼付帯が施されたもので、13には貼付帯上に押し引き文が施されている。12は口縁部に縄線文が施されたもの。13は縄文が施されたものである。

14~30はⅥ群土器。14~19は甕の口縁部。20~25は鉢若しくは浅鉢の口縁部。20は口縁部が外反するもの。26は台付き土器の台部。29は台付き土器の一部。27、28は壺の口縁部。30は縄文が施された底部。

P-47 (31)

31はⅥ群土器の口縁部。口縁部には横走する沈線文が施されている。

P-52 (32)

32はⅥ群土器の鉢。口縁部がやや内傾するもので、斜行縄文が施されている。

P-54 (33)

33はⅥ群土器の甕若しくは鉢。口縁部が外反するもので沈線文が施されている。

P-56 (34、35)

34、35はⅥ群土器の胴部。縄文と沈線文が施されている。

P-69 (36、37)

36はⅥ群の小型の壺。縄文地に細い沈線で文様が描かれている。37はⅥ群土器の口縁部。

P-70 (38~43)

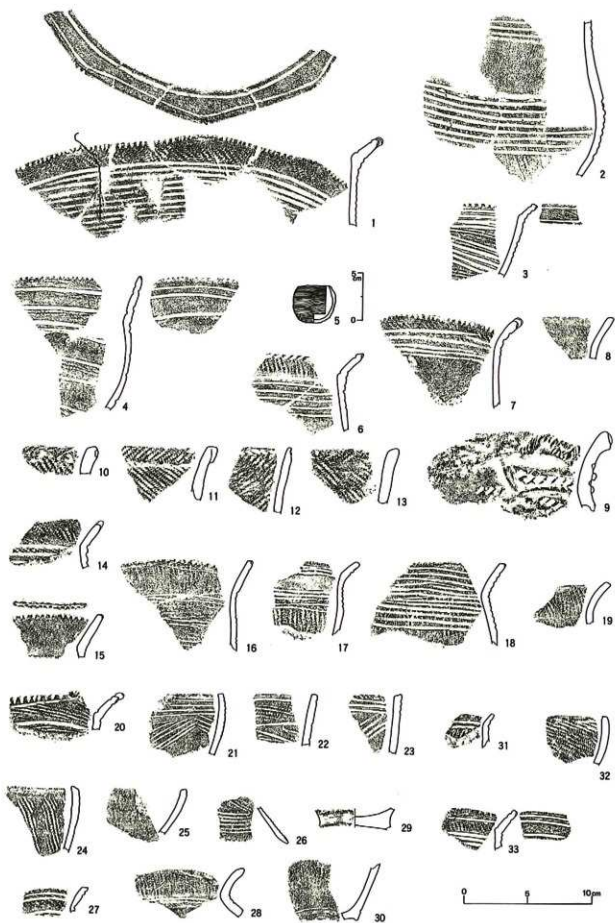
38はⅡ群B類土器。口縁部には無文地に斜めに交差する縄線文が施されている。39~43はⅥ群土器。

39、42は鉢。40、41は壺。43は縄文の施された胴部で壺の可能性がある。

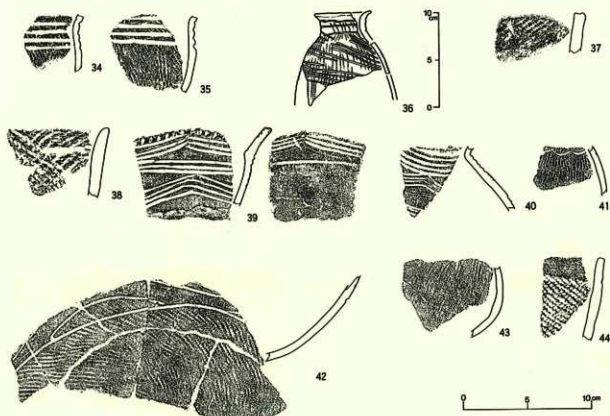
P-96 (44)

44はⅣ群A類土器。口縁部には幅の狭い無文帯がある。胴部には縦位施文の縄文が施され、口縁部の無文帯との境には2段の原体の縄線文が施されている。

(工藤研治)



圖IV-175 土城出土の土器(1)

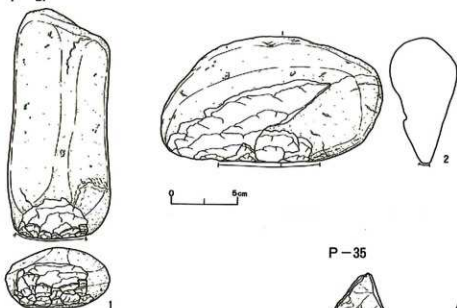


図Ⅳ-176 土壌出土の土器(2)

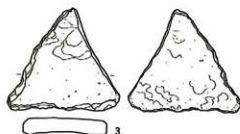
石 器 (図Ⅳ-177・178)

P-27 (1・2)、P-35 (3)、P-37 (4~8)、P-54 (9~12)、P-69 (13・14)、P-70 (15) 出土資料について記載する。1はたたき石。棒状礫の一端に剥離によるたたき痕をもつ。2はすり石。礫の一侧縁に打ち欠きにより細いすり面を作り出す。3、8は三角形礫石器。偏平礫を周縁加工により三角形に整形している。4、9は石鏃。4は木葉形、9は有茎平基で丁寧な加工が施される。5、6はスクレイパー。5は打面側以外の3辺に刃部が作り出される。6は柄付きで両面周縁に加工が施される。7は磨製石斧。刃部を欠失し、基部には打ち欠きが施される。10は石鋸。側縁は浅く外湾する。11は石核。12は有孔自然石。中央に円形の孔が開いている。13は両極石器。

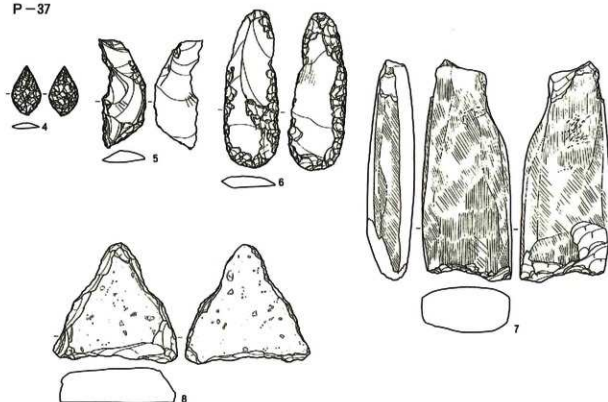
P-27



P-35

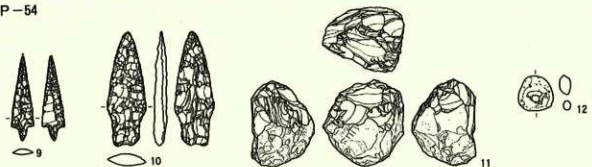


P-37

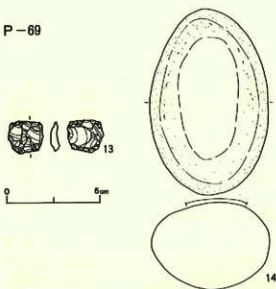


図IV-177 土橋出土の石器(1)

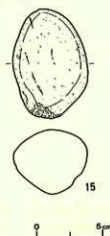
P-54



P-69

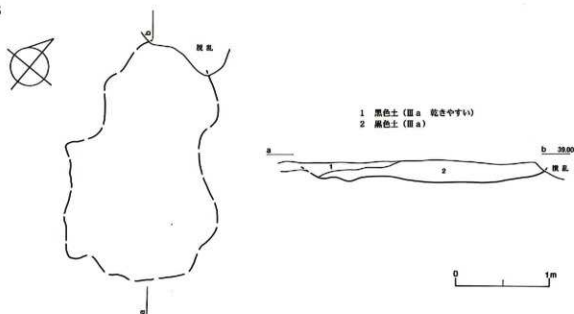


P-70



図IV-178 土壌出土の石器(2)

PS



図IV-179 PS

(4) PS

PS (図IV-179)

位置 P-17・18

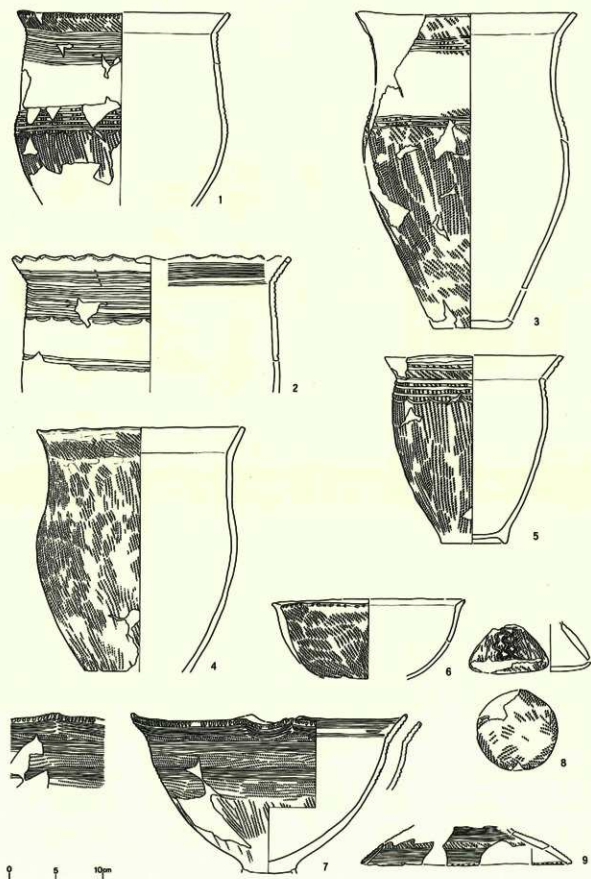
規模 (2.48)×1.36/0.24

特徴 IIIb層上部でIIIa層の黒色土が落ち込んでいるのが確認された。半割して調査した結果、多量の土器が出土したが、壁や底が不明瞭で、明確な掘り込みが認められなかった。内部にはIIIa層が堆積していて埋め戻しの形跡はない。窪地を利用した廃棄場の可能性がある。

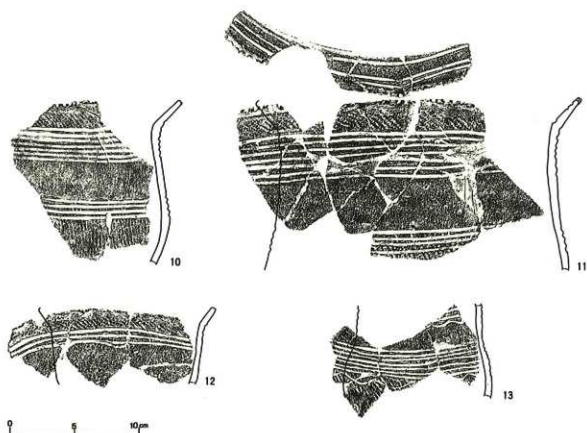
遺物 (図IV-180~182)

土器：窪地のIIIa層中からI群A類、II群A類、III群A類、III群B類、IV群A類、VI群土器(1~13)が出土した。1~5、10~13は甕。1~3、10、11、13は肩の張りが弱く、頸部が内傾するもので、頸部には無文帯がある。無文帯の上下、頸上部と肩部には数条の横走沈線がめぐる。1は平縁のもので、肩部の横走沈線の下縁には小波状の沈線文が施されている。3は平底のもの。2は波状口縁のもので、頸上部の横走沈線の下縁に小波状沈線が施されている。口縁部の内面にも沈線文が施されている。11には口縁部の内面にも沈線文が施されている。13には頸上部と肩部の横走沈線の下縁に小波状の沈線文が施されている。12は頸部に無文帯のあるもの。4は肩の張りが弱く、頸部が内傾する平縁のもので、全面に縄文が施されている。口縁部には斜行縄文、頸部から体部にかけては縦走縄文が施されている。5は最大径が口縁部にある平縁の土器。肩と頸部の境が無く、一連の曲線を描いている。口縁部には斜行縄文、体部には縦走縄文が施され、縄文施文後に沈線文が施されている。6は丸底で平縁の鉢。口縁部はやや外反し、口唇の角に刻目が付く。口唇断面は切り出し状を呈する。7は台付鉢。台部を欠く。口縁部は外反し、2個1組の山形突起が2か所、1個の山形突起が2か所付く。口縁部から体上半には数条単位の横走沈線帯が3段めぐり、その間には横走する特殊縄文が施されている。体下半部には縦走縄文が施されている。8は小型壺かと思われるもので、縄文地に縦位の小波状文が施される。縄文は底面にも施文されている。9は台付き土器の台部。横走沈線と縄文が施されている。

(工藤研治)

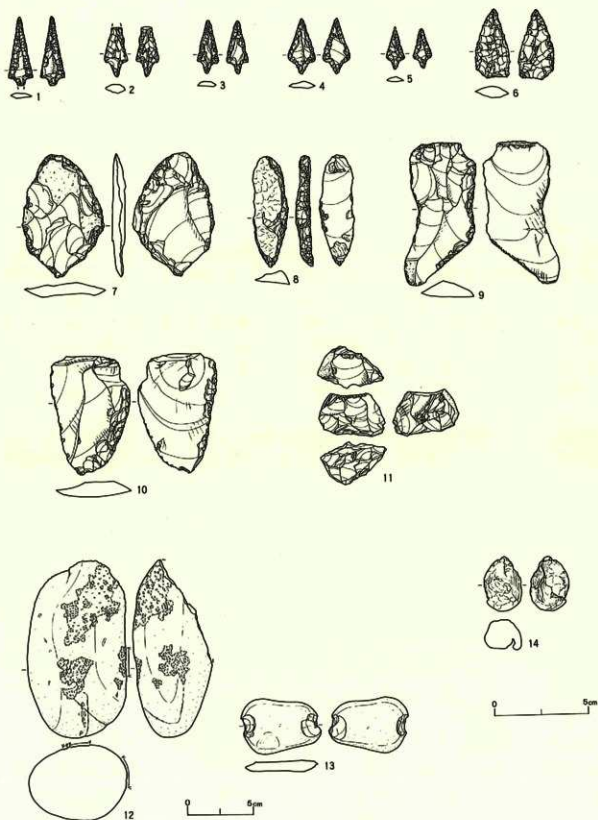


図Ⅳ-180 P S出土の土器(1)



図IV-181 PS出土の土器(2)

石器・石製品・土製品：窪地のⅢa層から石鏃（1～5）、石鈎（6）、石槍、両面調整石器（7）、スクレイパー（8～10）、剥片石器片、Rフレイク、石核（11）、剥片、たたき石（12）、石鋸、石錘（13）、石製品剥片、焼成粘土塊が出土した。1～5は石鏃。1、5は比較的丁寧な作りだが、他の作りはやや雑である。1～5は先端が折れている。1、5は細かい加工が施され、側縁は直線状を呈する。3は素材剥片の形状を残し、側面はやや反る。4はやや幅広のもの。6は石鈎で茎部を欠失している。7は両面調整石器。石槍未成品の可能性もある。8～10はスクレイパー。8は両面に焼けはじけがあり、特に表面に著しい。先端は尖り、表面右側縁には微細な剥離痕が認められる。10は両面右側縁に刃部が作り出される。11は石核。小形で、打面及び作業面の頻繁な移動が認められる。12はたたき石。部分的に被熱により変色し、正面及び側面にあばた状のたたき痕をもつ。13は石錘。



図IV-182 PS出土の石器・土製品

(5) 石囲炉・焼土

Ⅲa層からは住居跡等の遺構に伴わない石囲炉2基、焼土が54か所検出された。

石囲炉1 (図Ⅳ-183)

位置 N-21

規模 0.56×0.54/0.05

特徴 Ⅲ層上面で検出した。焼土の平面形は北側に小さな張り出しを持つ不整形である。礫はそれを取り囲むように配置されている。北西側には礫は配置されないが、北西、東、南西の各方向には放射状に礫が1つつ配置される。北西、南西側の礫は焼土の配石からやや離れて、東側の礫は配石に接して配置されている。礫の形状はやや細長く角のあるものが多い。住居跡に伴う炉の可能性もあったため周囲を精査したが、壁の立ち上がりや柱穴などは検出されなかった。

また、焼土中からは骨片が出土している。

時期 縄文時代

(立田 理)

石囲炉2 (図Ⅳ-183)

位置 N-21

規模 0.90×0.78/0.20

特徴 調査区南西部に位置し、西側にX-17・26がある。新旧関係は不明である。Ⅲ層上部の調査中、楕円形に配置された礫が出土した。付近の精査を行った結果、土器片、剥片、礫・礫片と共に焼土を検出し、石囲炉であることが判明した。石囲いの形状は東西に長い楕円形である。炉石はほぼ全周する。焼土の平面形は不整の円形で南側は石囲いの外に広がる。焼土内には焼骨片、炭化物粒を大量に含んでいた。炉石は棒状の礫が多く、全体的によく焼けている。住居跡の存在を想定して、周囲の精査を行ったが床等は検出できなかった。遺物は上面から土器片、剥片、礫・礫片が出土している。X-17・26との新旧関係は不明である。

時期 出土した遺物から縄文時代のもと考えられる。

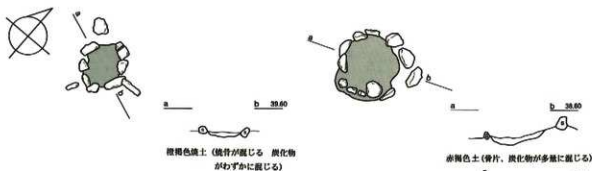
(広田良成)

焼土 (図Ⅳ-184~189)

Ⅲa層で検出された焼土は調査区中央から西部の平坦面に多く分布し、F-53・63のように縄文時代の堅穴住居の窪地に残されたものがある。焼土の大きさは大多数が1m以内であるが、F-52・65のように2mを越えるものやF-63のように5m以上のものもある。規模の大きなものは一般的な焚き火によって生じたとは考え難い。大部分の焼土は確認面や出土遺物から縄文時代VI群土器の時期と考えられるが、縄文時代後期の可能性があるものも一部にある。

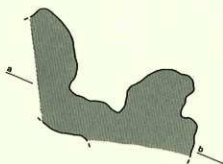
石囲炉1

石囲炉2



図Ⅳ-183 石囲炉1・2

F-1



- 1 暗褐色土
- 2 褐色土
- 3 鈍い褐色土
- 4 黄褐色土 (小円礫がごくわずかに散じる)
- 5 暗褐色土
- 6 褐灰色土
- 7 褐色土 (焼土塊が散じるIV層)

F-2



- 1 鈍い褐色土

F-3



- 1 暗褐色土 (焼土粒が散じる)
- 2 鈍い褐色土
- 3 黒褐色土 (焼土粒が散じる)

F-4



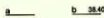
- 1 暗褐色土 (焼土粒が散じる)

F-5



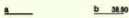
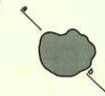
- 1 暗褐色土 (焼土が散じる)
- 2 鈍い褐色土 (黒面に焼土粒が少量に散じる層)
- 3 暗褐色土 (焼土粒が斑状に散じる)

F-6



- 1 暗褐色土 (焼土粒が散じる)

F-7



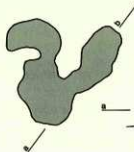
- 1 褐色土 (やや鈍い)
- 2 黒褐色土 (やや硬い)

F-8



- 1 褐色～黄褐色土
- 2 鈍い褐色土 (炭化物が散じる)
- 3 暗褐色土 (焼土粒が散じる)
- 4 暗褐色土 (焼土粒が散じる)

F-9

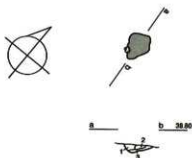


- 1 暗褐色土
- 2 灰黄褐色～暗褐色土
- 3 褐色～暗赤褐色土



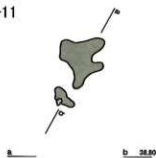
図IV-184 Ⅲ層上部の焼土(1)

F-10



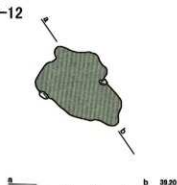
- 1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土 (焼土塊が少し散じる)

F-11



暗赤褐色土

F-12



- 1 暗褐色土 (やや硬い)
2 灰黄褐色土 (骨片が多く散じる 軟)
3 黄褐色土 (軟)
4 灰黄褐色土 (軟)
5 暗褐色土 (軟)

F-13



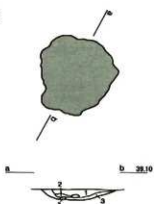
- 1 暗灰黄色土
2 純い黄色土
3 暗褐色土 (焼土粒が少量散じる)

F-15



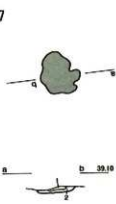
- 1 暗褐色土 (純い黄色焼土粒が少量に散じる)
2 暗褐色土 (炭化物、焼土が少し散じる)

F-16



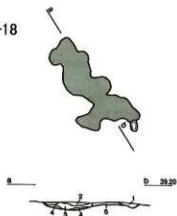
- 1 黄褐色土 (焼土ブロック、骨片が目立つ 軟)
2 褐色土 (軟質)
3 暗褐色土 (軟質)

F-17



- 1 純い黄色土 (軟質 骨片散在)
2 暗褐色土 (焼土塊が少し散じる 骨片散在 軟質)

F-18



- 1 暗褐色土 (焼土粒が稀に散じる)
2 灰黄褐色土 (軟)
3 純い黄褐色土 (軟)
4 暗褐色土 (面状に3が散じる 軟)
5 暗褐色土 (赤味がある 他より硬い)

F-19



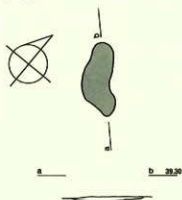
F-20



図IV-185 III層上部の焼土(2)

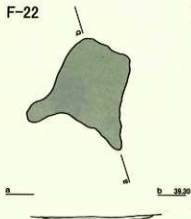
0 1 1m

F-21



暗茶褐色焼土 (黒色土混じり)

F-22



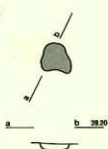
暗茶褐色焼土 (黒色土混じり、焼骨がわずかに混じる)

F-23



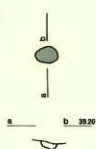
- 1 淡赤褐色土 (焼骨が少量に混じる)
- 2 暗赤褐色土 (黒色土混じり、焼骨片が混じる)
- 3 黒色土 (淡赤褐色土混じり)

F-24



暗赤褐色土 (暗褐色土混じり、焼骨片が混じる)

F-25



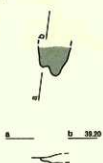
明茶褐色土

F-26



暗赤褐色土 (焼骨がわずかに混じる)

F-27



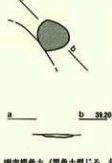
赤茶褐色土 (炭化物混じる)

F-28



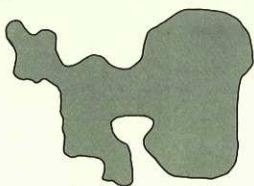
赤褐色焼土

F-36

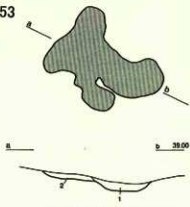


明赤褐色土 (黒色土混じり、骨片がわずかに混じる)

F-52



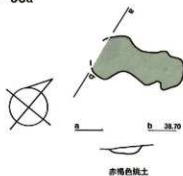
F-53



- 1 赤褐色土 (褐色土混、焼骨片が混じる)
- 2 暗赤褐色土 (焼骨片が混じる)

図IV-186 Ⅲ層上部の焼土(3)

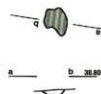
F-55a



F-55b



F-56

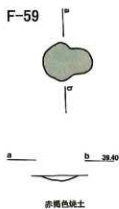


黄褐色土 (粉状の骨片が混っている)

F-58



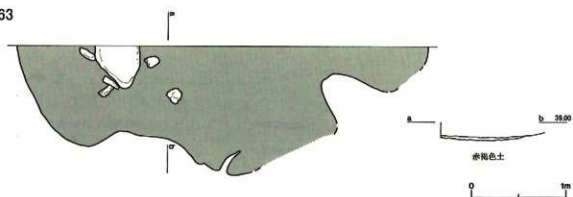
F-59



F-60

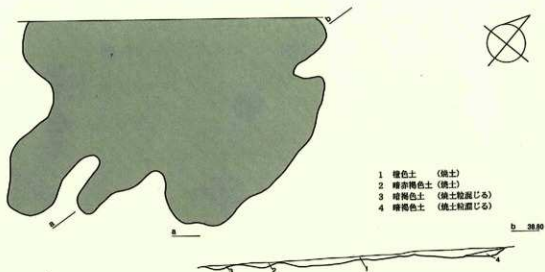


F-63



図IV-187 Ⅲ層上部の焼土(4)

F-65

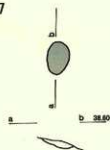


F-66



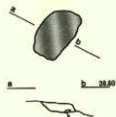
- 1 暗褐色土 (焼土粒、炭化物粒少し混じる)
2 赤褐色土 (黒褐色土粒+炭化物少し混じる)
3 暗褐色土 (焼土粒少し混じる)

F-67



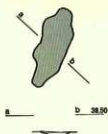
赤褐色土 (炭化物粒少し混じる)

F-69



赤褐色土 (魚の焼骨、炭化物粒混じる)

F-70



褐色土 (粘性あり、褐色土が底状に混じる)

F-71



赤褐色土 (粘性あり、褐色土が少し混じる)

F-72



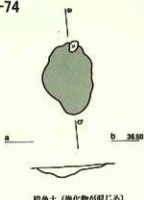
赤褐色土 (粘性あり、褐色土が少し混じる)

F-73



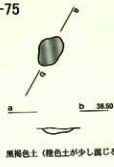
褐色土 (炭化物が混じる)

F-74



褐色土 (炭化物が混じる)

F-75

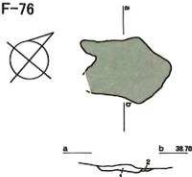


黒褐色土 (褐色土が少し混じる)

0 1m

図Ⅳ-188 Ⅲ層上部の焼土(5)

F-76



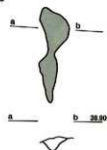
- 1 赤褐色土
2 暗褐色土（焼土粒子、ブロック多く混じる）

F-77



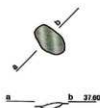
赤褐色土（黒色土少し混じる）

F-79



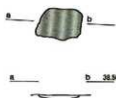
赤褐色土（黒色土混状に少し混じる）

F-80



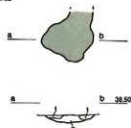
赤褐色土（焼土）

F-81



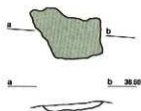
赤褐色土（黒色土混状に少し混じる）

F-82



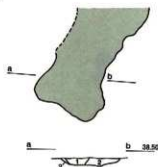
- 1 赤褐色土（混状に黒褐色土が混じる しまりなし、弱粘質）
2 黒褐色土（1土ブロックが少し混じる しまりなし、弱粘質）

F-83



黒褐色土（赤褐色土が少し混じる しまりなし、弱粘質）

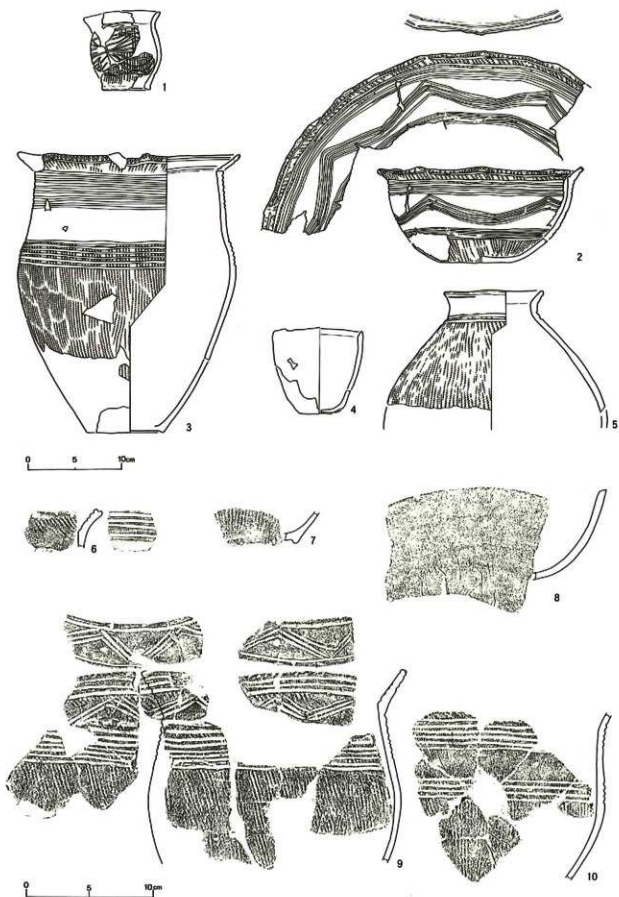
F-84



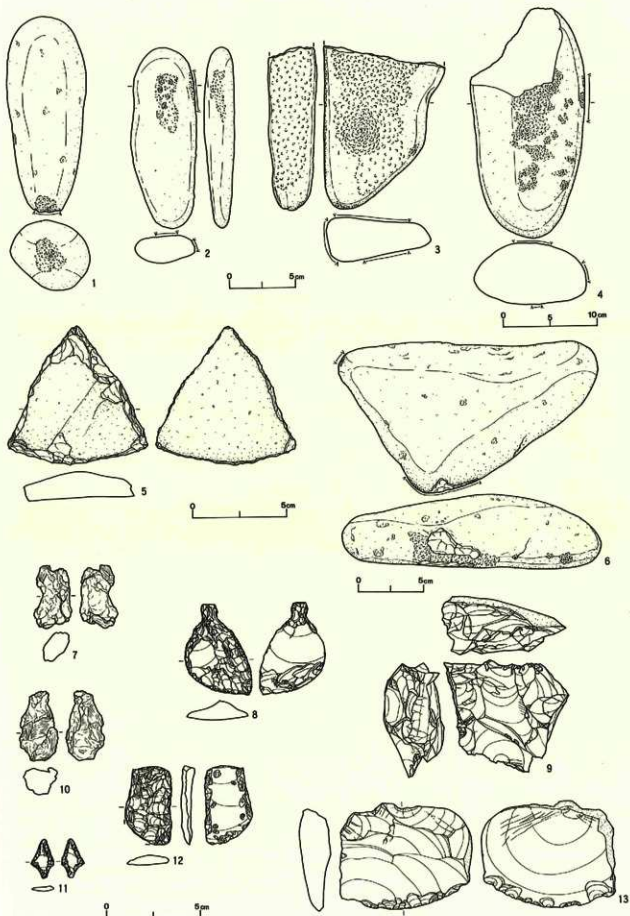
- 1 明黄褐色土（赤褐色土がブロック状に混じる ややしまる粘質）
2 赤褐色土（ややしまる 弱粘質）



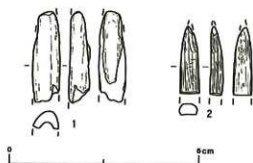
図IV-189 III層上部の焼土(6)



図IV-190 焼土出土の土器



図IV-191 焼土出土の石器・石製品・土製品



図IV-192 焼土出土の骨製品

(6) MZ

Ⅲa層上面の土壌墓以外の場所で土器、剥片、小礫等が比較的多く出土する地点が3ヵ所検出された。下に墓墳等の遺構の存在を想定しトレンチ調査を行ったが、遺構は確認できなかった。そのためこの遺物集中地点を「MZ」と呼称し、それぞれのまとまりごとに遺物の取り上げを行なった。
MZ-1

位置 P-15・16

特徴 調査区南西部のX-16とX-17・26の間に位置する。小礫、剥片、VI群土器が多く、配石を伴う土壌墓の上面の遺物と傾向がほぼ同じである。小礫に関しては土壌墓上面のものよりやや大きめのものが多い。性格は不明であるが、土壌墓の間に位置し、遺物出土状況も土壌墓と共通性が高いことを考慮すると墓に関連するものである可能性が高い。

MZ-2

位置 Q-16

特徴 調査区南西部のX-17・26とX-24の間に位置する。MZの中では最も遺物の量が多い。VI群土器が多く、2～3個体分の土器が潰れた状態で出土した。他には小礫、剥片等が多く出土している。MZ-1同様土壌墓の近くにあるため、墓に関連するものである可能性が高い。

MZ-3

位置 T-14

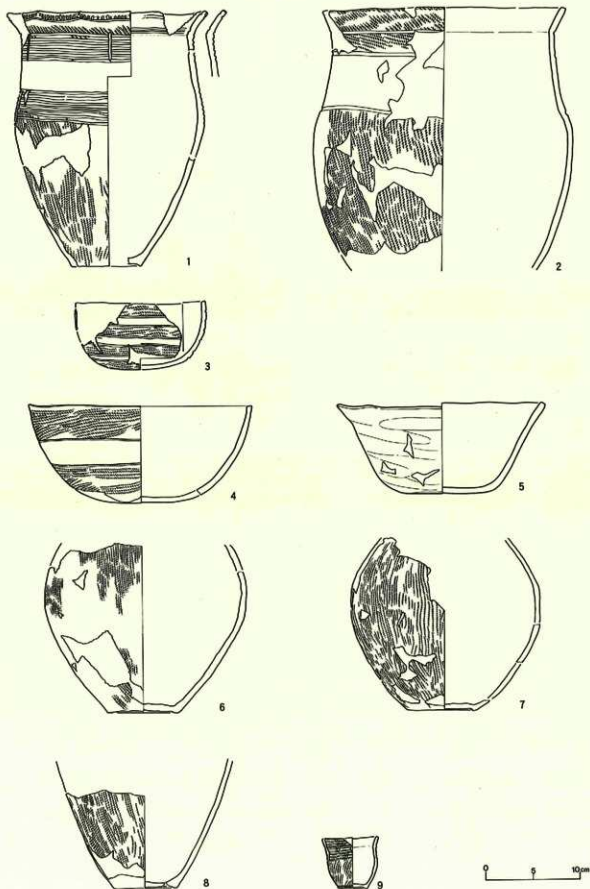
特徴 調査区北西部に位置し、一部は調査区外に広がる。遺物の出土量はやや少なく、遺物の分布は調査区外の方に向けて濃くなる傾向がある。性格は不明だが、調査区外に広がる土壌墓の配石の一部の可能性もある。

遺物 (図IV-193～197)

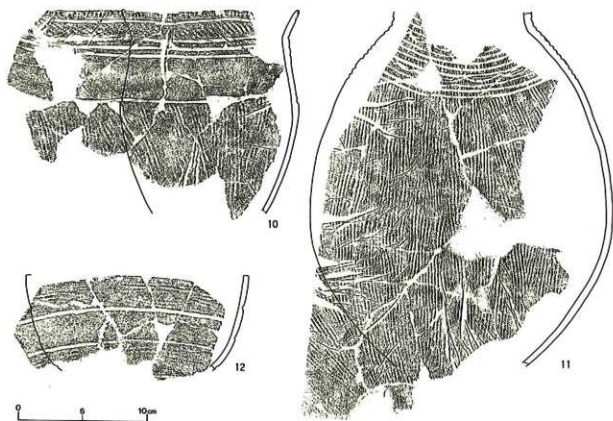
土器：出土した資料のうちVI群土器について記載する。

MZ-2の資料(1～8)

1、2は肩がやや張り、頸部が内傾する甕。頸部には無文帯がある。1には無文帯の上下、頸上部と肩部に数条の沈線文がめぐり、頸上部の沈線帯には縦位の沈線文が所々に施されている。口縁部には斜行縄文、胴部には縦走縄文が施されている。口縁部の内面にも沈線文が施されている。2の口縁部には斜行縄文、頸上部には上下を横走沈線で縁取りされた横走縄文、胴部には縦走縄文が施されている。3～5は鉢。3、4は丸底のもので、沈線で縁取りされた横走縄文の帯が無文帯を挟んでめぐっている。5は口縁部がやや外反する無文の鉢。6～8は縦走縄文が施された体下半部の資料である。



図Ⅳ-193 MZ出土の土器(1)



図IV-194 MZ出土の土器(2)

MZ-3の資料(9)

9は小型の甕。口縁部から頸部にかけて縄文地に横走沈線がめぐる。

MZの資料(10~12)

10は肩の張りが弱く、頸部が内傾する平縁の甕。頸部には無文帯が残る。肩部と頸上部には横走する沈線文が施され、無文帯を区画している。口縁部には斜行縄文、胴部には縦走縄文が施されている。口縁には刻み目が付いている。11は壺。体上部には縄文地に横走沈線と小波状沈線がめぐる。12は口縁部と体下部に沈線で縁取られた横走する特殊縄文が施された鉢。体中部には無文帯がある。これらの資料はMZの番号を特定できないものであるが、参考資料として掲載した。

(工藤研治)

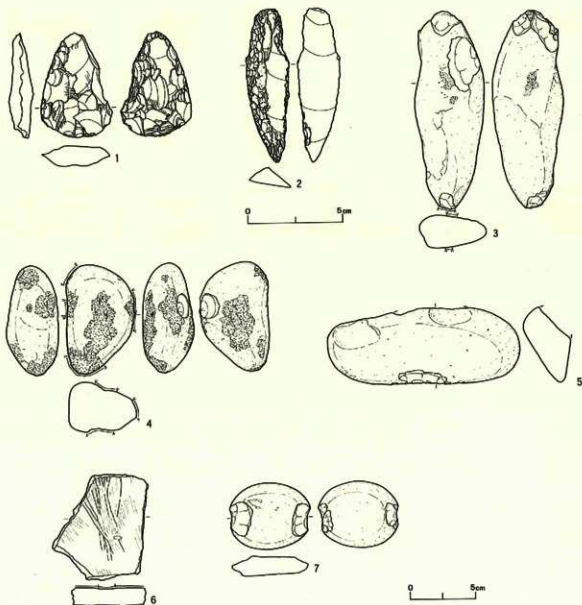
石 器

M Z - 1 (図Ⅳ-195)

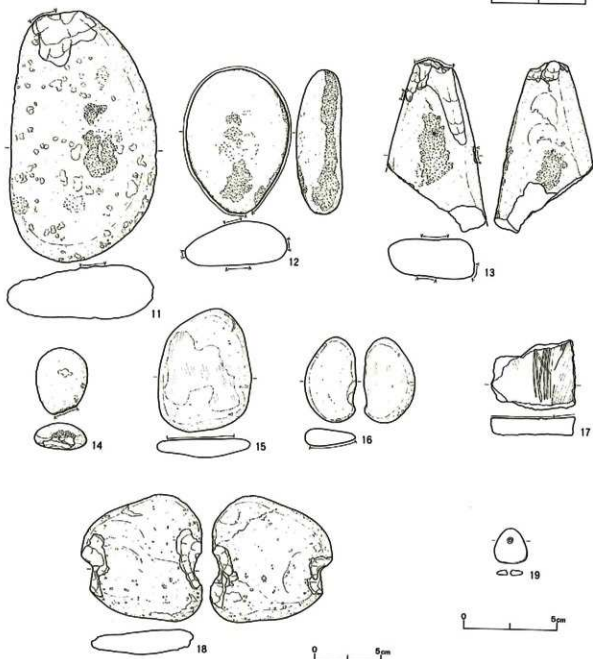
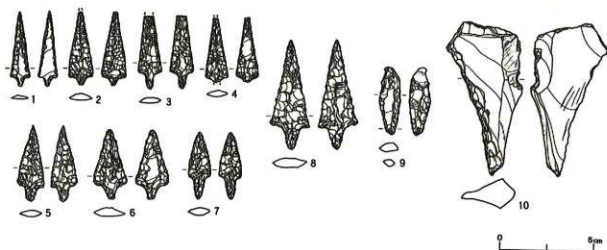
1は筥状石器。縦長剥片を素材とし、形状は三角形を呈する。両面に粗い加工が施され、作りは雑である。刃部は両刃で刃縁は外湾する。2は柄付きのスクレイパー。背面右側縁は素材の形状を変えず、左側縁は丁寧な加工により急角度の刃部を作り出す。3、4はたたき石。3は棒状礫の両端にたたき痕をもつもの。4はよく使い込まれており、平坦面、下端部、周縁部にたたき痕が認められる。表裏面の平坦面のたたき痕は大きく深い。5はすり石。断面形が三角形の礫の1側縁に、打ち欠きと敲打により細いすり面を作り出す。6は砥石。砥面はよく使い込まれ平滑である。砥面内に細い溝状の擦痕が認められる。7は石錘。長軸に両面から打ち欠きが施される。

M Z - 2 (図Ⅳ-196)

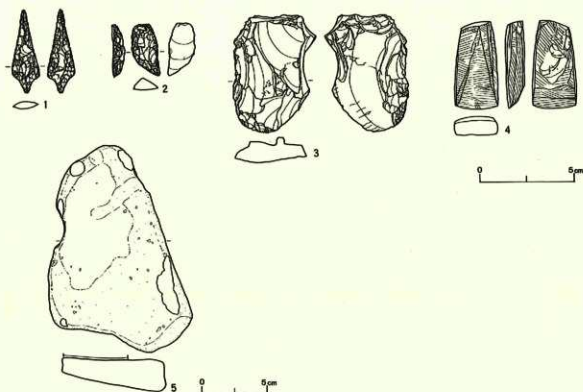
1～8は石鏃。1～4は丁寧な加工を施し、精巧に仕上っている。側縁は長い直線状を呈する。5、



図Ⅳ-195 M Z - 1 出土の石器



図IV-196 MZ-2出土の石器・石製品



図IV-197 MZ-3出土の石器

6はやや幅広いもの。5は黒曜石製。6の加工はやや雑である。7は側縁が外湾し、基部は長い。8は大型で側縁はやや鋸歯状を呈する。基部はやや片側に寄る。9は石錐。両側縁に細かい加工を施し尖頭部を作り出す。10はスクレイパー。背面右側縁にやや内湾する刃部を作り出す。11～14はたたき石。11、13は上端部と平坦面にたたき痕をもつもの。13は表裏面にくぼんだたたき痕が認められる。12は周縁部と平坦面に細かいたたき痕をもつ。14は下端部に大きなたたき痕をもつ。15、16は擦り石。15は礫の平坦面によくすりだれたすり面をもつ。16は上端部に幅の狭いすり面が認められる。裏面には細かいひっかき傷の様な擦痕がわずかに認められる。17は砥石。砥面はよく使い込まれ、砥面内に溝状の擦痕をもつ。MZ-1の6と同一個体と考えられる。18は石錘。短軸の両端に打ち欠きによる抉りを作り出す。19は玉。扁平小礫の平坦面に両面から穿孔を施している。

MZ-3 (図IV-197)

1は有茎凸基の石錐。丁寧な加工が施され、精巧に作り上げられている。一方の返しはやや丸みを帯び、基部先端は尖る。2、3はスクレイパー。2は柄部と身部分かれる。刃部は急角度で、柄に対して斜めに付けられる。3は末端部に刃部が作り出されるエンドスクレイパー。刃部は両面からの丁寧な加工で作られる。4は磨製石斧。全面に丁寧な研磨が施され、正面右側縁にわずかに擦り切り溝を残す。刃部は片刃で、刃縁はやや外湾する。裏面の鑄は明瞭である。5は砥石。砥面はよく使い込まれ、部分的にわずかに溝状の擦痕が認められる。

3 包含層出土の遺物

(1) 土 器 (図Ⅳ-199~227)

Ⅲ層上部から出土したⅥ群土器について記載する。包含層から出土したⅥ群土器は約203,000点で、ごく少量の後北C1式除いて他はすべて恵山式土器である。主に調査区の中央部に分布し、縄文時代の境の沢状の凹地や茂田地川に面した斜面では少ない(図Ⅳ-198)。

Ⅵ群土器 (図Ⅳ199~227)

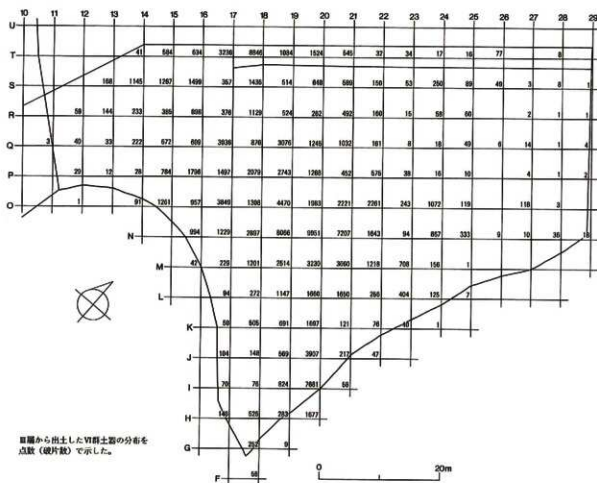
A類 (図Ⅳ-217~162)

162は壺の上半部の資料である。肩が張って頸部がほぼ直立するものである。口縁部には山形の突起が付き、やや長めの頸部には上部に沈線文がめぐる。体上半部には沈線で変形工字文が施され、沈線で区画された部分に刺突文が施されている。体下半部には縦走縄文が施される。器面は丁寧に調整され、磨かれている部分もある。二枚構式段階あるいはそれ以前の資料かと思われる。

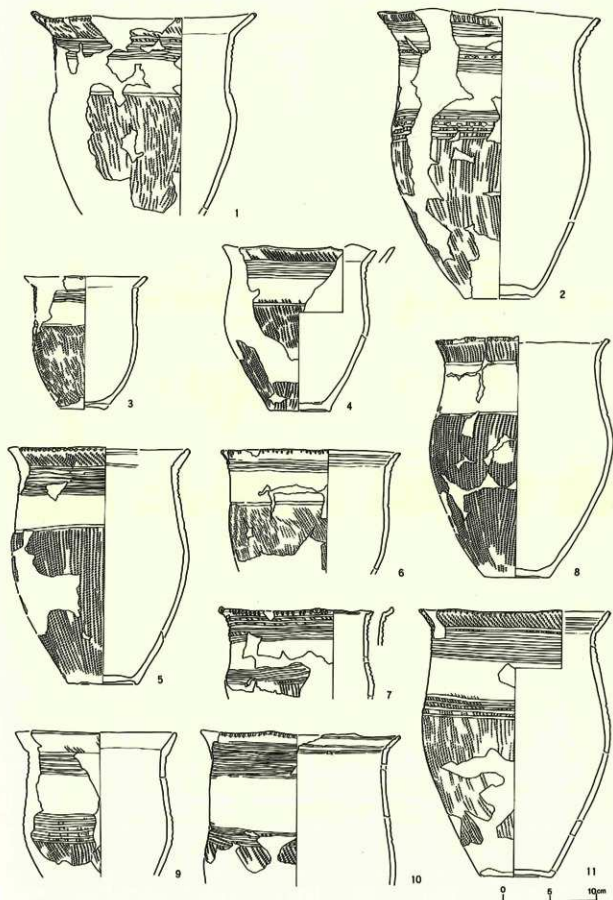
B類 (1~161、163~258)

Ⅵ群土器の主体をなすものである。西桔梗B2 遺跡出土資料の段階から大中山5遺跡出土資料にかけての段階のものと考えている。

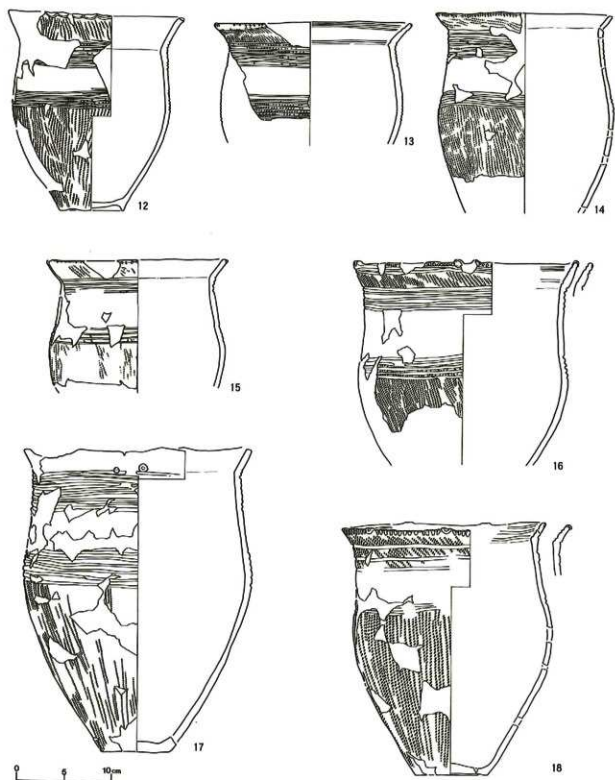
基本的な器種には甕、鉢、浅鉢、台付き鉢、壺があり、それらの中間的な器形のもの、特殊な器形



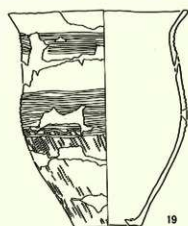
図Ⅳ-198 Ⅵ群土器の分布



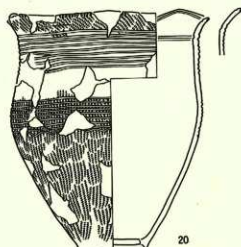
図Ⅳ-199 Ⅲ層出土の土器Ⅲ



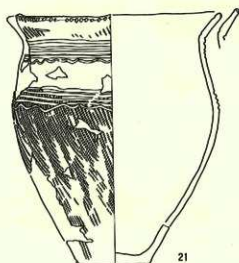
図IV-200 包含層出土の土器④



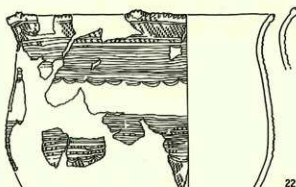
19



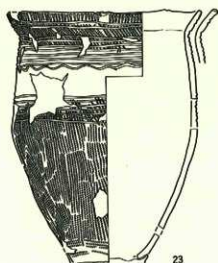
20



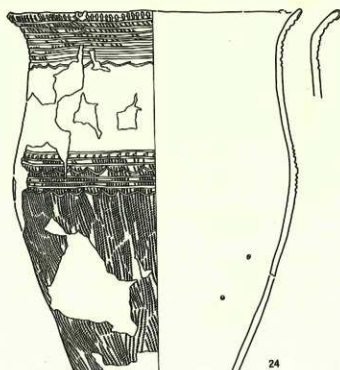
21



22



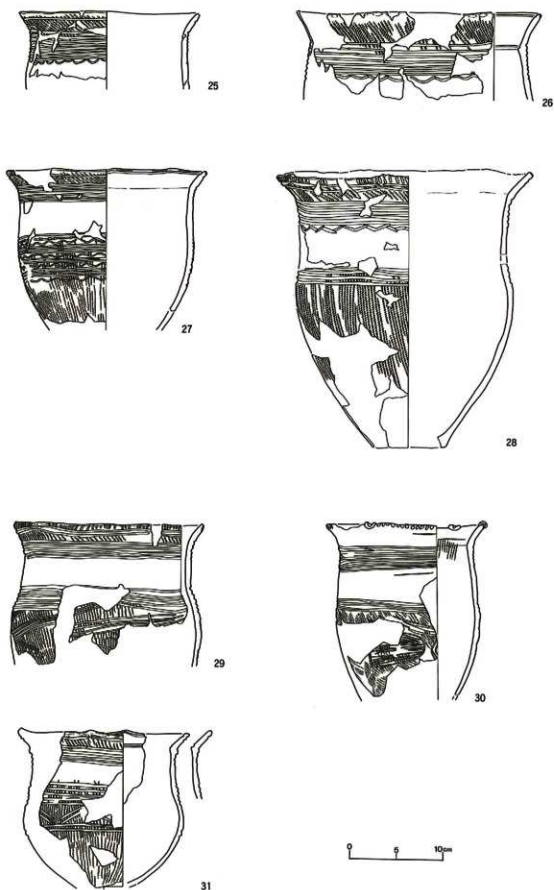
23



24

0 5 10cm

図IV-201 包含層出土の土器②

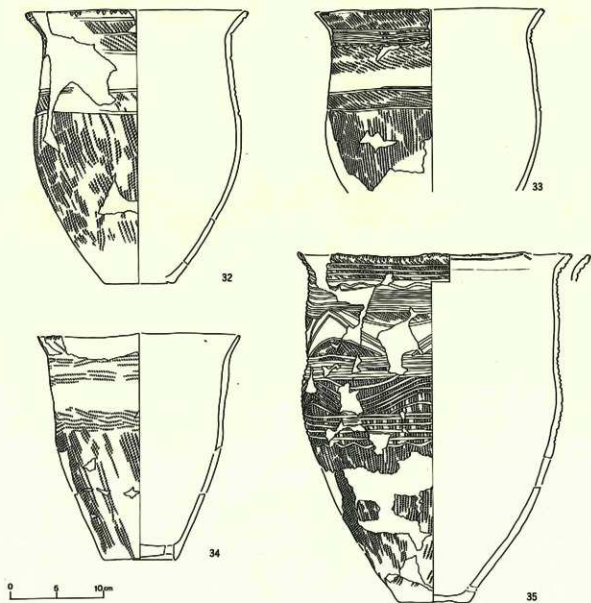


図IV-202 包含層出土の土器(例)

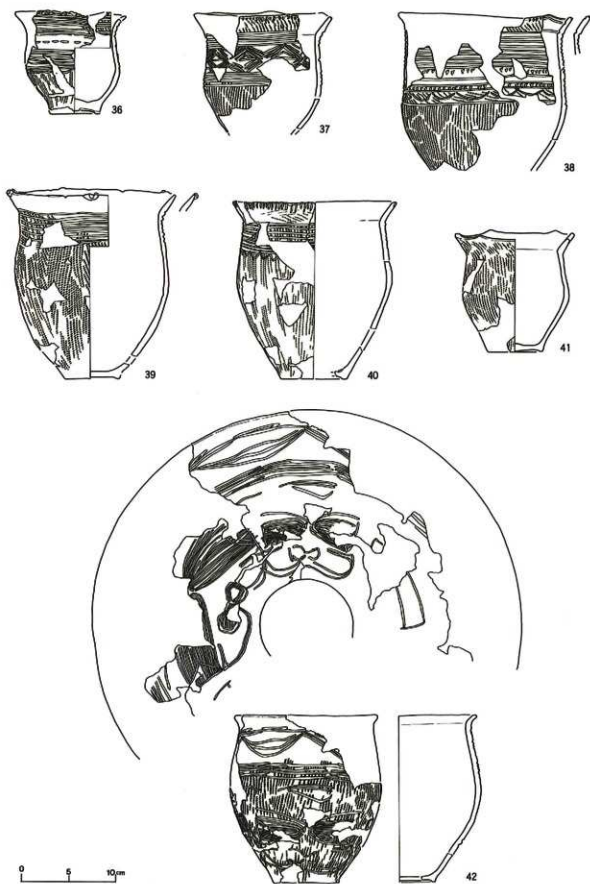
のものもある。文様を構成する要素には縄文、沈線文、刺突文等があり、縄文施文後に沈線文や刺突文が施され、さらに器面を軽く磨くという特色がある。この器面の磨きは程度の差はあるけれども、ほとんどの資料で認められた。縄文が施されたものでは磨きによって節がつぶれ、条が本来よりも細くなって間隔が広がっている。縄文の原体はほとんどがR Lであるが、まれにL Rのものもある。

甕 (1~78、220~232)

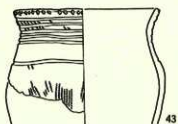
肩がやや張って頸部が直立するもの、肩の張りが弱く頸部が直立若しくは内傾するもの、肩と頸部の境が無く、体部から頸部のくびれにかけて一連の曲線を描くものに大別され、口縁部はいずれも外反する。前二者にあっては頸部に無文帯を残すものが多い。口縁は平縁のものと緩やかな波状をなすものがあり、口唇の角に刻み目が施されるものが多い。底部はごく低い高台の付く揚げ底のものが一般的であるが、まれに平底のものもある。口縁部には斜行縄文、体部には縦走縄文が施された資料が多いが、口縁部に縦走縄文が施されるもの、横走する縄文が施されるもの、口縁部に縄文の施文され



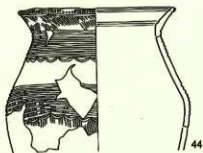
図IV-203 包含層出土の土器⑦



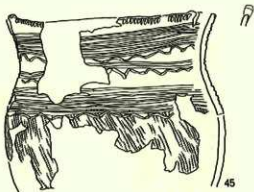
図IV-204 包含層出土の土器28



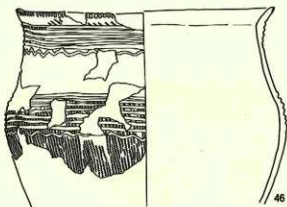
43



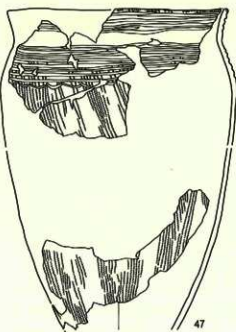
44



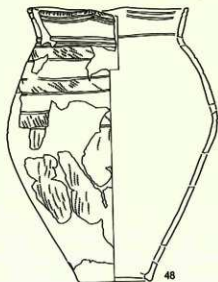
45



46



47



48



図IV-205 包含層出土の土器2例